

な
か
那珂 75

— 那珂遺跡群149次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1287集

2016

福岡市教育委員会

な
か
那珂 75

— 那珂遺跡群149次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1287集



調査番号 1401
遺跡記号 NAK-149

2016

福岡市教育委員会

題字は、福岡市博多区堅粕在住の濱フミコ氏の揮毫による



調査区全景（北から）



1) 65号井戸断面（北から）



2) 12号井戸断面（南から）

序

はるか二千年余の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十世紀の今日もアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、福岡市博多区竹下五丁目で集合住宅が建設されるのに伴って実施した那珂遺跡群第149次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代から古墳時代の井戸や竪穴住居、大溝と中世の井戸や土坑・溝などの集落に伴う遺構が発見されました。なかでも弥生時代の大溝は、西へ矩形に延びて320m余も続き、その覆土中からは銅戈などの青銅器の鋳型が出土しています。また、弥生時代と中世の井戸は、同じ素掘りの井戸ながらその規模や構造に大きな違いが観られ、井戸を研究する上で貴重な資料となるものです。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。調査に際しご理解をいただきました株式会社タイハイ様には心よりお礼申し上げます。

また、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

.....れいげん.....

1. 本書は、福岡市教育委員会が集合住宅の建築に先立つて、平成 26（2014）年 4 月 7 日～8 月 8 日までに福岡市博多区竹下五丁目 290 番で緊急発掘調査した那珂遺跡群第 149 次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 道構は、堅穴住居を SC、井戸を SE、土坑を SK、溝状道構を SD、ピットは SP と記号化して呼称し、その後にすべての道構を通番して 01 からナンバーを付した。
4. 本書に掲載した道構の実測と製図は小林義彦が、遺物の実測と製図は小林と谷直子が作成した。
5. 本書に掲載した道構と遺物の写真は小林が撮影した。ただし、全景写真是 I 区と II 区を分割して撮影したものを作成した。
6. 本書の執筆は、主に小林が行ったが、12・63 号井戸出土の木製品は谷が執筆した。また、銅戈の鋒型については田尻義了（九州大学アジア埋蔵文化財研究センター准教授）氏の玉稿をいただいた。編集は小林と谷が協議して行った。
7. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：1401	遺跡略号：NAK-149	分布地図番号：024-0085
調査地籍：福岡市博多区竹下五丁目290番		
工事面積：1,335nf	調査対象面積：659nf	調査実施面積：599nf
調査期間：2014年4月7日～8月8日		

本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. 弥生時代の調査	11
1) 井戸	11
2) 溝	14
3. 古墳時代から古代の調査	27
1) 墓穴住居	27
2) 土坑	26
4. 中世の調査	28
1) 井戸	29
2) 土坑	30
3) 溝	41
5. そのほかの遺構と包含層の遺物	42
III. おわりに	42
付論 那珂遺跡群第149次調査出土の中細形銅戈鋌型について（田尻義了）	53

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2 那珂遺跡群位置図 (1/10,000)	4
Fig. 3 那珂遺跡群第149次調査区位置図 (1/800)	5
Fig. 4 那珂遺跡群第149次調査区周辺現況図 (1/400)	6
Fig. 5 遺構配置図 (1/200)	10
Fig. 6 弥生時代の遺構配置図 (1/400)	11
Fig. 7 65・122号井戸実測図 (1/40)	11
Fig. 8 122号井戸出土遺物実測図 (1/4)	12

Fig. 9	82号溝実測図 (1/100)	13
Fig.10	82号溝土層断面実測図 (1/60)	14
Fig.11	82号溝上層出土遺物実測図 (1/2・1/4)	15
Fig.12	82号溝中層出土遺物実測図 1 (1/4)	16
Fig.13	82号溝中層出土遺物実測図 2 (1/4)	17
Fig.14	82号溝中層出土遺物実測図 3 (1/4)	18
Fig.15	82号溝中層出土遺物実測図 4 (1/4)	19
Fig.16	82号溝中層出土遺物実測図 5 (1/4・1/8)	20
Fig.17	82号溝中層出土遺物実測図 6 (1/4)	21
Fig.18	82号溝中層出土遺物実測図 7 (1/4)	22
Fig.19	82号溝中層出土遺物実測図 8 (1/4)	23
Fig.20	82号溝中層出土遺物実測図 9 (1/4)	24
Fig.21	82号溝下層出土遺物実測図 (1/4)	25
Fig.22	82号溝出土遺物実測図 1 (1/1・1/3・1/4)	26
Fig.23	82号溝出土遺物実測図 2 (1/3)	27
Fig.24	古墳時代から古代の造構配置図 (1/400)	27
Fig.25	8・14・17号住居実測図 (1/60)	28
Fig.26	17号住居出土遺物実測図 (1/3)	29
Fig.27	19・64・106号土坑実測図 (1/40)	29
Fig.28	中世の造構配置図 (1/400)	30
Fig.29	2号井戸実測図 (1/40)	31
Fig.30	2号井戸出土遺物実測図 (1/4)	31
Fig.31	12号井戸実測図 (1/40)	32
Fig.32	12号井戸遺物出土状況実測図 (1/20)	32
Fig.33	12号井戸出土遺物実測図 (1/2・1/4・1/8)	33
Fig.34	13号井戸実測図 (1/40)	34
Fig.35	63号井戸実測図 (1/40)	35
Fig.36	63号井戸出土遺物実測図 (1/4・1/8)	36
Fig.37	4号土坑実測図 (1/30)	37
Fig.38	4号土坑出土遺物実測図 (1/3)	37
Fig.39	11号土坑実測図 (1/40)	37
Fig.40	15・16・25・60・61・62・123号土坑実測図 (1/40)	38
Fig.41	81号土坑実測図 (1/40)	39
Fig.42	81号土坑出土遺物実測図 (1/2・1/4)	39

Fig.43	1・3・10・20・21・22号溝実測図（1/100・1/200）	40
Fig.44	3号溝土層断面実測図（1/40）	41
Fig.45	3号溝出土遺物実測図（1/2）	41
Fig.46	20号溝出土遺物実測図（1/4）	41
Fig.47	その他の遺構と包含層出土遺物実測図（1/1・1/3）	42
Fig.48	那珂149次調査区周辺の弥生時代遺構分布図（1/2000）	43
Fig.49	那珂遺跡群第149次調査区周辺出土鉄造関連遺物（1/3）	54
Fig.50	那珂遺跡群第149次調査区周辺出土鉄造関連遺物分布図	55
Fig.51	製品との重ね合せ図	55

表目次

Tab. 1	那珂遺跡群発掘調査一覧表 1	7
Tab. 2	那珂遺跡群発掘調査一覧表 2	8
Tab. 3	那珂遺跡群発掘調査一覧表 3	9
Tab. 4	出土土器観察表 1	44
Tab. 5	出土土器観察表 2	45
Tab. 6	出土土器観察表 3	46
Tab. 7	出土土器観察表 4	47
Tab. 8	出土土器観察表 5	48
Tab. 9	出土土器観察表 6	49
Tab.10	出土土器観察表 7	50
Tab.11	出土土器観察表 8	51
Tab.12	出土土器観察表 9	52

図版目次

卷頭図版 1	調査区全景（北から）	
卷頭図版 2	1) 65号井戸断面（北から）	2) 12号井戸断面（南から）
PL. 1	1) I 区全景（西から）	2) II 区全景（北から）
PL. 2	1) 65・122号井戸断面（北から）	2) 65号井戸遺物出土状況（北から）
	3) 122号井戸遺物出土状況（北から）	

- PL. 3 1) 82号溝全景（西から） 2) 82号溝土層断面（南から）
3) 82号溝北端部上層遺物出土状況（西から）
- PL. 4 1) 82号溝北端部上層遺物出土状況（北から）
2) 82号溝北端部上層紡錘車出土状況（南から）
3) 82号溝中層遺物出土状況（南から）
- PL. 5 1) 82号溝中層遺物出土状況（北から） 2) 82号溝中層遺物出土状況（南から）
3) 82号溝中層遺物出土状況（東から）
- PL. 6 1) 82号溝中層遺物出土状況（東から） 2) 82号溝中層遺物出土状況（東から）
3) 82号溝中層石錐未製品出土状況（南から）
- PL. 7 1) 8・17号住居（南から） 2) 9・14号住居、11号土坑（東から）
3) 19号土坑（東から）
- PL. 8 1) 64号土坑（北から） 2) 64号土坑（東から）
3) 106号土坑（南から）
- PL. 9 1) 2号井戸（東から） 2) 2号井戸（北から）
3) 2号井戸断面（西から）
- PL.10 1) 12・13・63号井戸、15号土坑（北から） 2) 12号井戸断面（南から）
3) 12号井戸底遺物出土状況（南から）
- PL.11 1) 12号井戸底遺物出土状況（南から） 2) 12号井戸ザル出土状況（南から）
3) 12号井戸鋤・曲げ物出土状況（東から）
- PL.12 1) 13・63号井戸（北から） 2) 13号井戸（北から）
3) 13号井戸断面（南から）
- PL.13 1) 63号井戸断面（南から） 2) 63号井戸底遺物出土状況（南から）
3) 15号土坑から63号井戸への流水路（南から）
- PL.14 1) 4号土坑（東から） 2) 11号土坑（西から）
3) 15号土坑（北から）
- PL.15 1) 16号土坑（北から） 2) 25号土坑（東から）
3) 81号土坑（西から）
- PL.16 1) 1号溝（北東から） 2) 3号溝（東から）
3) 10・20・21号溝（東から）
- PL.17 出土遺物（縮尺不同）
- PL.18 出土遺物（縮尺不同）

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

那珂遺跡群は、福岡平野の東西を北流する那珂川と御笠川の両河に挟まれて長くのびる春日丘陵の北部に位置し、昭和40年代にはのどかな田園風景が広がっていた。しかし、急速に進む郊外の市街化で丘陵上は宅地化し、更には筑紫通りなどの整備によって建物の高層化が進んでいる。竹下5丁目周辺は、JR九州鹿児島線の竹下駅に近く竹下通りに面した利便性の高い地域で商業施設や高層化したマンションが建ち並び、昔日のどかな田園風景は次第に失われつつある。

那珂遺跡群の立地する那珂丘陵は、春日丘陵から比恵へと延びる低丘陵の中の一支丘で、周辺の発掘調査例からその丘陵上には弥生時代や古墳時代、古代の遺構が濃密に広がっている。那珂1丁目から竹下5丁目は、この那珂丘陵の真っ只中にあり、近隣の調査例から遺構の存在が十分に予測された。平成17（2005）年に、この竹下5丁目290番の地での開発が計画され、埋蔵文化財の有無についての照会が申請された。これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財の包蔵地内であることから平成17（2005）年9月13日に確認調査を実施した。その結果、申請地内には弥生時代や古墳時代および中世の遺構が広がっていることが確認され、遺構の保全について申請者と協議したが、協議半ばで開発計画が中止になり、沙汰止みとなった。そのような状況下の平成25（2013）年9月13日に株式会社タイハイから当該地に高層住宅の建設設計案が示された。この地は、平成17年の確認調査で遺構が確認されていることから基礎工事によって埋蔵文化財が破壊を免れない部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。この合意に基づいて申請者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成26年度に発掘調査を、また平成27年度に資料整理と発掘調査報告書の作成を行うことになった。

発掘調査は、平成26（2014）4月7日から開始し、8月8日に調査を終了した。この年は、雨の日が多く、殊に梅雨末期から孟蘭盆までは連日の雨で調査に支障が生じた。この悪条件下でも調査を終了できたのは作業に従事した方々や関係者諸氏の協力によるところが大きい。改めて謝意を表します。

2. 発掘調査の組織

委託者 株式会社 タイハイ

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 文化財部埋蔵文化財調査課

埋蔵文化財調査課長 常松幹雄

埋蔵文化財調査課第1係長 吉武 学

調査庶務 埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

調査担当 埋蔵文化財調査課調査第1係 小林義彦

技能員 谷 直子

調査・整理作業 伊藤美伸 上原尚子 浦崎てい子 坂梨美紀 高瀬美智子 田中朋香 田中トミ子

知花繁代 遠山 煉 土斐崎孝子 西田文子 濱フミコ 日高芳子 藤木久美

北條こず江 増田ヒロ子 松下さゆり 松下楓季 舟田典子 宮元ア希世

森田祐子 山本加奈子 渡部律子

発掘調査および資料整理にあたっては、常松幹雄・吉武学（福岡市埋蔵文化財調査課）・米倉秀紀（埋蔵文化財審査課）の各氏から貴重な指導と助言を頂いた。また、金属器および木製品の保存処理は福岡市埋蔵文化財センターの田上勇一郎・上角智希が実施した。改めて謝意を表します。

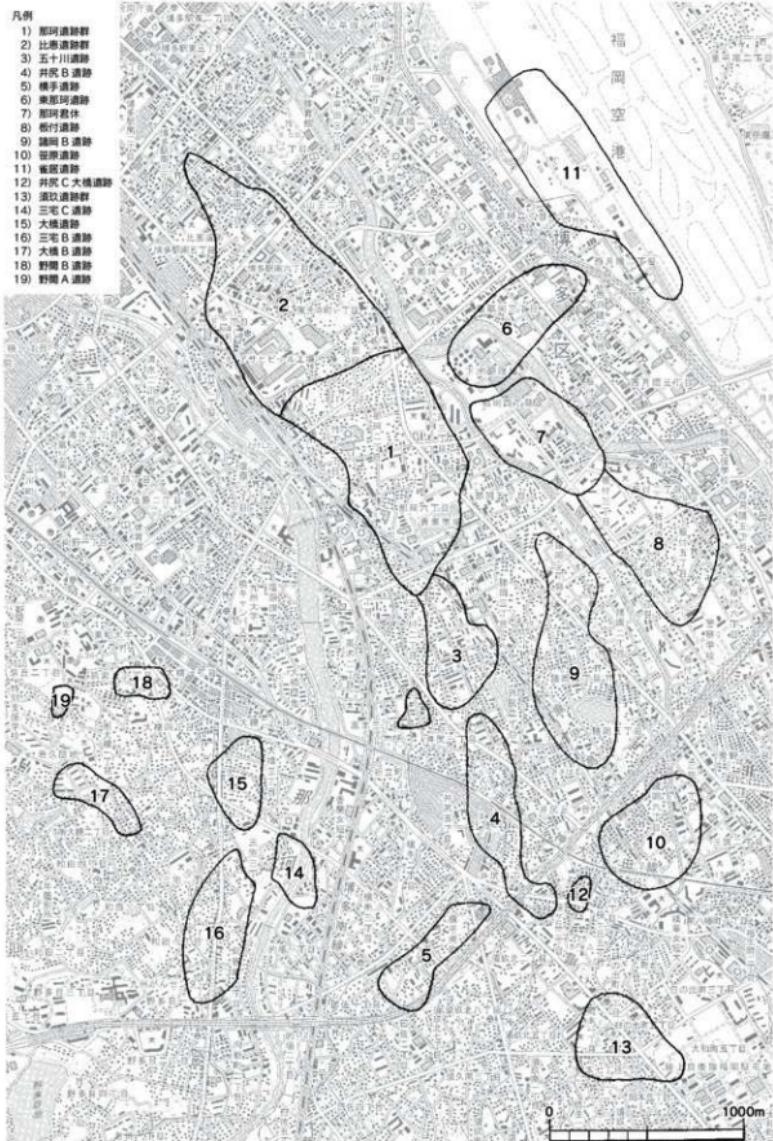


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

3. 立地と歴史的環境

那珂遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘に向かって開口する博多湾に面した沖積平野である。この福岡平野には那珂川と御笠川が北流して博多湾に注ぎ込み、その両川の間には觀音山や牛頭から派生して断続的に長くのびる洪積台地が形成されている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層には阿蘇山の火碎流による八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。この春日丘陵は、奴国王の王墓地とされる須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続いて博多湾の海岸砂丘に北面しており、それらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連続と複合的に展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

那珂遺跡群は、この春日丘陵の北部に位置し、比恵遺跡群と連続して同じ丘陵上に立地しており、その東には御笠川が、また西には那珂川は北流しており、丘陵の裾部には両河によって造り出された開析谷が幾筋も弯入している。那珂遺跡群は、この南北に長く連なる比恵・那珂遺跡群の南半部に位置し、比恵遺跡群とは、浅い鞍部を境として北半部を比恵遺跡群、南半部を那珂遺跡群と便宜的に呼称している。

この那珂丘陵の中央部の尾根線上の最高所には、福岡平野で最古期の前方後円墳である那珂八幡古墳があり、その北西には東光寺剣塚古墳が、また南西部には前方後方墳や円墳群が広がっている。この尾根線を境として丘陵は、東西の大河にむかって緩やかに緩傾斜し、その間には可耕地としての低湿地帯が広がり、裾野には両川の開析による細長い開析谷が幾筋も弯入している。

この那珂・比恵遺跡群では、1938（昭和13）年の区画整理時に発見された環濠集落（1次調査区）の調査以来、これまでに300カ所に及ぶ地点で発掘調査が実施され、台地上において連綿と営まれた各時代の集落や墳墓地の様相が次第に明らかになりつつある。ここで那珂遺跡群を概観すると、丘陵の南東縁（38・41次調査区）で、ナイフ形石器や彫器、剥片などの旧石器時代の遺物が出土しているが、散逸的な分布を示すにすぎない。

次の縄文時代も早期から晩期前半までは、石鏃や石匙、土器片などが断片的に出土しているが、遺構に伴った明確なものはなく、その在り様は前時代と大差はない。この傾向は、比恵遺跡群においても同様である。

これが弥生時代なると一変し、台地の縁辺部で堅穴住居や貯蔵穴群などの遺構が広がり、開析谷に面した緩斜面には土器や石器、木器を伴う包含層が形成される。集落域は尾根上へと次第に拡大していく。台地の南西縁（37次調査区）に夜臼期から前期前半の二重環濠集落が営まれる。また、中央部の尾根上（67次調査区）でも貯蔵穴群を伴った環濠集落が営まれ、北西縁のアサヒビール工場内や東縁部にも貯蔵穴群が広っている。前期後半から中期になると集落域は、縁辺部から尾根上へと次第に拡大していく。比恵遺跡群も同様で集落域の拡大傾向が見られる。

中期後半から後期には、那珂・比恵遺跡群とも台地上には、堅穴住居や井戸を伴う集落域が全域に亘って広がり、その中には銅劍や銅矛など銅製品の鋳型や中子、埴堀など青銅器の生産を示唆する遺物も出土しており、青銅製品の生産に携わる工人集団の工房群が台地の尾根上に存在したことが窺われる。また、集落域の周辺には埴丘墓をはじめとする壟植墓群も造営され、遺跡の性格も拡大・多様化する。比恵遺跡群の中央部に位置する6次調査区では、細形銅劍を副葬する壙植墓を埋葬した埴丘墓も出現し、遺物も銅製錘先や鍛造鉄斧などの金属器や各種木製農工具、建築材、漆製品など多種多様なものが出土している。

古墳時代になると、台地の中央部に福岡平野で最古の前方後円墳である全長が85mの那珂八幡古墳

が造営され、主体部の木棺内に三角縁神獸鏡や玉類が副葬されていた。これに続いて6世紀後半には、那珂八幡古墳周辺の台地上に東光寺劍塚古墳と劍塚北古墳の2基の前方後円墳のほか前方後方墳が造営される。このうち、東光寺劍塚古墳は、全長が140mで三重の周溝をもつ筑前地域で最大級の前方後円墳である。この時期の集落は、那珂から比恵の台地上に広く展開する。また、規格性の高い3本柱の柵列に囲まれた大型建物群も台地上の各所に出現する。殊に、紀記に記された「那津官家」とされる大型建物群が、比恵遺跡群北西部（8次・72次・109次調査区）にあり、中央部（7・13次調査区）にも南に巨大な門を配した3柱の柵列群や大型建物群が広がっており、全体として「那津官家」を形成していたと考えられ、平野内の拠点的な集落として一翼を担っていたことが想起される。

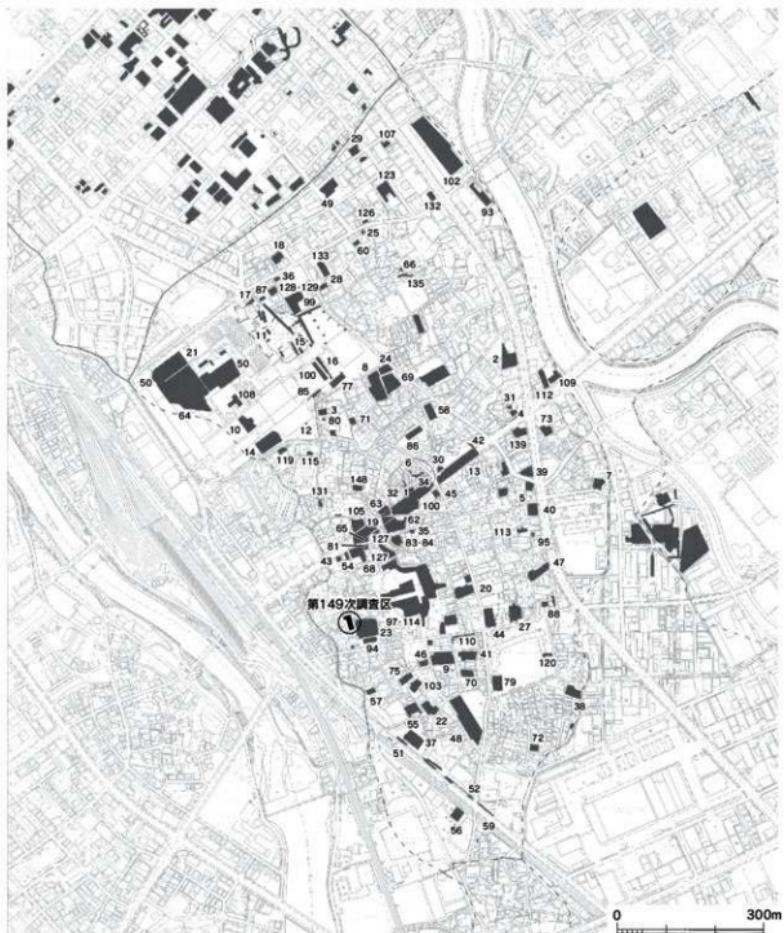


Fig. 2 那珂遺跡群位置図 (1/10,000)

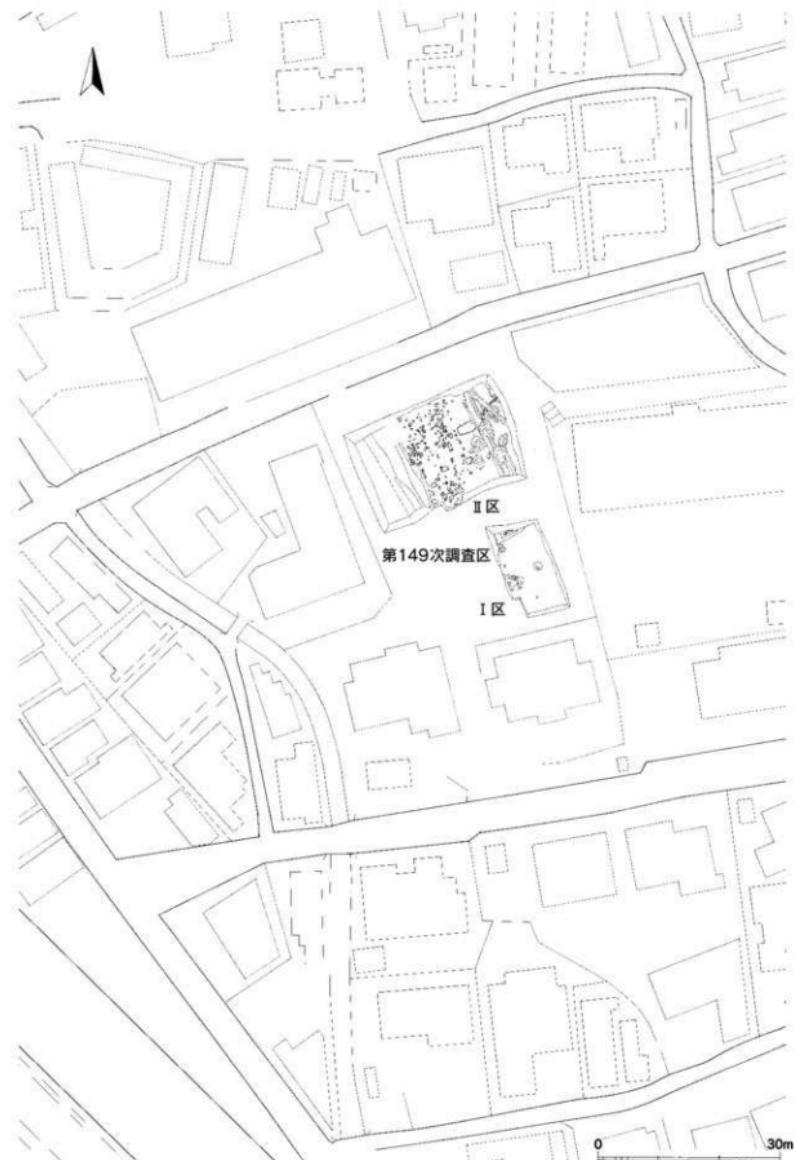


Fig. 3 那珂遺跡群第149次調査区位置図 (1/800)

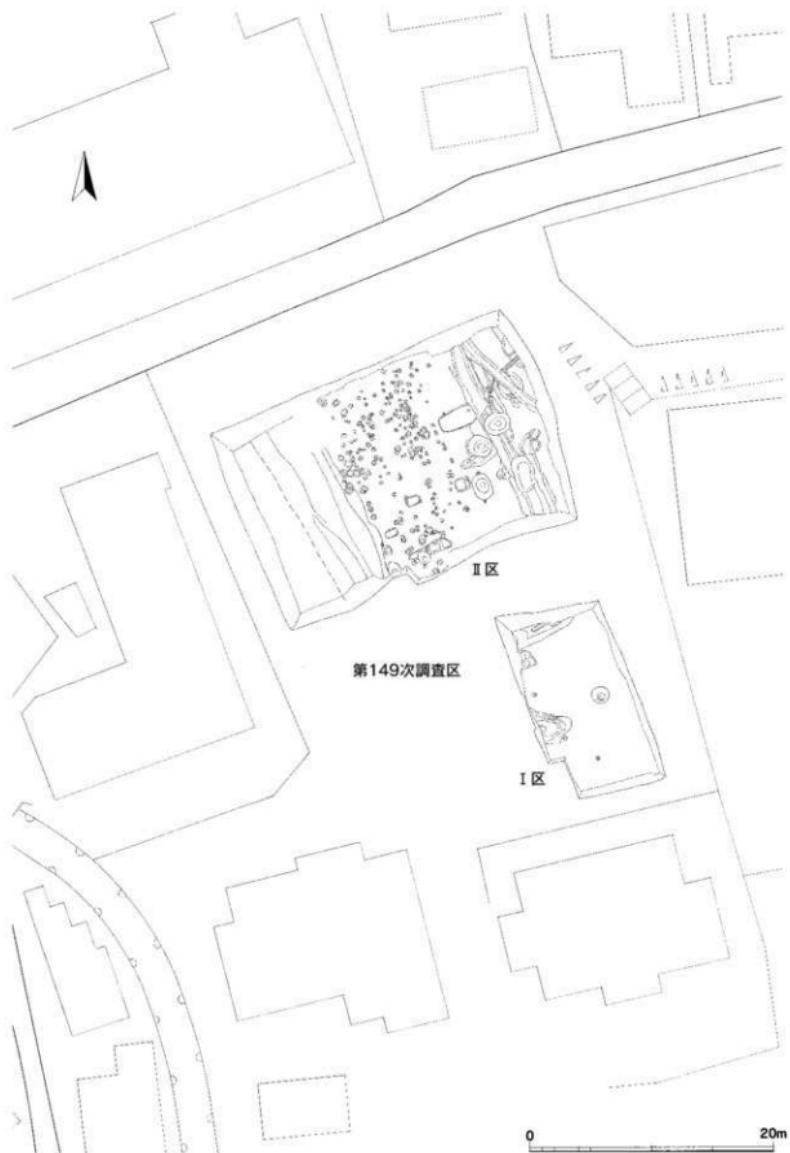


Fig. 4 那珂遺跡群第149次調査区周辺現況図 (1/400)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

那珂遺跡群は、春日市の須崎岡本から井戸を経て那珂、比恵へと北へのびる標高が10m余の洪積台地の北部に位置し、東西が700m、南北が2,000mの範囲に亘って広がっている。この那珂丘陵は本来的には11~12m余の丘陵で、その尾根上には那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳などの前方後円墳や前方後方墳などがあり、その周辺には弥生時代の壺棺墓や土坑墓などの墳墓域と竪穴住居や貯蔵穴群などの集落域をはじめ、古墳時代や古代の遺構群が広く複合的・重層的に展開している。

第149次調査区は、この那珂遺跡群の中央西縁に位置し、足下には那珂川の氾濫源が丘陵に沿って広がり、周辺域には那珂川の浸食による開析谷が窓入している。また、調査区の北130mには丘陵を横断する竹下通りがあり、その沿線には福岡平野で最古の前方後円墳である那珂八幡古墳がある。一方、本調査区の南西に接する第23次調査区では、弥生時代から古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、土坑、溝と古代から中世の井戸や土坑が検出され、古墳時代の竪穴住居は50棟を越えて重複が著しい。第149次調査の対象域は、立体駐車場と高層ビルの2地点に分かれ、立体駐車場となる南東隅部をI区、高層ビル本体の北半部をII区と仮称し、平成26(2014)年4月8日に調査機材の搬入と同時にバワーショベルによってI区の表土層の除去作業から開始した。その結果、現表土下20~45cmで基盤層の鳥栖ローム層を検出した。しかしながら、本調査区にはかつて練炭工場があり、それ故に至る所に搅乱坑が広がっており、その除去に多くの時間を費やした。I区の調査終了後は直ちにII区の調査に着手した。検出した主な遺構は、弥生時代、古墳時代、古代、中世の4期に大別される。弥生時代の遺構は、井戸・大溝、古墳時代から古代は竪穴住居や土坑、中世は井戸と土坑、溝がある。殊に、弥生時代の大溝は、丘陵の西縁に抜がる那珂川の氾濫原上に開削された幅が6m余の大溝で、その埋土からは壺や甕など多種多様な土器のほかに石器や土製品、玉類が出土した。なかでも特筆すべきは銅戈の鋒型片が出土したことである。このような多数の遺構を検出して同年8月8日に無事終了した。

遺構の実測は、調査区の南北方向に任意の主軸線を設定した主軸ラインを基準に10mの方眼を組んだ。更に、その中に2mのメッシュを組み込み、東から西へa~o、北から南へ1~23とした。南北の主軸ラインは、磁北から17° 41' 西偏している。

Tab.1 那珂遺跡群発掘調査一覧表1

調査番号	報告書	所在地	調査期間	調査面積 (m ²)	時代	概要	出土遺物
1 7000	未記	那珂川丁目44	1974.03.5~1974.04.9	24 穴地	六角、舟形、那珂八幡古墳の周囲		
2 7414	調査会	那珂川丁目44	1974.03.9~1974.03.19	250 穴地+中井	中井、土坑	出土土器・石器・須恵器・土器・陶器・瓦	
3 8000	82	那珂川丁目42	1983.03.1~1983.03.17	140 穴地+大溝	土坑	土器	
5 8226	午前	那珂川丁目377-2.3	1983.03.20~1983.03.20	100 井戸・大溝・中井	井戸、土坑、柱穴	出土土器・石器・須恵器	
6 8603	午後	那珂川丁目44	1983.03.21~1983.07.09	554 穴地	那珂八幡古墳の周囲の遺跡調査	角柱神籠石・土器・土器	
7 8630	182	那珂川丁目42	1983.10.6~1986.01.27	495 穴地+中井	土坑、壺棺墓、古墳、竪穴住居・掘立柱建物・溝、中井、溝・柱穴	出土土器・石器・須恵器・土器・陶器・須恵器・瓦	
8 8609	153	那珂川丁目601	1986.04.21~1986.07.03	1350 穴地+中井	土坑、竪穴・掘立柱建物、壺棺・竪穴住居・古代、土器・柱穴	音諦器・筒状陶器・土器	
9 8703	208	竹下丁目463	1987.04.5~1987.05.04	1030 井戸・古墳	井戸、井戸、古墳	音諦器・品々・土器・瓦	
10 8727	295	竹下丁目1-1	1987.04.7~1987.05.07	862 井戸・古墳・中井	井戸、土坑・古墳・掘立柱建物・土坑・中井・土坑・溝	筒状陶器・土器・須恵器・瓦	
11 8723	291	竹下丁目1-1	1987.05.9~1987.10.01	31 井戸	井戸	出土土器・木品	
12 8723	291	竹下丁目1-1	1987.05.9~1987.10.03	20 井戸	井戸	出土土器	
13 8736	222	那珂川丁目	1987.1.04~1988.03.03	1320 穴地+古墳	土坑・竪穴・古墳・中井	音諦器・土器・土坑・竪穴・古墳・土坑・古墳	ナノフ形石器・舟形系丸瓦
14 8802	295	竹下丁目1-1	1988.06.02~1988.06.31	1180 井戸・古墳・中井	井戸、竪穴・土坑・古墳・土坑・中井・掘立柱建物・土坑	音諦器・品々・土器・瓦	
15 8832	297	竹下丁目1-1	1988.03.25~1988.06.02	250 井戸・古墳	井戸・古墳	音諦器・土器	
16 8849	323	竹下丁目1-1	1988.03.04~1988.03.21	240 井戸・古墳・中井	井戸、壺棺墓・土坑・土坑・中井・土坑・中井・土坑・中井・土坑	出土土器・土坑・壺棺墓・輪入鉢形器	
17 8849	295	竹下丁目1-1	1988.03.04~1988.03.21	176 古墳・中井	古墳・古墳周囲、中井・井戸	土器	
18 8950	26	東山1丁目333地2-5	1988.06.25~1988.07.14	413 井戸・古墳・中井	井戸・土坑・古墳・壺棺・土坑・柱穴・掘立柱建物・中井・土坑・土器・瓦	音諦器・土器・石器・土器・須恵器・土器・瓦・瓦	
19 8953	292	竹下丁目3	1988.06.25~1988.06.24	463 井戸・古墳・中井	井戸・若藏穴・土坑・古墳・中井・土坑・中井	輪入鉢形器・土器	
20 8906	324	那珂川丁目257	1988.06.17~1988.06.24	730 土坑・古墳・中井	土坑・中井・土坑	中広・圓光院式・土器・鋏頭曲先	
21 8925	291	竹下丁目1-1	1988.06.08~1988.06.16	196 井戸・古墳・古井	井戸・若藏穴・土坑・土坑・古墳・中井・土坑	音諦器・土器・石器・土器・須恵器・土器	
22 8925	293	竹下丁目1-1	1988.06.08~1988.06.16	196 井戸・古墳・古井	井戸・若藏穴・土坑・土坑・古墳・中井・土坑	新丸瓦・土瓦	
23 8926	24-24	竹下丁目182-203	1988.07.10~1988.07.14	1428 井戸・古墳・中井	井戸・中井・掘立柱建物・土坑・土坑・溝	出土土器・石器・須恵器・瓦・瓦・圓光院式・土器	
24 8982	半耕田	那珂川丁目35	1988.08.02~1988.08.03	325 井戸・中井	井戸・中井	出土土器・石器	

Tab.2 那珂遺跡群發掘調査一覧表 2

調査 番号	報告書 名	所在施 設	調査期間 (日)	調査面積 (m ²)	時代	種類	出土遺物
25 9065	東北1丁目228	19890802-19890921	100	古墳・中世	古墳・柱穴・古墳・溝		土輪器・漆器部・刀劍類
26 9002	409 低岡2丁目249	19900401-19900616	436	古墳・古代・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古代・聖穴式住居・土坑	陶牛・土器・石器系灰瓦
27 9003	低岡2丁目7-12	19900401-19900616	256	古墳・古代・中世	古墳・土坑・溝	古墳・土坑・溝	ナガワ形石器・削正器・五貫上器・白磁
28 9008	291 亂原2丁目312	19900505-19900609	150	中世	中世・地下式窯穴・溝	中世・地下式窯穴・溝	瓦質・土器・削正器
29 9036	361 亂原2号	19900802-19900825	313	古代・中世・近世	古墳・溝・土坑	古墳・溝・土坑	土器・削正器・木製品・漆器・鏡
30 9046	292 亂原1丁目621	19901203-1990215	80	古墳・古代	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	削正器
31 9055	292 大字那珂町那珂2802-15	19901203-1990215	123	古墳・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	土器・土器・削正器
32 9115	363 亂原1丁目792	19910709-19910930	1300	古墳・古代・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	木製品・削正丸
33 9125	364 亂原2丁目249	19910903-19911014	275	中世	中世・墓	中世・墓	瓦器・削正丸
34 9144	362 亂原1丁目624	19920708-19920930	1100	古墳・古代・中世	古墳・溝・土坑	古墳・溝・土坑	瓦器・削正丸
35 9145	363 亂原2丁目213	19920810-19920930	100	中世	中世	中世	瓦・丸瓦
36 9217	平松2丁目2-1	19920808-19930322	154	古墳・中世	古墳・柱穴・溝・土坑	古墳・柱穴・溝・土坑	土器・土器・削正器・瓦器
37 9224	366 亂原6丁目314	19920820-19930605	215	古墳	古墳・柱穴式住居	古墳・柱穴式住居	土器・土器・土器・削正器
38 9225	369 亂原6丁目863	19930709-19930906	566	古墳・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	土器・土器
39 9226	369 亂原1丁目362	19930808-19931001	493	古墳・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	土器・土器
40 9226	369 亂原1丁目5	19930818-19930913	496	古墳・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	土器・土器
41 9304	369 乱1丁目509	19930913-19930932	500	古墳・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	土器・土器・土器・削正器
42 9308	369 亂原1丁目476	19930912-19930931	63	古墳・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	土器・土器・土器・削正器
43 9315	1年期 竹7丁目1122	19930907-19930926	132	中世	中世・土坑	中世・土坑	土器・土器
44 9326	368 亂原2丁目122-123	19930914-19931001	82	古墳・古代・中世	古墳・柱穴式住居	古墳・柱穴式住居	土器・土器・土器・瓦器・熟製品
45 9333	1年期 亂原1丁目829	19930918-19930926	162	中世	中世	中世	陶器
46 9347	369 竹7丁目4322	19931010-19931206	256	古墳・中世	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	古墳・聖穴式住居・溝・土坑	土器・土器・土器・瓦器
47 9407	454 亂原2丁目1061	19940818-19940928	430	古墳・中世・近世	古墳・柱・中世・近世・施工跡・施工式土坑・土坑	古墳・柱・中世・近世・施工跡・施工式土坑・土坑	土器・土器・瓦器
48 9437	455 亂原2丁目290	19940911-19941012	2500	古代・中世・近世	古代・井・中世・近世	古代・井・中世・近世	土器・土器・瓦器
49 9438	455 亂原2丁目1148	19940903-19941012	723	古墳・中世	古墳・柱・中世	古墳・柱・中世	土器・土器・石器・瓦器・削正器・土器・土器
50 9441	518 竹7丁目1-1	19940820-19941201	3000	古墳・中世	古墳・柱・中世	古墳・柱・中世	土器・土器・木製品・竹筒形土器・土器・土器
51 9512	525 亂原6丁目20	19950222-19950627	38	中世	中世	中世	土器
52 9513	525 亂原6丁目21	19950301-19950627	241	古墳	古墳・柱・中世	古墳・柱・中世	土器
53 9520	525 亂原6丁目22	19950901-19951020	630	古墳	古墳・柱・中世	古墳・柱・中世	土器
54 9530	525 亂原1丁目8-2	19951009-19951012	95	古墳	古墳・井	古墳・井	土器
55 9530	500 竹7丁目2759	19960213-19960224	536	古墳・古代・中世	古墳・柱・中世	古墳・柱・中世	土器・土器・石器・瓦器・削正器・土器・土器
56 9556	500 竹7丁目11-1	19960310-19960316	296-561	古代・中世	古代・柱・柱穴式住居・中世	古代・柱・柱穴式住居・中世	土器・土器・石器・瓦器
57 9606	556 竹7丁目19-32	19960603-19960702	120	古墳・中世	古墳・柱・柱穴式住居	古墳・柱・柱穴式住居	土器・土器・瓦器
58 9619	563 亂原1丁目496-497	19960704-19960805	486	古墳・中世	古墳・柱・柱穴式住居・井・土坑	古墳・柱・柱穴式住居・井・土坑	土器・土器・瓦器
59 9645	564 亂原6丁目	19961014-19961115	178	古墳・中世	古墳・土坑	古墳・土坑	土器
60 9702	601 亂原1丁目2122	19970402-19970602	156	古代・中世	古墳・柱・柱穴式住居	古墳・柱・柱穴式住居	土器・土器
61 9709	51年半12月半2861	19970414-19970414	20	古墳	古墳・柱	古墳・柱	土器
62 9711	597 亂原1丁目38-1893	19970608-19970718	100	古墳・中世・古代	古墳・柱・柱穴式住居・土坑	古墳・柱・柱穴式住居・土坑	土器・土器・瓦器
63 9724	597 亂原1丁目792	19970913-19970913	214	古墳・中世	古墳・柱・柱穴式住居	古墳・柱・柱穴式住居	土器・土器・土器・削正器
64 9741	638 竹7丁目13-13	19970802-19980820	4700	古墳・中世	古墳・柱・柱穴式住居	古墳・柱・柱穴式住居	土器・土器・瓦器
65 9770	597 竹7丁目14-2	19980202-19980216	95	中世	中世	中世	土器
66 9818	841 亂原1丁目18-2	19980608-19980625	80	古墳	古墳・柱・柱穴式住居	古墳・柱・柱穴式住居	土器
67 9856	672 亂原1丁目148	19980910-19990630	140	古墳・古代	古墳・柱・柱穴式住居	古墳・柱・柱穴式住居	土器・土器
68 9860	639 竹7丁目94	19990212-19990311	599	古・古・古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居・井・中世	古・古・柱・柱穴式住居・井・中世	土器・土器・土器・土器・瓦器
69 9900	900 亂原1丁目599-1-602	19990408-19990628	1088	古墳・中世	古・古・柱・柱穴式住居・井・中世	古・古・柱・柱穴式住居・井・中世	土器・土器・土器・土器・瓦器
70 9906	612 亂原1丁目500	19990613-19990631	229	古墳・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器・瓦器
71 9932	639 亂原1丁目1620	19990802-19991001	193	古墳・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器
72 9935	634 亂原6丁目153-154	19990903-19991006	164	古墳	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器
73 9948	733 亂原1丁目21-20	19991008-20000112	382	古墳・古代・中世	古・古・柱・柱穴式住居・土坑	古・古・柱・柱穴式住居・土坑	土器・土器・土器・土器・瓦器
74 9961	672 亂原1丁目19-20	19991208-20000308	596	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器・土器・瓦器
75 9971	714 竹7丁目433	20000310-20000414	250	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器・瓦器
76 9916	282 亂原2丁目4-6	20000601-20000606	132	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
77 0045	715 亂原1丁目3958	20000614-20000616	100	古・古	古・古	古・古	土器
78 0049	715 亂原1丁目4-6	20000615-20000625	611	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器・瓦器
79 0057	256 亂原1丁目181	20000626-20000716	176	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
80 0122	1033 亂原1丁目1621	20010712-20010816	525	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
81 0134	715 亂原1丁目40-42	20011006-20012113	1336	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器・土器・土器・瓦器
82 0142	1154 東北1丁目187-287-290	20011208-20020121	80	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
83 0146	18D 亂原2丁目213-214-3	20021120-20030110	200	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	瓦器・土器
84 0217	1003 亂原2丁目213-2	20020510-20030514	100	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
85 0230	861 77-23-11-0999509	20030627-20030918	161	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
86 0248	862 亂原1丁目580	20031205-20030211	370	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
87 0266	708 東北1丁目17-21	20030313-20030324	200	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
88 0313	1198 亂原2丁目4	20030512-20030627	867	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
89 0316	665 亂原1丁目187	20030519-20030627	150	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
90 0323	285 亂原1丁目187	20030610-20030625	475	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
91 0335	717-3-107-3-390-1	20030730-20030806	411	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器
92 0357	280 東北1丁目40-42	20030814-20030901	1907	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
93 0348	842 東北1丁目7	20030902-20031015	781	古・古	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
94 0361	843 亂原1丁目283-284	20031020-20040218	250	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器
95 0408	半29-1	20040112-20040129	204	古・古・中世	古・古・柱・柱穴式住居	古・古・柱・柱穴式住居	土器・土器・瓦器

Tab.3 那珂遺跡群発掘調査一覧表 3



Fig. 5 遺構配置図 (1/200)

2. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構としては、井戸2基と大溝を検出した。このうち82号溝と呼称した幅が5m余の大溝は、丘陵の縁辺に沿って南北流し、その覆土中からは弥生時代中期後半から後期の多種多様な遺物が重層的に検出された。また、柱穴の中には弥生土器を含むものもあるが、1棟の掘立柱建物としてはまとめ得なかった。

1) 井戸 (SE)

65号井戸 SE-65 (Fig. 7 卷頭2・PL. 2)

65号井戸は、II区の中央部の南壁際に位置する素掘りの井戸で、上縁の北半は64号土坑に削平されており、その西側2mの距離には122号井戸が隣接してある。平面形は、直径が95cmの円形プランを呈する。壁面は、井戸底にむかってほぼ垂直に窄まるが、底面より20~30cm上位に横断面形がV字状をした溝状の抉り込みを壁面から壁外に10cmほど掘り込んでいる。更に、壁面は、このV字状の抉り込みから直径が40cmの井戸底にむかって緩やかに傾斜していく。このV字状の抉り込みが鳥栖ローム層と八女粘土層との境界にあたり、ここが湧水点で地下水の浸透が観察された。検出面から井戸底までの深さは230cmで、標高は5.58mを測る。覆土は、上層が濃茶褐色土で中~下層は黒茶褐色土~暗黒灰色粘質土に漸次移行し、井戸底からは甕片が比較的まとまって出土したが、埋土の崩落によって位置の測定は出来なかつた。

122号井戸 SE-122

(Fig. 7・8 PL. 2・17)

122号井戸は、II区の南壁のやや西寄りに位置する素掘りの井戸で、東へ2mの距離には65号井戸がある。平面形は、南北長が125cm、東西長が105cmの卵形に近い椭円形プランを呈する。壁面

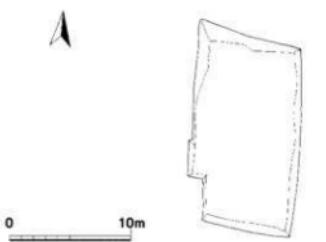
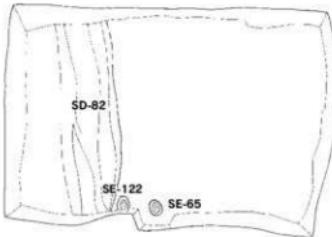


Fig. 6 弥生時代の遺構配置図 (1/400)

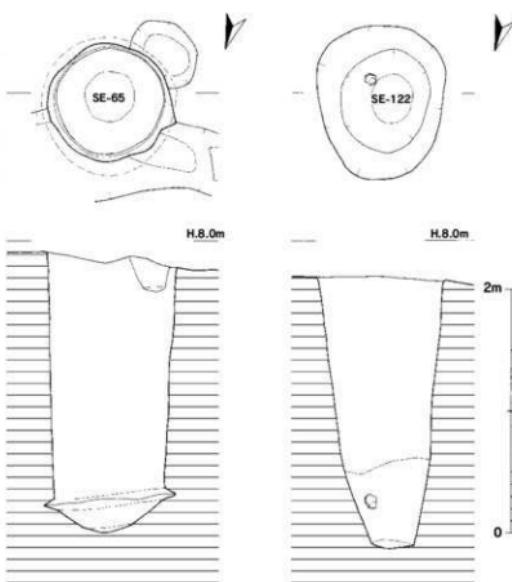


Fig. 7 65・122号井戸実測図 (1/40)

は、検出面より145~160cmの深さまでストレートに窄まった後に弱い変換点を形成し、そこから更に、35~40cm径の井戸底にむかって緩やかに窄まっていくが、西壁はやや急峻に傾斜していく。検出面から井戸底までの深さは225cmで、標高は5.47mで65号井戸とはほぼ同レベルである。壁面の弱い変換点より20~30cmほど下に鳥栖ローム層から八女粘土層へと移る地点があり、この八女粘土層のやや下の標高5.75~5.8m付近から湧水が観察された。65号井戸とは位置的に近接しており、湧水点の比高差はほとんど無いに等しい。覆土的には、65号井戸と大差なく、上層からロームブロックを含んだ暗茶褐色土、暗黒茶褐色土、暗黒灰色粘質土の順に堆積している。遺物は、下層から中期末の甕底などがわずかに出土した。

1は、銀先状口縁の丹塗り壺で頭部と胴部の境には1条の三角凸帯が巡る。外面の丹塗りは良く研磨されているが、口頭部内部は流しきけ状をなしている。2は丹塗りの瓢型壺で口縁部は銀先状をなす。頭部と胴部の境に1条の三角凸帯が、またふたつの胴部の接合部には各々1条のコ字凸帯と三角凸帯が巡る。3~6は、甕である。3は、直口して立ち上がる頭部に小さく外反する口縁部が付

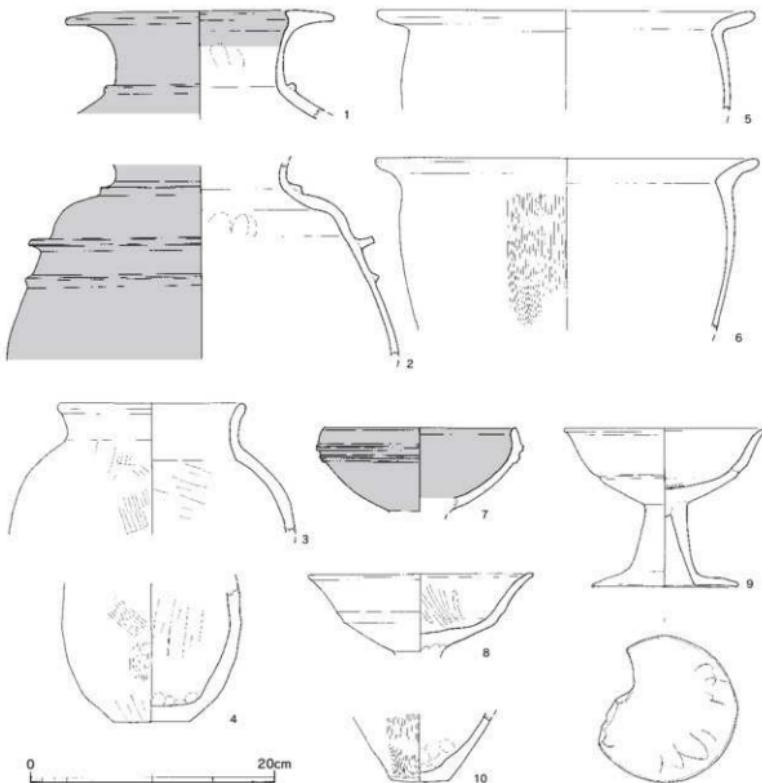
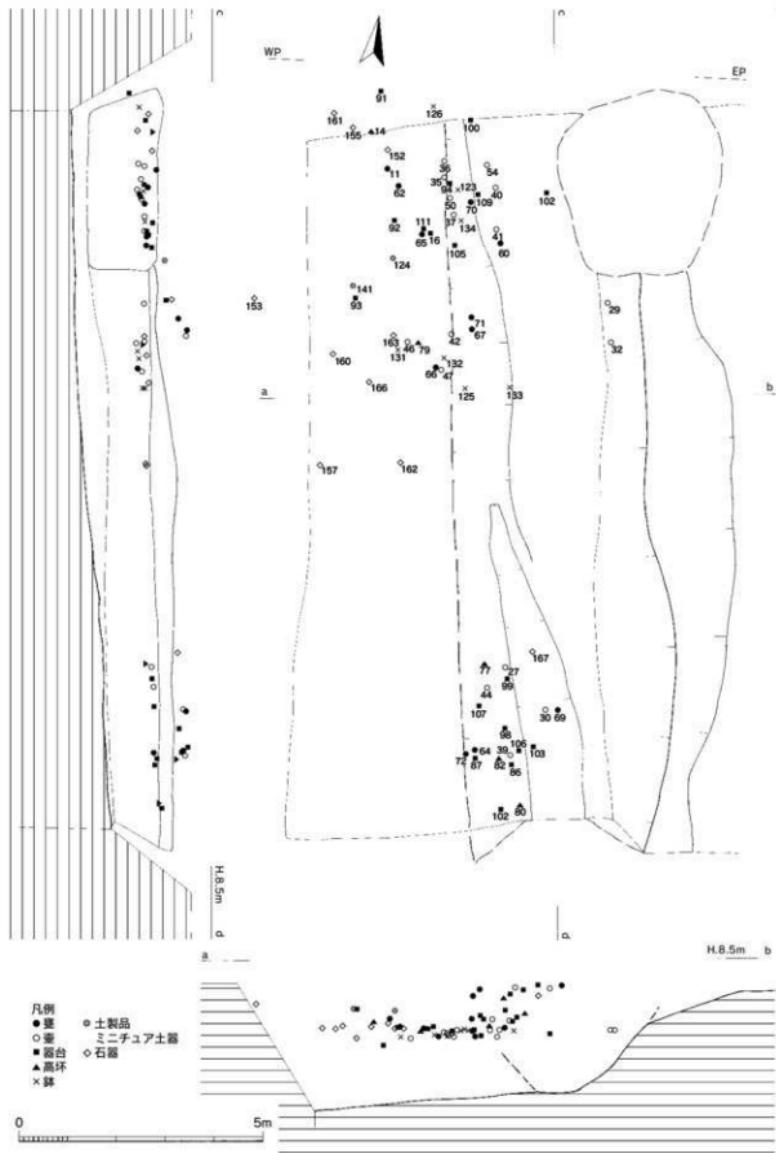


Fig. 8 122号井戸出土遺物実測図 (1/4)

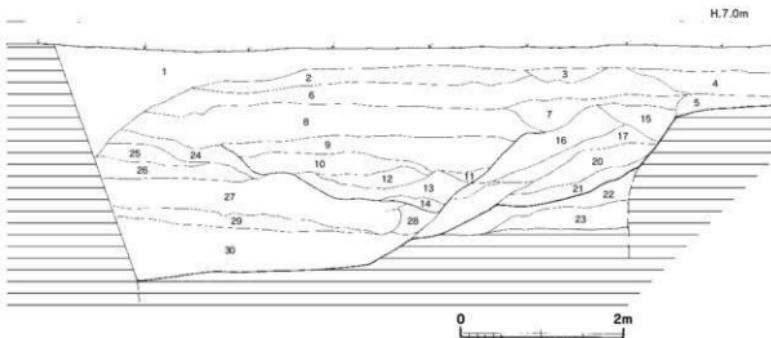


き、胴部は倒卵形をなそう。5・6は、口縁部が小さく「く」字状に外反する。7は、口縁部が偏球形の体部から小さく内弯して立ち上がり、その屈曲面に2条のM字凸帯が巡る。8・9は、口縁部が緩やかに外反する高坏である。9は、大きく開く脚裾の上面に花びら状あるいは波状の不可解な線刻を細く施している。

2) 溝 (SD)

82号溝 SD=82 (Fig. 9 ~ 23 PL. 3 ~ 6, 17, 18)

82号溝は、調査区の西辺に広がる那珂川の氾濫原上に掘り込まれた溝で、台地の西縁に添うように南北流する。溝は、幅が6~7m、深さが1.5~2.3mの大溝で、現長は15m。断面形は緩やかな逆台形をなしている。溝底のレヴェルは南端が6.45m、北端が5.8~6mで北にむかって流れる。基本的な層序は、概ね1~3層に大別される。上層は、弥生土器や土師器、須恵器等を含む黒色粘質土⑨で、20~40cmの厚さで凹レンズ状に堆積しているが、台地に沿った東側がやや厚くなる。次に中層は、層厚が40~50cmで上から濃黒茶褐色粘砂土⑩・黒褐色粘質土⑪・黒茶褐色土⑫が互層的に堆積し、その覆土中には弥生中期後葉~後期初めの壺や甕、高坏、器台等が重層的に堆積していた。下層は、黒色粘質土⑬の單一層で20~35cmの厚さで凹レンズ状に堆積しているが遺物的には中層に比べてやや少ない。最後にこの下層下には濃黒色粘質土が5~15cmの厚さでやや薄く堆積しているが、遺物は非常に少ない。遺物は、溝の真んを中心として2~3m幅で南北に長く延びて検出された。遺物的には上層が各期混在して比較的疎らに検出されたのに対して中層は器種も多様で折り重なるように密集し、その断面形も溝に沿うように上面は広く下面が細いU字状をなしていた。下層は、期日末期の雨天中の調査で細かい確認はできず遺物の取り上げに専心したために詳細は判然としない。悔恨の念が残る。



凡例

- | | | |
|-------------------------|-----------------------------|-----------------|
| 1. 寄土 | 11. 黒褐色粘質土：82号溝中層 | 21. 淡黒茶褐色土 |
| 2. 灰褐色土 | 12. 黒茶褐色土：82号溝中層 | 22. 茶褐色土 |
| 3. 濃灰褐色土 | 13. 黒色粘質土：82号溝下層 弥生中期末の土器多合 | 23. 明茶褐色土 |
| 4. 茶褐色土+ロームブロック層 | 14. 濃黒色粘質土：82号溝最下層 10層よりも濃い | 24. 黒色土：弱粘質 |
| 5. 剛褐色土：若干の遺物含有 | 15. 基褐色土+ロームブロック | 25. 黑褐色土：弥生土器含む |
| 6. 基褐色土 | 16. 濃黒色粘質土 | 26. 淡茶褐色土 |
| 7. 黒茶褐色粘砂土 | 17. 黒茶褐色粘質土 | 27. 暗茶褐色砂土 |
| 8. 黒茶褐色粘質土：弥生土器及び須恵器を含む | 18. 茶褐色土：やや黒色気味 | 28. 青灰色シルト質土 |
| 9. 黑色粘質土：82号溝上層 | 19. 濃茶褐色土：16層より濃く、弱粘質 | 29. 細砂層 |
| 10. 濃黒茶褐色粘砂土：82号溝中層 | 20. 濃茶褐色土 | 30. 粗砂層 |

Fig.10 82号溝土層断面実測図 (1/60)

11~23は、上層から出土した。11~13は、壺である。11は、口縁部が短く内傾する頸部から小さく外反する。胴部はやや長胴で底部は平底である。12は、小型の壺で頸部は球形の胴部から直口して立ち上がり、口縁部は短く外反する。13は、土師器壺で口縁部は球形の胴部から伸びやかに外反して立ち上がる。14は、壺部が皿状をなす扁平な高壺で口縁下内面に1条の凹線が巡る。脚部は大きく歪んでいる。15は、丹塗りの筒形器台の鈎部で端部には3条の浅い凹線が巡る。16は、短い器台である。17は、無形壺の蓋。18は、瓦碗。19・20は、ミニチュア土器の鉢である。口縁部は、19が小さく外反し、20は内弯気味に直口して立ち上がる。21は、ラグビーボール状の投弾で重さは21.5g。22・23は棒状をした不明土製品である。

24~140は中層から出土した。24~55は壺である。24~27は、丹塗りの袋状口縁壺。24の口縁部下には1条のM字凸帯が巡る。27は口径が16.6cmの大型の壺で、口縁部下と胴部上半に各々2条のM字凸帯が巡る。28~30は、鋲先口縁壺。28は、上唇に円形浮文を貼り付けている。30は、口縁部外縁にヘラ先工具による刻み目を施し、頸部と胴部の境には1条のシャープな三角凸帯が巡る。31・32は、鋲先口縁の瓢形壺で、頸部と胴部の境には1条の三角凸帯が巡り、ふたつの壺の接合面には31がコ字凸帯と三角凸帯を32は2条のコ字凸帯が巡る。34・35は細頸壺の口頸部で、細く伸びやかに開

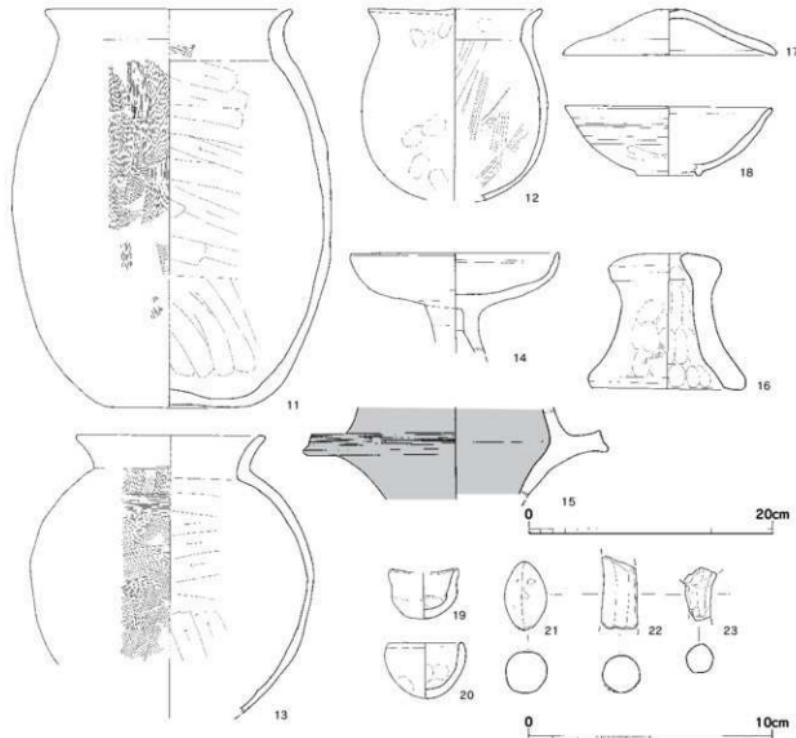


Fig.11 82号溝上層出土遺物実測図 (1/2・1/4)

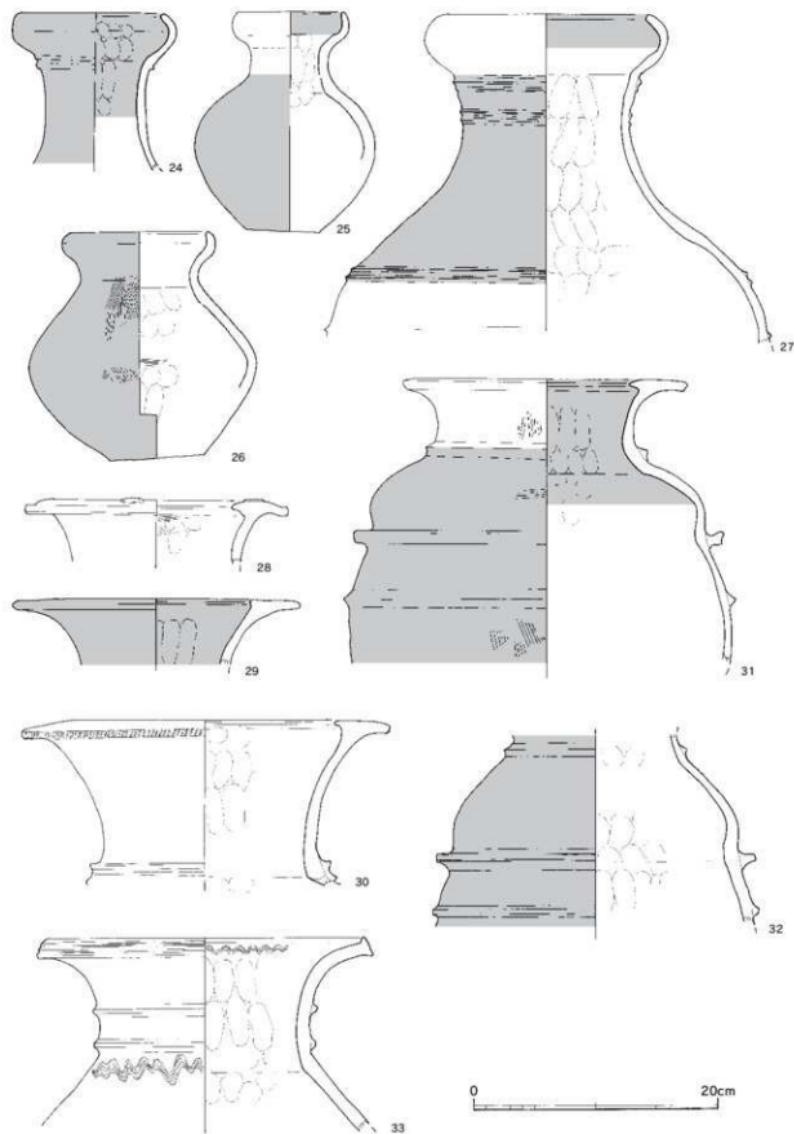


Fig.12 82号溝中層出土遺物実測図 1 (1/4)

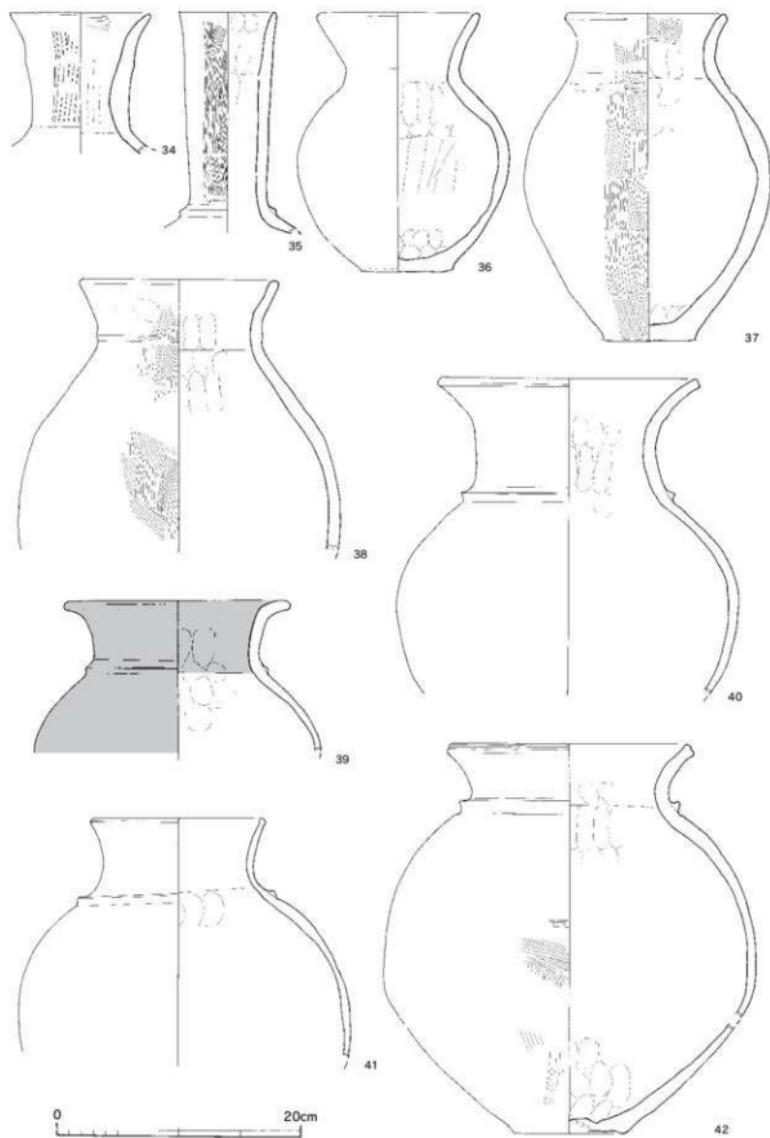


Fig.13 82号溝中層出土遺物実測図 2 (1/4)

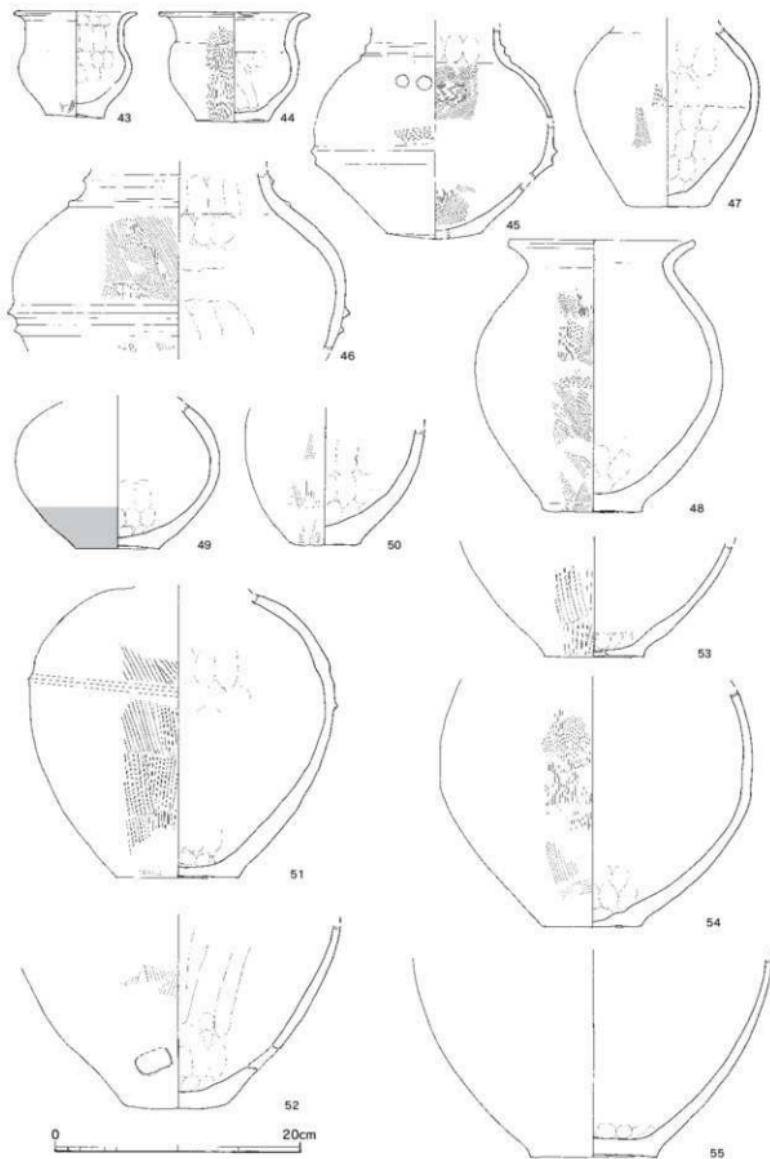


Fig.14 82号溝中層出土遺物実測図3 (1/4)

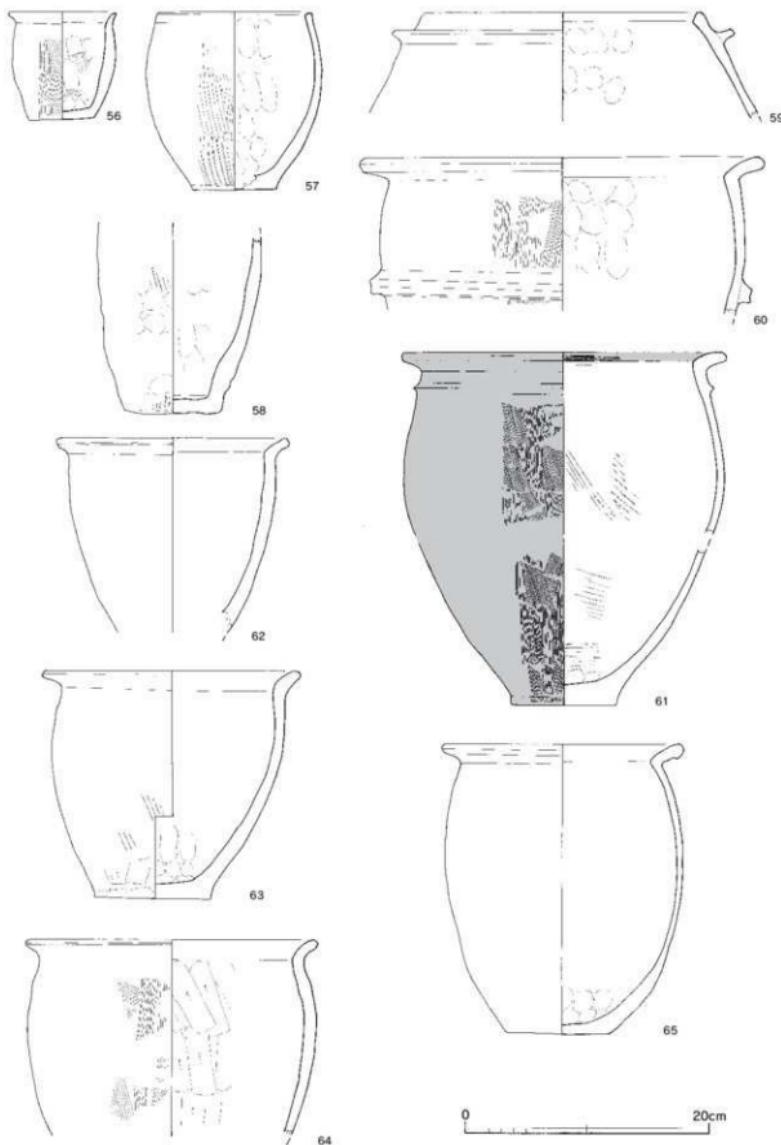


Fig.15 82号溝中層出土遺物実測図 4 (1/4)

く。36~42は、直口ぎみに立ち上がる頸部から口縁部は小さく外反する壺。39~42は、胴部との境に1条のシャープな三角凸帯が巡る。42は口径が19.6cm、器高が32cmのやや大型壺である。43・44は直口する頸部から口縁部が短く外反する小型壺。45は偏球形の胴部が付く細頸壺で、頸部下と胴部下半に2条の凸帯が付き肩部には2枚の円形浮文を貼り付けている。56~73は壺である。56は口径が8.8cm、器高が8.9cmの小型壺で口縁部は短く外反する。57は単口式の壺で口径は12.7cm。58も単口式の壺か。59は口径が20.6cmの樽形の壺で口縁下には1条のコ字凸帯が巡る。60・61は逆L字口縁

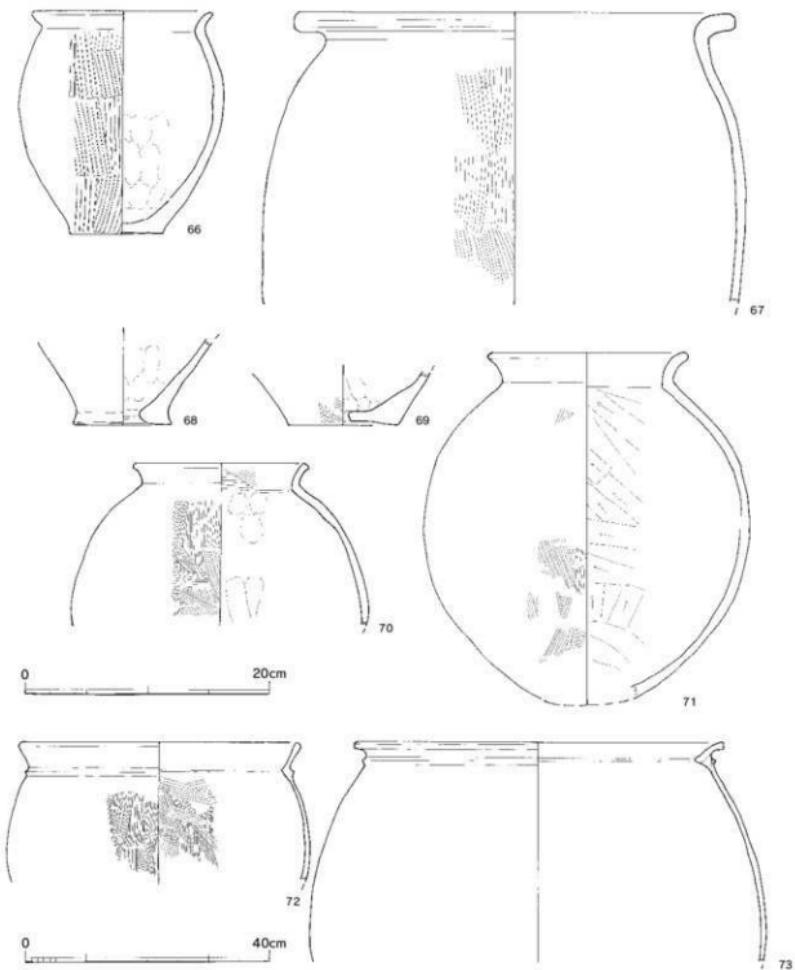


Fig.16 82号溝中層出土遺物実測図 5 (1/4 · 1/8)

の甕で、60は胴部上半に太めのコ字凸帯が、61は口縁下にシャープな三角凸帯が1条巡る。66は口径が14.8cm、器高が18.3cmの小型甕で、口縁部は短く外反する。67は口径が36.2cmの中型甕。72は後期、73は中期後葉の中型甕で甕棺片である。74～85・89は高坏。74・75の坏は扁平な半球形で、75の体部には1条のシャープな三角凸帯が巡る。76～82の坏は鋤先口縁である。82は口径が28.3cm、器高が25cm。85は脚部上位にヘラ先状工具（？）で施した刺突文状の圓線9条を巡らしている。89

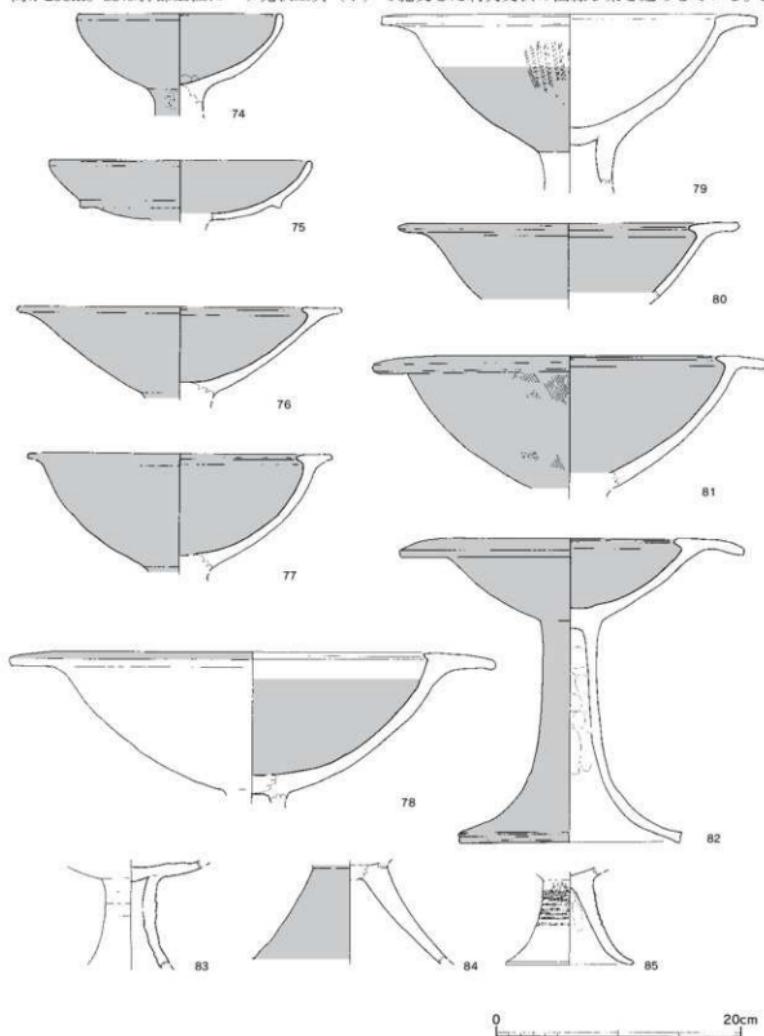


Fig.17 82号溝中層出土遺物実測図 6 (1/4)

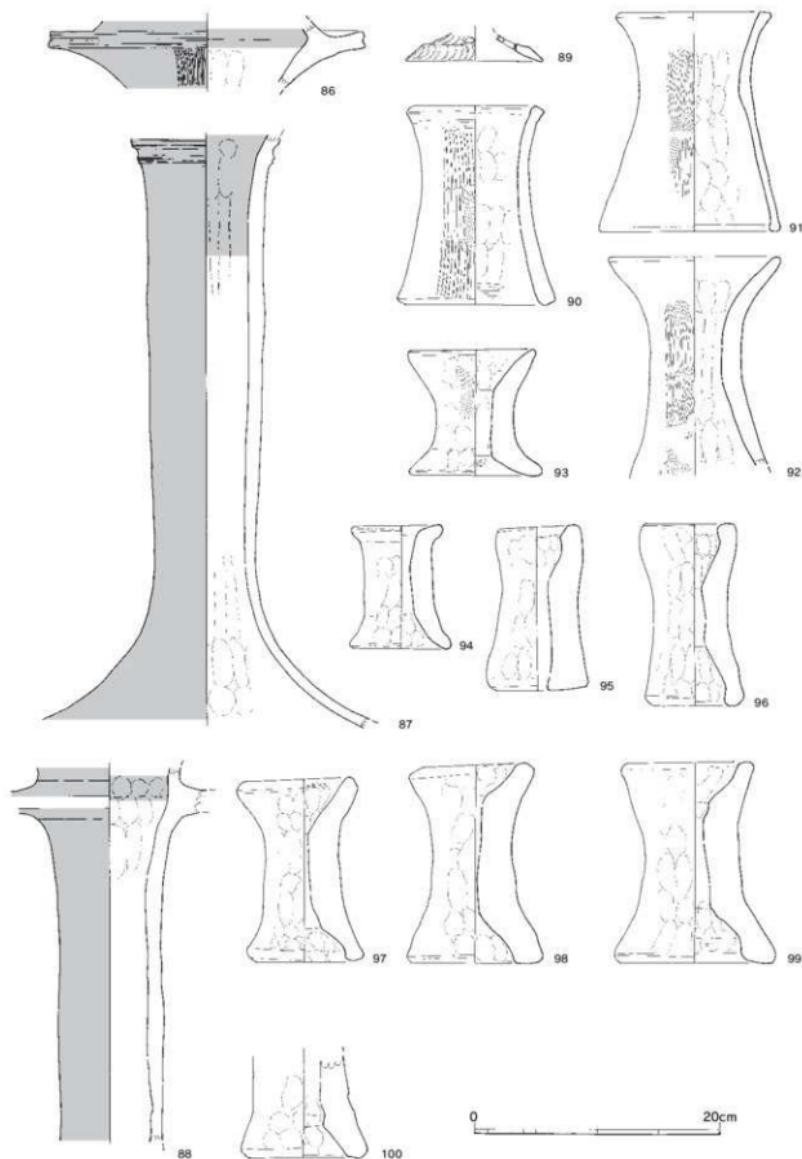


Fig.18 82号溝中層出土遺物実測図 7 (1/4)

は据部の外面に稜を作り、その稜線上に円孔を穿ち、更に「の」字状をした鶯の様な暗文を施文している。86~88は丹塗りの筒形器台である。90~111は器台。112~119はミニチュア土器。120~133は鉢。136は丹塗りの注口土器。137・138は丹塗りの無形壺の蓋で、2孔一对の円孔を対称位に穿つ。139は壺の蓋。140は、長さが4.6cmの投弾で重さは17.9g。141~143は不明棒状土製品。

144~151は下層出土から出土した。144は、鶯先口縁の瓢形壺で、口径は19.6cm。口縁端には刻み目が巡る。胴部と頸部の境に三角凸帯が1条、ふたつの壺の継ぎ合わせ部には2条のコ字凸帯が巡る。145・146は扁平な倒卵形をした壺の胴部。147は、口径が12.8cmの丹塗り無頸壺。上唇部には2孔一对の円孔が対称位にある。148は、逆L字状口縁の壺で、口径は19.4cm、器高は22.6cm。149・150は器台である。150の受け部は内弯ぎみに立ち上がり、口径と底径は同法量の9.3~9.4cm。

152~154は、直径が6mm、厚さが3~4mmの滑石製白玉である。155・156は、ブルーのガラス小玉。157は、ボタン状をした不整円形の未製品で、中央に1.5~2mmの円孔を穿っており、玉の可能性も考えられる。158・159は、黒曜石製打製石鏃である。160は、長さが6.9cm、中央径が1.8×2cmの滑石製石錐である。161・162は、滑石製紡錘車である。161は、上縁径が1.6~1.8cm、下縁径が3.2~3.4cm、高さが1.7cm、円孔径は6~7mm。側縁には、暗文状の研磨痕がある。163~166は、石庖丁である。163は、背側の対称位に孔径が4~5mmの紐通しの円孔を両側から穿っている。凝灰岩フォルンフェルス質。164は半月形をした石庖丁で孔径が4mmの紐通し孔を穿ち、鏃は明瞭に

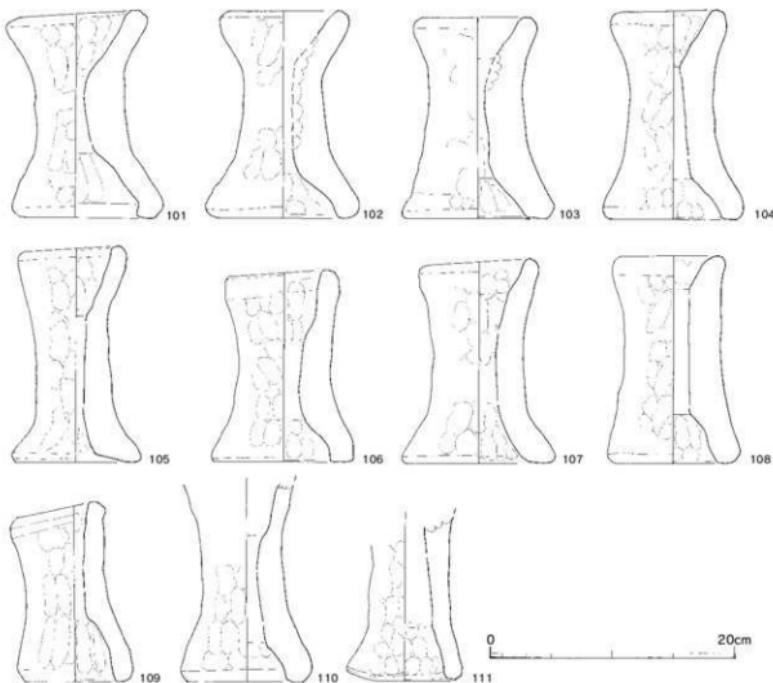


Fig.19 82号溝中層出土遺物実測図 8 (1/4)

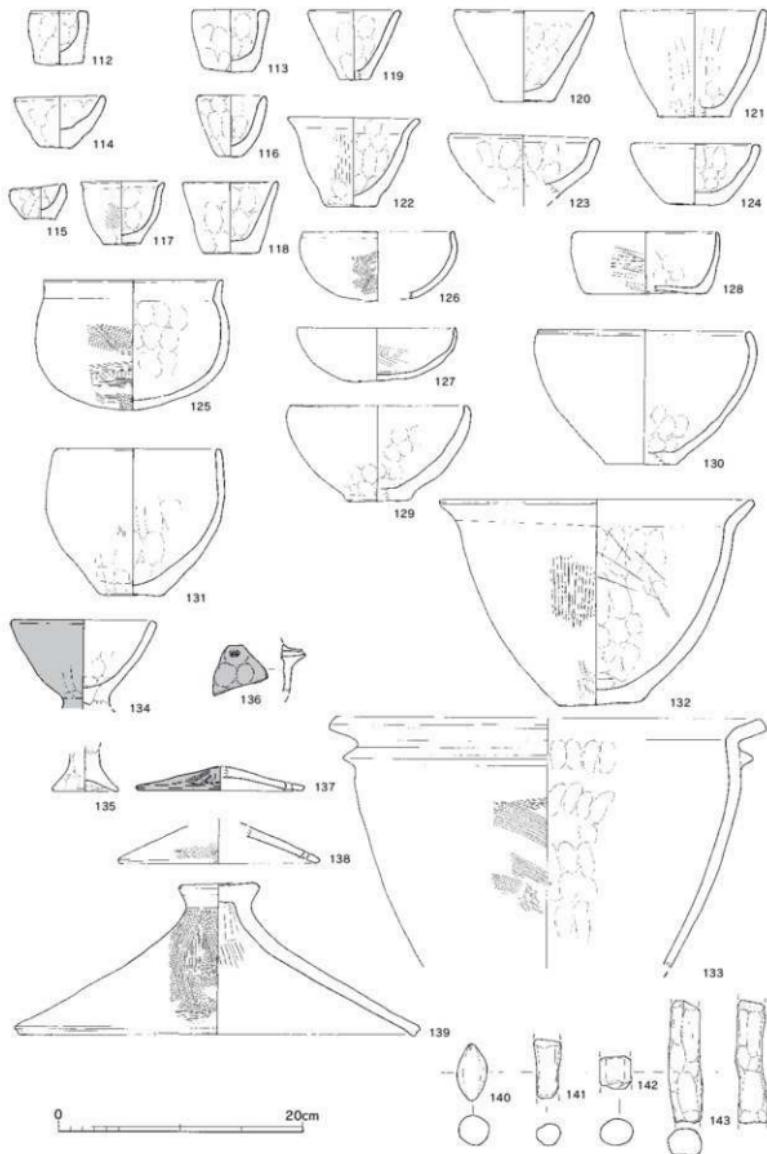


Fig.20 82号溝中層出土遺物実測図9 (1/4)

残る。166は、頁岩質。167・168は砥石である。167は、長さが28.5cm、幅が13.7~15.7cm、厚さが5.5~8.2cmで、上縁と両側縁に砥面があり、弧状をした側縁の砥面は良く研ぎ込まれている。側縁の使用には安定のために埋め込んだことが考えられる。168の研磨痕が深く、金属器を研いだものか。

169は中細形銅戈が片面に彫り込まれた鋳型である。胡の部分から欠損しており、内が確認できる。残存幅7.2cm、残存長5.6cm、厚さ3.1cm、重さ151.5gを測る。全体に鋳型表面は黒変しており、実際に鋳造に使われたと判断できる。石材は肉眼観察によると石英斑岩である。内は右側の立ち上がりから欠損しており、正確な内幅は不明であるが、欠損ラインが直線であることから、欠損ラインを立ち上がりとして復元すると、内幅は2.0cmとなる。内には細い線刻が内の側面ラインと平行に認められるが、中心ではなく左側の立ち上がりとの間は0.9cm、右側の欠損ラインとの間は1.1cmとなっている。左側の立ち上がりには、1mm程度深く彫り込み、鋳造された製品には内の側縁部が立つ。図のように鋳型を設置した場合、彫り込み面には面を平滑に整えた線状痕が確認できる。下端面は湯口となり、内の彫り込みから左へ1.1cmの所に型合わせの印と思われる鋭い彫り込みが確認できる。下端面

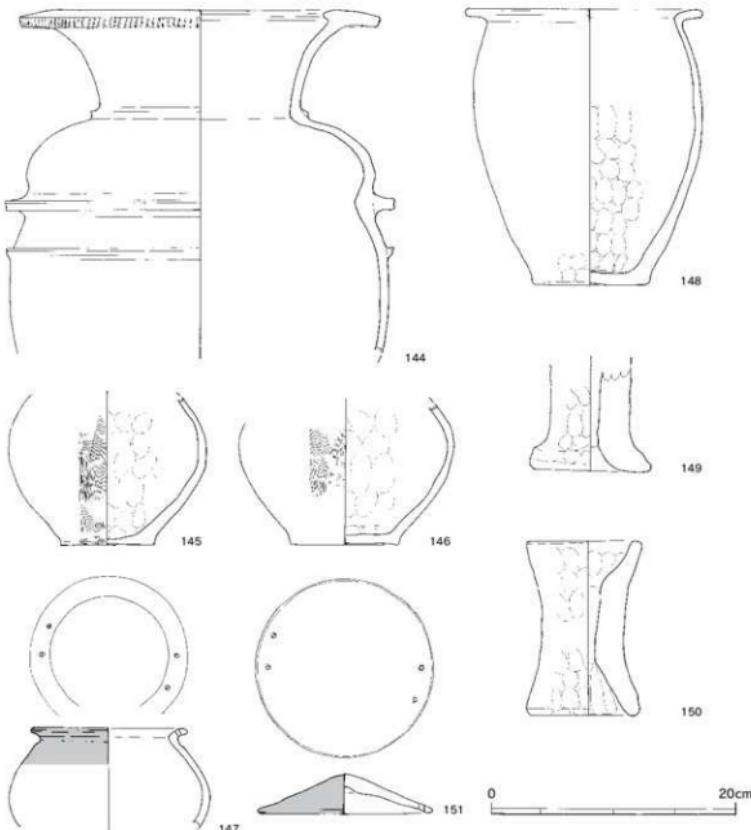


Fig.21 82号溝下層出土遺物実測図 (1/4)

は敲打痕で整形されている。左側面は下端面より緩やかに広がり、敲打痕が確認できる。裏面は敲打痕と線状痕で平滑に整形されており、他の彫り込みや砥石への転用は確認できない。その他の面は欠損により不明であり。彫り込まれた製品は内の幅、湖の長さから中細形銅戈 b 類と考えられる。

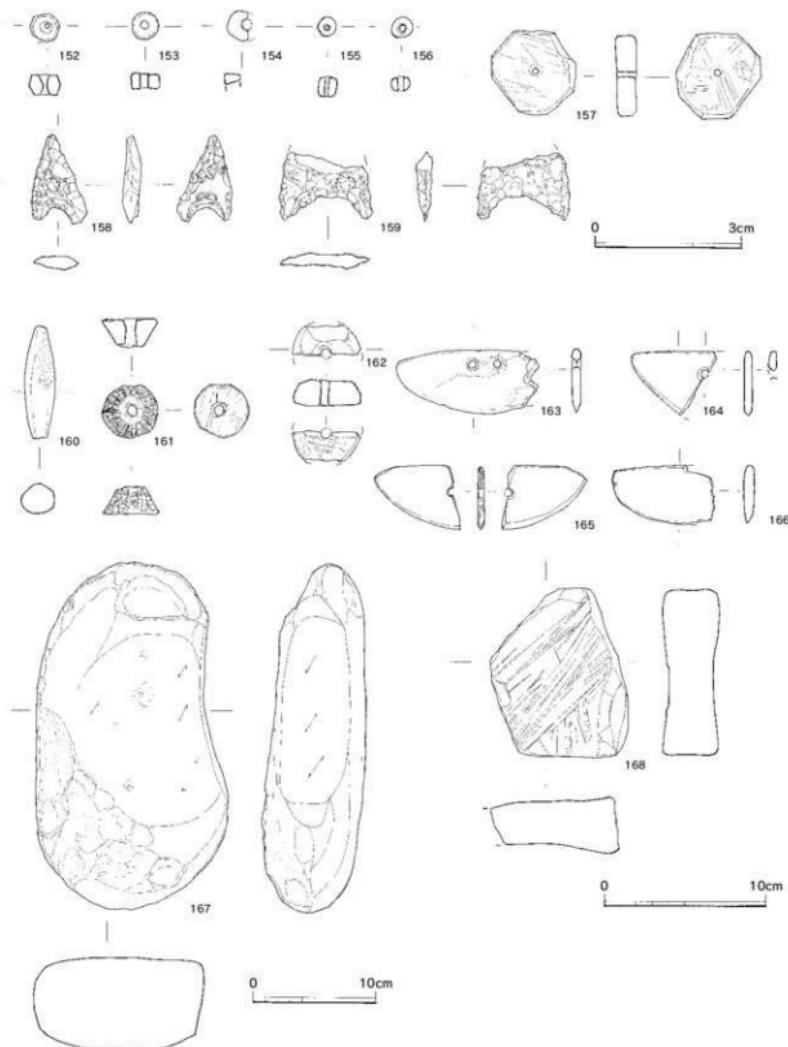


Fig.22 82号溝出土遺物実測図 1 (1/1・1/3・1/4)

3. 古墳時代～古代の調査

古墳時代から古代の遺構は、竪穴住居3棟+aと土坑3基を検出した。このうち竪穴住居は、中世の溝や井戸によって大きく破壊され、東西の壁面の一部をわずかに残しているに過ぎずその原形は留めていない。分布的には、II区の東縁に沿って広がる傾向が窺え、50棟余の竪穴住居が幾重にも重複して検出された第23次調査区とは様相が大きく異なる。土坑はまばらに広がる。

1) 竪穴住居 (SC)

8号住居 SC-08 (Fig. 25 PL. 7)

8号住居は、II区の南東隅に位置する小型の住居で、17号住居よりも新しいがその中央部は20号溝によって大きく削平されているために東西壁を残してその大半が消失している。平面形は、東西壁が320cmで南北壁が325cmほどの方形プランをなそう。壁面は、やや緩やかに立ち上がり壁高は40cmである。床面は、20号溝の削平で20～40cmを残すが、中央部にむかって緩やかな凹レンズ状をなす。壁下に周溝は巡らず、貼床や主柱穴は検出されなかった。覆土は、濃茶褐色土で黄褐色ローム粒を僅かに含んでいる。遺物は、若干の混入が観られるが、土師器の甕・高坏や須恵器の甕・坏・坏蓋片がわずかに出土し、古墳時代のものと考えられるが、明確な時期は判然としない。

14号住居 SC-14 (Fig. 25 PL. 7)

14号住居は、II区の東壁際に並ぶ3棟の住居群の中でもっとも北側あり、17号住居の北壁と接するように位置している。北東隔壁は63号井戸に、南西隔壁は13号井戸に削平されている。平面形は、東壁と北西隔壁を残すのみで判然としないが、南北壁が310cm、東西壁が340cmの方形プランをなそう。壁高は、東壁が30cm、西壁が20cmで壁面はやや緩やかに立ち上がる。床面は、大半が20号溝に削平されて判然としないが、貼床や壁下の周溝は確認できなかった。覆土は、濃茶褐色土で、須恵器甕や高坏のほかに土師器甕・甕片と瓦片がわずかに出土した。

17号住居 SC-17 (Fig. 25・26 PL. 7)

17号住居は、II区の東壁際に並ぶ3棟の住居跡群の中央に8号住居と並列するように位置し、南壁は8号住居に切られている。平面形は、大半が20号溝によつて削平され、南北壁が260cm、東西壁は260～330cmのやや歪な方形プランをなす。壁面は、東壁が急峻に西壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は東壁が40cm、西

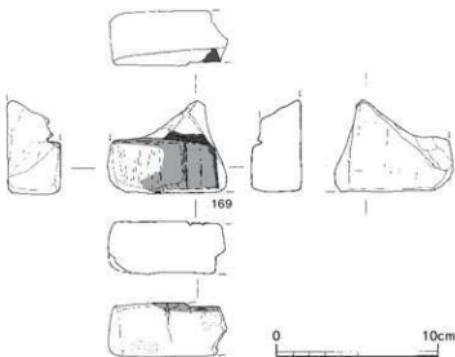


Fig. 23 82号溝出土遺物実測図 2 (1/3)

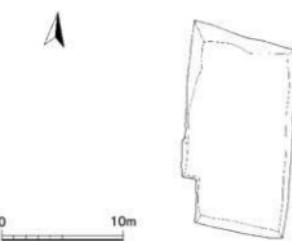
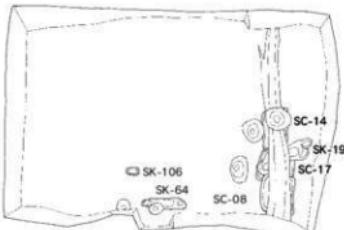


Fig. 24 古墳時代から古代の遺構配置図 (1/400)

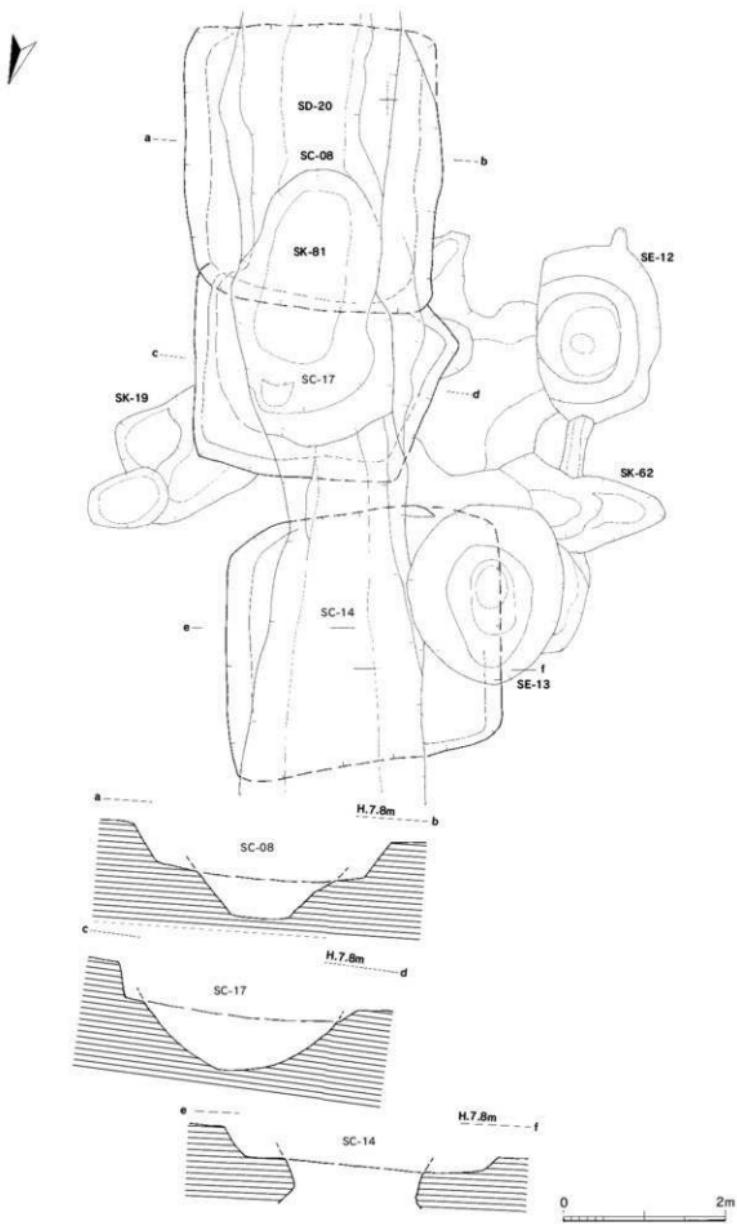


Fig.25 8・14・17号住居実測図 (1/60)

壁が20cmである。床面は、大半が消失しており、主柱穴や貼床は確認できなかった。覆土は、8号住居と大差のない濃～暗茶褐色土の單一層で、須恵器壺や土師器壺・砥石のほかに石鍋や土鍋片の混入が観られた。

170は、長さが11.3cm、幅が2.9～3.8cm、厚さが0.9～2.9cmの手持ち型砥石である。砂岩質。

2) 土坑 (SK)

19号土坑 SK-19 (Fig. 27 PL. 7)

19号土坑は、II区の南東部にあり、南壁は17号住居の北東隔壁を切っている。平面形は、長辺が160cm、短辺が140cmの長方形プランを呈する。東壁側には幅が20～40cmの半月状をしたフラット面が付く2段掘り構造をしている。壁高は12～15cm。坑底面は、浅い凹レンズ状をなし、そのフラット面から25cmの深さにあり壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は、暗茶褐色土の單一層で弥生土器片や土師器片のほかに丸瓦片がわずかに出土した。

64号土坑 SK-64 (Fig. 27 PL. 8)

64号土坑は、II区中央部の南壁際にあり、南壁は65号井戸を切っている。平面形は、長辺が368cm、短辺は、西壁が40cm、東壁が70～80cmの棒状に長い長方形プランを呈する。主軸方位は、N-77°-Eにとる。東壁下には60cm、西壁下には30cm余の長さの浅いフラット面が張り出している。坑底は、中央部がやや窪む凹レンズ状をなし横断面形は浅い舟底状をなす。壁面は、短辺側が急

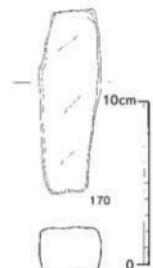


Fig. 26 17号住居出土
遺物実測図 (1/3)

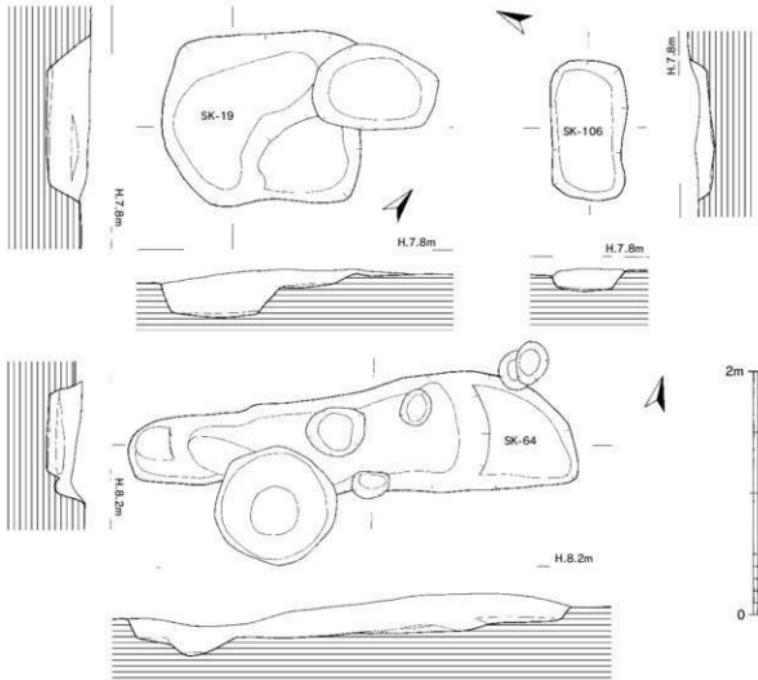


Fig. 27 19・64・106号土坑実測図 (1/40)

傾に長辺側は緩やかに立ち上がる。壁高は、フラット面までが10~15cm、坑底までは25~30cmを測る。覆土は、黄褐色ローム粒を含む暗茶褐色土で、須恵器や土師器の壺や高坏、坏、坏蓋がわずかに出土した。

106号土坑 SK-106 (Fig. 27 PL. 8)

106号土坑は、II区中央部の南壁寄りに位置し、2mほど南には64号土坑がある。平面形は、長辺が92cm、短辺が62cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN-67°-Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は18cm。坑底面は、西側が浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、暗茶~濃茶褐色土。

4. 中世の調査

中世の遺構は、井戸4基と土坑10基、溝6条を検出した。分布的には、那珂川の氾濫原に近い西側にはあまり広がらず、古墳時代の竪穴住居と同じよう台地側の東に集中的に広がる傾向が窺える。このうち井戸は、1基を除いてフ拉斯コ状に大きく広がる構造を示すもので那珂丘陵における該期通有の特徴を示している。また、土坑や溝は、構造や分布傾向が窺えず全体としてまとまりがない。

1) 井戸 (SE)

2号井戸 SE-02 (Fig. 29・30 PL. 9)

2号井戸は、I区の中央部に位置する素掘りの井戸で、上縁の南から西壁側は搅乱坑で削平され、西には、3号溝がある。平面形は、直径が140~160cmの円形プランを呈する。壁面は、上縁から160~180cmほどフ拉斯コ状に大きく広がって強い屈曲線を作る。この壁面が最大に広がる地点が鳥栖ローム層と八女粘土層の境をなす。次に、そこから内側にむかって20~40cm内傾して緩やかな稜線を作る。この面が検出面から200~220cmで、これより40~50cm下の八女粘土層中から湧水が観られ、稜線からは25~30cm径の井戸底にむかって急速に窄まる。この深さは180~200cmで、井戸底の標高は4.05m。覆土は、暗灰色~濃灰黑色土で、下層ほど黒味と粘質度が強くなる。遺物は、弥生土器や須恵器・土師器の壺、高坏等のほかに平瓦片や高麗青磁碗、青・白磁碗が出土した。

171は、口径が24.4cmの土鍋で外面には煤が付着している。172は、底径が7cmの土師器小皿。

12号井戸 SE-12

(Fig. 31~33 卷頭2・PL. 10・11)

12号井戸は、II区の南壁の西寄りに位置する素掘りの井戸で、北側2mの距離には13号井戸がある。平面形は、南北長が125cm、東西長が105cmの長方形プランを呈する。壁面は、検出面より90~120cmの深さまでストレートに窄まり、そこから80~100cmほど大きく外側へフ拉斯コ状に広がった後に60cmの比高差で緩やかに傾斜する。井戸は、そこから2ヶ所に弱い屈曲線を形成して直径が70×85cmの梢円形の井戸底にむかって窄まる。井戸底のレヴェルは、3.85mである。井戸底からは、青磁碗や白磁碗・捏鉢・土鍋に混じって桶やザル、曲物などがまとまって

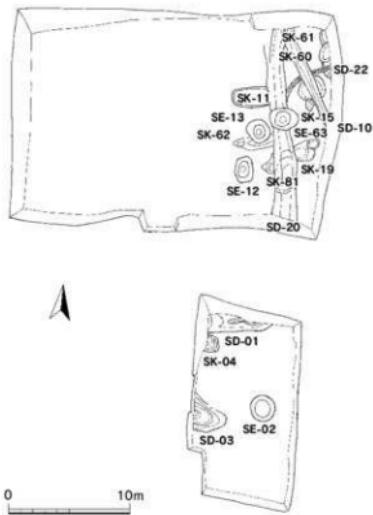


Fig.28 中世の遺構配置図 (1/400)

出土した。また、井戸の廃棄時には、開口部を灰青色粘土で厚く覆い再利用を防ぐような感が窺えた。井戸底から出土したザルは保存処理中に損壊してしまった。

173~176は、口径が5.7~8cmの土器器小皿。173・174・176の口縁部には油煙の付着が観られ、灯明皿に転用されている。177は、ミニチュア壺。178は、砂岩質の五輪塔宝珠。179は、スギの板目板の桶か曲げ物の底板である。長さ9.7cm、幅4.0cm、厚さ7mmである。直径が10cmほどの小型の曲げ物か桶と思われる。長辺部の両側に紐ずれと思われるへこみがあり、紐をかけて木札のようにして再利用されたと思われる。180は、スギの板目板を用いた直径14~15cm、高さ13cmの円筒形の桶である。桶の側板は18枚、幅は1.8~3.5cm、厚みは5mmほどである。表面にタガの痕跡が残るが、不明瞭である。内面は黒褐色の塗料（漆か？）が塗られている。底板は直径13cm、厚さは7mmである。穿孔や紐かけの痕跡は見られない。181は、スギの板目板を用いた持ち手付きの桶である。直径18~19cm、高さ16cmの円筒形を呈し、桶の側板は16枚、幅は2.8~3cmのもと、4cmほどのものがあり、交互に組み合わさる。厚さは5~6mm。表面にタガの痕跡が残る。タガは遺存していたが、取り上げの過程で外れている。底板は直径17cm、厚さ5mm。持ち手は長さ19.5cm、幅3.5cmほどで、両端は幅2.5cmほどに切り落とさ

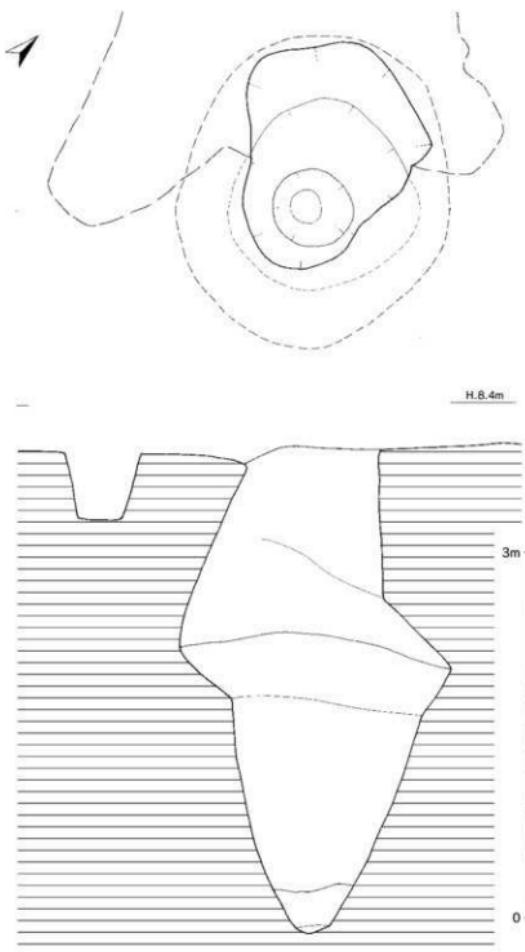


Fig.29 2号井戸実測図 (1/40)



Fig.30 2号井戸出土遺物実測図 (1/4)

れ、側板に開けられた孔に納まる。中央部が抉り込まれ、紐がかけられていたと思われる。やや小型であるが、この井戸の釣瓶桶として使用されていた可能性もある。182は、スギの柾目板の桶の底板。長さ19.1cm、幅7cm、厚さ7mm。直径20cmほどの小型桶の底板であろう。表面は丁寧に加工されている。183は加工棒材である。広葉樹の板目材で、長さ43.8cm、幅4cm、厚さ1.8cm。先端部に向かってやや細くなる。上端部は欠損している。全体的に粗い面取りが施される。184は舟形をした木製品である。針葉樹の板目板を用い、長さ28.8cm、最大幅7cm、厚さは2.8cm。平面形は両端部が細くなる舟形で、中心部からやや上端側に不整円形の孔がある。側面部は丁寧に面取りされている。185は加工板材。広葉樹の柾目板で長さ53.2cm、幅20.4cm、厚さは2.5cmで、下端部に向かって薄く、長辺の両端は面取り加工されている。形状は平歛の未製品に似るが大型であり、おそらく農具ではない。表面には鉋による調整痕がみられ、上端部にくり込んだ加工痕がある。本来は方形の孔か仕口で、欠損したので、まな板か作業台として転用されており、表面に金属の刃物による使用痕が見られる。

A
13号井戸 SE - 13
(Fig. 34 PL. 12)

13号井戸は、II区の東壁側の中央部に位置し、すぐ南には12号井戸、北には11

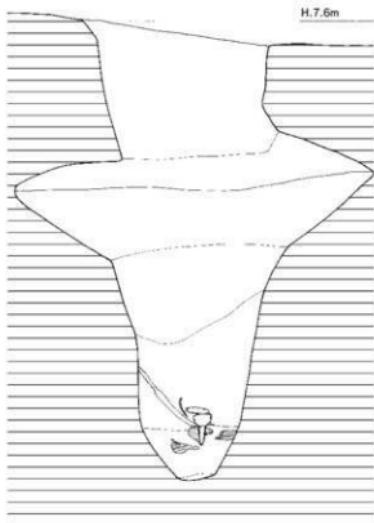
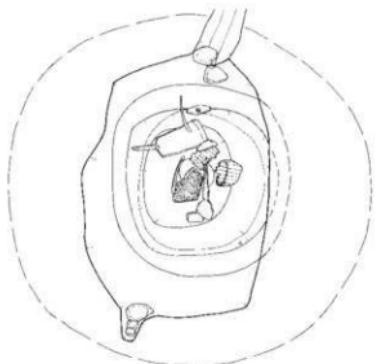


Fig.31 12号井戸実測図 (1/40)

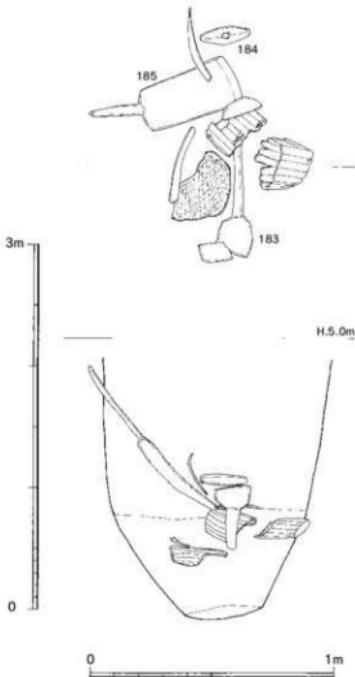


Fig.32 12号井戸遺物出土状況実測図 (1/20)

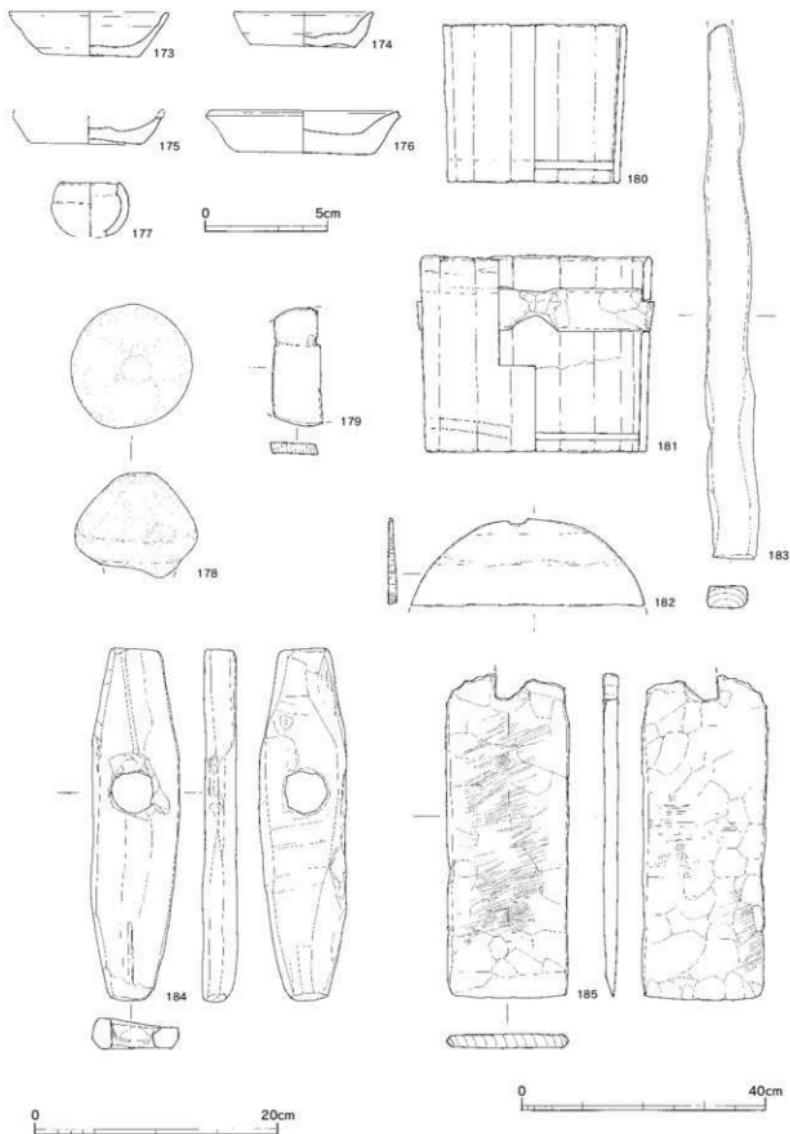


Fig.33 12号井戸出土遺物実測図 (1/2・1/4・1/8)

号土坑がある。平面形は、直径が190×215cmの橿円形プランを呈し、壁面は、3ヶ所に緩やかな屈曲点を作りながら井戸底にむかって窄まる。壁高は455cmと深く、標高は3.45m。覆土は、上層から暗灰茶褐色土、濃茶褐色粘質土、黒褐色粘質土が互層状に堆積しており、須恵器壺や坏・坏蓋のほかに青磁碗・白磁碗・捏鉢・土鍋片などが出土した。

63号井戸 SE-63 (Fig. 35・36 PL. 13)

63号井戸は、II区中央部の東寄りに位置し、14号住居より新しく、20号溝よりも古い。2m北東には15号土坑が、2m西には13号井戸がある。平面形は、直径が230cm余の円形プランをなす。壁面は、井口より30~60cmほどプラスコ状に緩やかに膨らみ、そこから緩傾斜して標高が3.85mの所に一度底面を作り、そこから更に南へ60cmほどの深さに井戸底を掘り直している。最終的な底面のレベルは3.25m。また、北西壁には、15号土坑の南北壁際から延びた流路が流れ込んでいる。この流路状の構造が貯水を目的として作為的に掘り込まれたものか、井戸の埋没前に偶発的に貫通したのかは判断できなかった。覆土は、暗灰茶褐色~黒褐色土で下層ほど粘性が強くなる。遺物は、土師器や須恵器の壺のほかに青磁碗・陶器鉢・捏鉢・摺鉢などのほかに桶の底板や仕口のある加工材が比較的まとまって出土した。

186は、口径が13.8cmの土師器壺である。187・188は、平底の弥生壺で、底径は187が10.6cm、188は8.6cmである。189~191は桶の底板である。189は、スギナナメ材で長さ16.5cm、幅8.4cm、厚さ1.2cmである。直径17cmほどの桶の底板であろう。表面は丁寧に面取り加工されている。190は、スギの板目板で直径16.3~16.8cm、厚さ1.1cmである。表面は丁寧に面取り加工されている。191は、スギの板目板で直径16.2cm、厚さ7mmである。表面は丁寧に面取り加工されている。192は杭である。広葉樹の芯持材である。長さ34.8cm、幅4cm、厚さ2.6cmで、本来は直径4cmほどである。先端は断面六角形に削って杭用の加工がされていたと思われるが、全体に欠損が激しい。193は仕口のある加工棒材である。

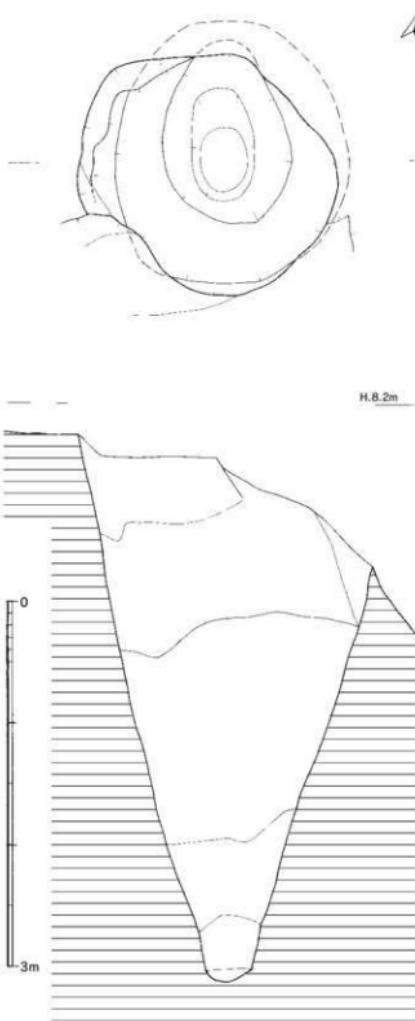


Fig.34 13号井戸実測図 (1/40)

2) 土坑 (SK)

4号土坑 SK-04

(Fig. 37・38 PL. 14)

4号土坑は、I区の北西隅に位置し、すぐ北には東西方向に流れる1号溝がある。平面形は、西半が調査区外にあるために明らかではないが、短辺が140cmで長辺は170～200cm余の隅丸的な長方形プランをなそうか。坑底は、南北に2段の段状をなす。また東小口壁は北側が2段、南側が3段のやや歪な形状をしている。壁面は、階段状部がやや緩やかなほかは急峻に立ち上がる。坑底の最深部までは53cm。覆土は、暗灰黄～暗灰黄褐色土の單一層である。

194は、凝灰岩フォルンフェルス質の石庵丁である。

11号土坑 SK-11

(Fig. 39 PL. 14)

11号土坑は、II区の北東部に位置する大型の土坑で、東小口壁の一部は20号溝に削平されている。平面形は、南北長が140cmの隅丸長方形プランを呈し、東西長は335cmほどになろう。ただし、東小口壁が140cm、西小口壁が125cmと15cmの差があり、台形的な形状を呈する。主軸方位は、N-83°-E。壁面は、北東隅壁を除いて急峻に立ち上がり、壁面の深さは、35～50cm。横断面形は、浅い凹レンズ状をなし、坑底は西小口側にもかって緩傾斜し、深さは55～60cmを測る。覆土は、暗灰黄色～灰黄褐色土の單一層で、下層には赤黄褐色粘土ブロック層の堆積層がある。遺物は、須恵器甕・壺や土師器甕・青白磁碗・土鍋片のほかに滑石片がわず

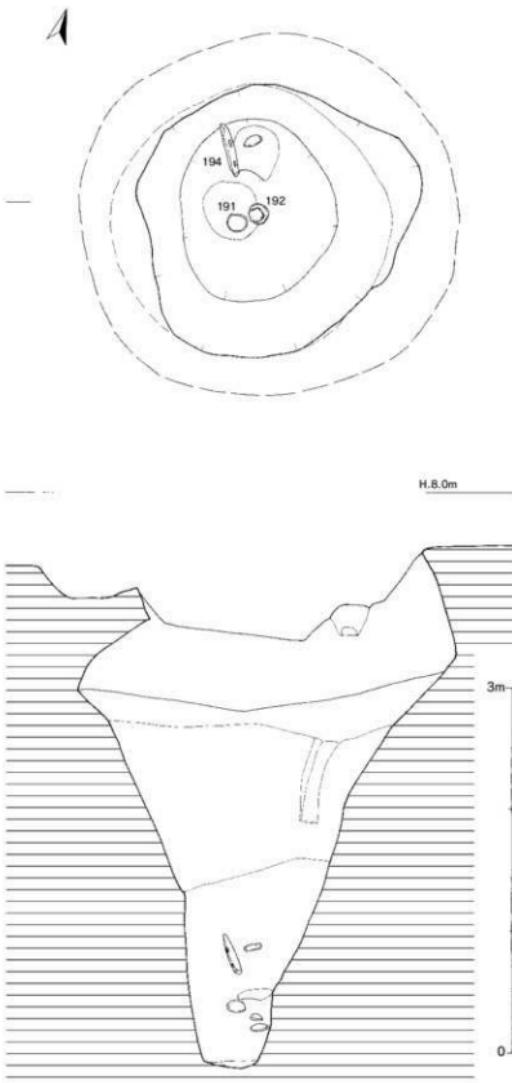


Fig.35 63号井戸実測図 (1/40)

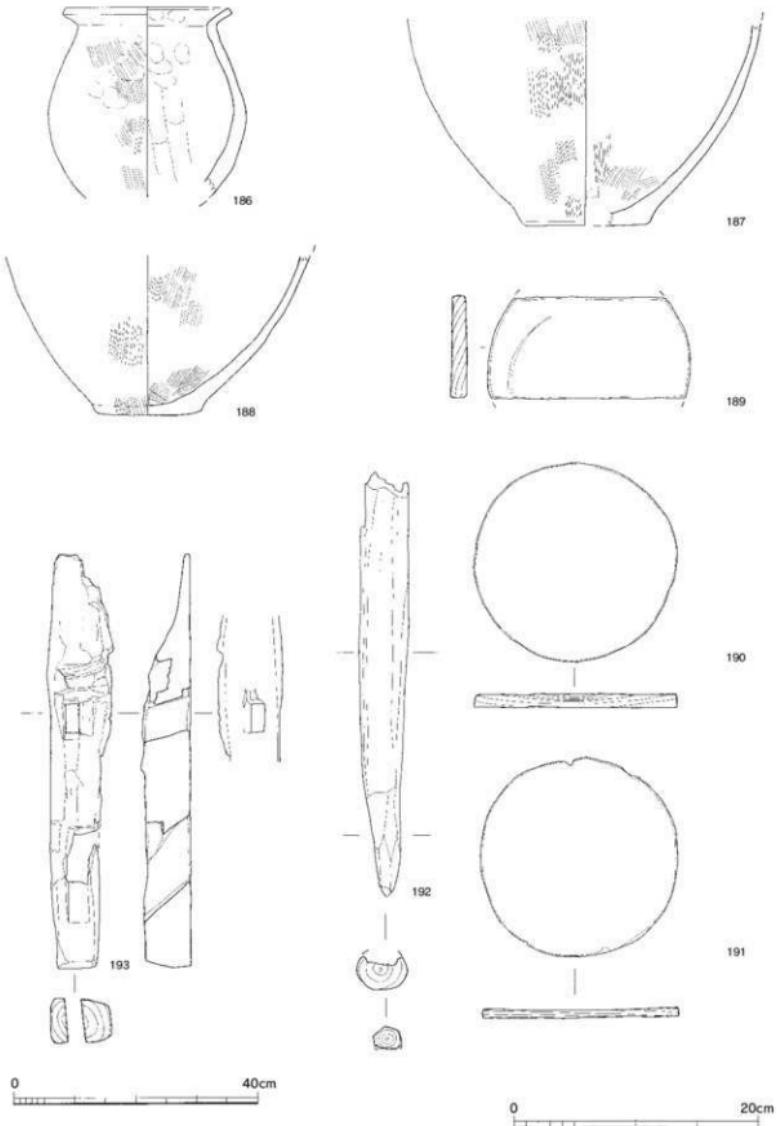


Fig.36 63号井戸出土遺物実測図 (1/4・1/8)

かに出土した。

15号土坑 SK-15 (Fig. 40 PL. 14)

15号土坑は、II区の北東部隅に位置する大型の土坑で、土坑の中央部には北北西から南南東にむかって深さが40cmの10号溝が直線的に延びている。平面形は、直径が215cmの円形プランを呈し、壁高が57cmの坑底は、ほぼフラットで箱形の断面形をなしている。一方で、南壁側には、幅が73cm、長さが90cmの突起状の張出し部がある。この張出し部は、10cmほどの深さで狭い階段状のテラス面を作り、一旦20cmほど緩傾斜してそこから更に、40cmほど下りながら西壁に沿うように緩やかな段を作つて屈曲している。この緩やかな屈曲溝の最深部は標高が6.8mで、中央部の段状面には、15cm×25cmの小児の頭大の転石が埋め込むようにしてある。ただし、この屈曲溝は、ここで終息せずにそのまま坑底下に潜り込んで、南南西に隣接している63号井戸の北壁に水路状に繋がっている。覆土は、暗灰黄色～暗灰黒色土で、若干量の赤黄褐色粘土小ブロックの堆積が観られた。遺物は、土器細片がわずかに出土した。

16号土坑 SK-16 (Fig. 40 PL. 15)

16号土坑は、II区中央部の南寄りに位置する東西軸の小型土坑で、すぐ南東には12号井戸がある。平面形は、長辺が120cm、短辺が108cmの長方形プランを呈し、主軸方位はN-73°-Eにとる。坑底はフラットで、東小口側には幅が35cm、深さが8～10cmの掘り込みがある。壁面は、急峻に立ち上がり壁高は18cm、東小口壁下の最深部までは28cm。覆土は、暗灰黒色土の單一層で白磁碗片が出土した。

25号土坑 SK-2 (Fig. 40 PL. 15)

25号土坑は、II区の中央部に位置する小型の土坑で4m東には16号土坑がある。平面形は、長辺が125cm、短辺が80cmの長方形プランを呈し、主軸方位は、N-73.5°-Eにとる。

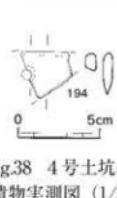


Fig.38 4号土坑出土
遺物実測図 (1/3)

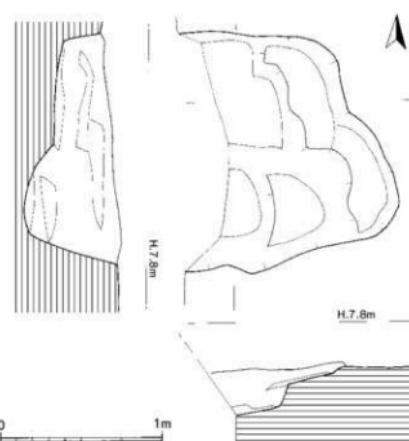


Fig.37 4号土坑実測図 (1/30)

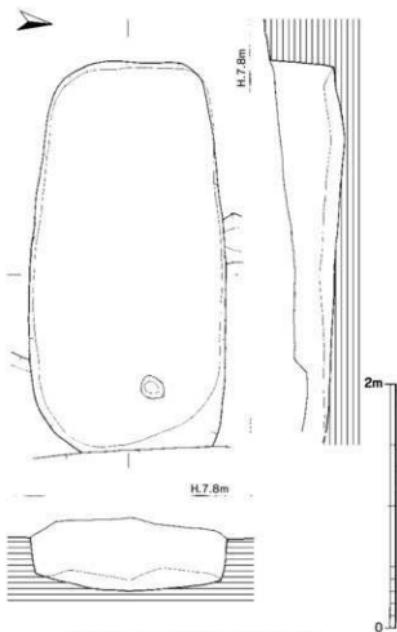


Fig.39 11号土坑実測図 (1/40)

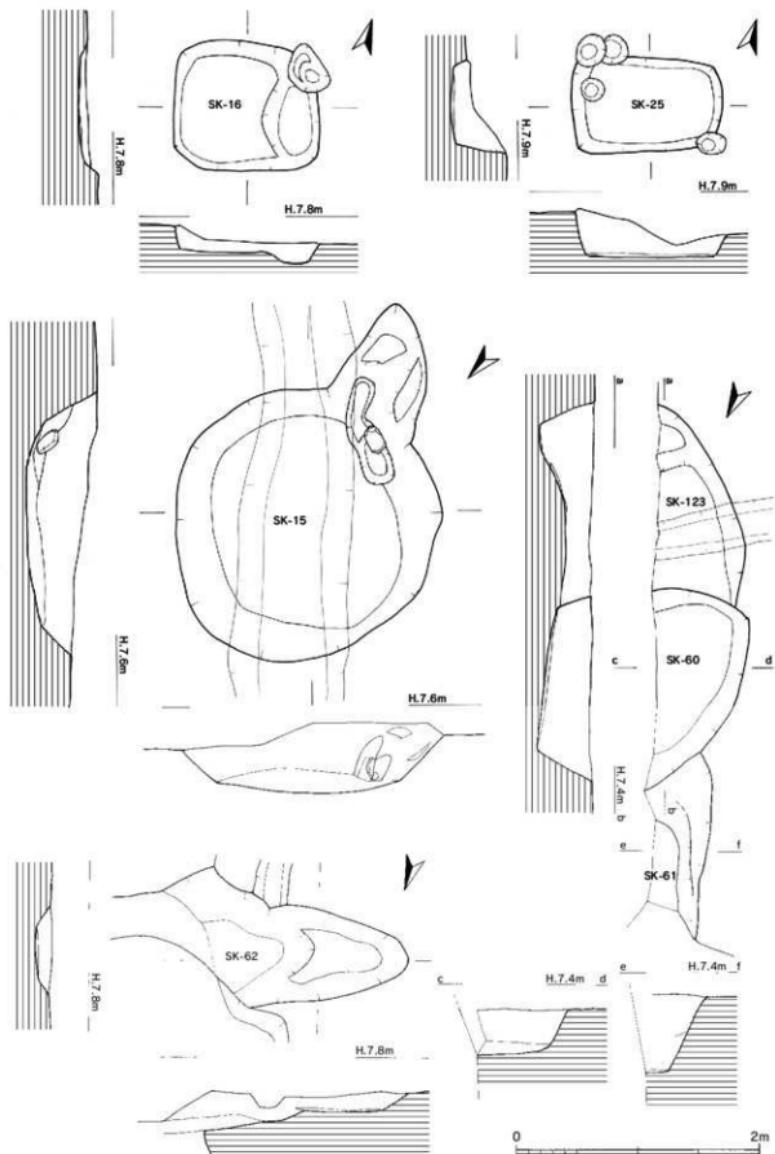


Fig.40 15·16·25·60·61·62·123号土坑実測図 (1/40)

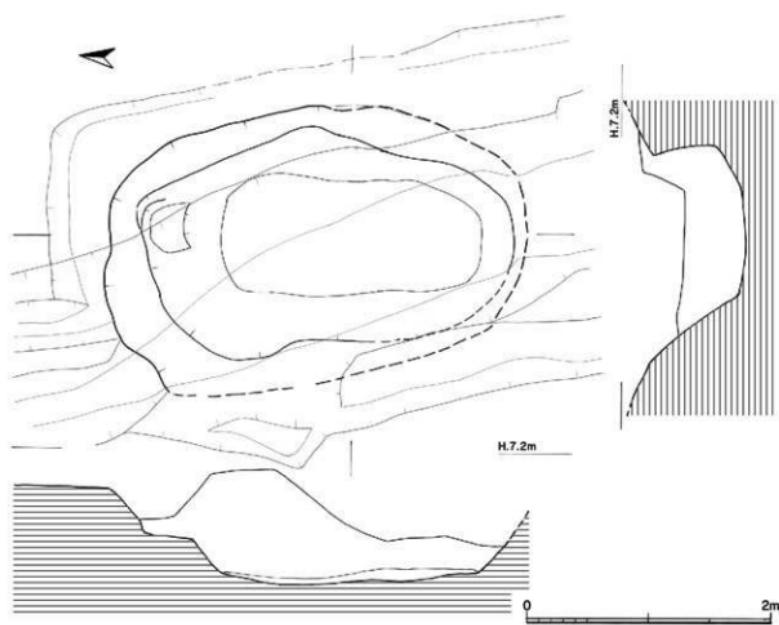


Fig.41 81号土坑実測図 (1/40)

壁高は20~45cmで、壁面は急峻に立ち上がる。坑底はフラットで、断面形は逆台形をなす。覆土は、暗灰黒色土で、土器片や陶器片が出土した。

60号土坑 SK-60 (Fig. 40)

60号土坑は、Ⅱ区東壁際の北寄りに位置し、北は61号土坑を南は123号土坑を切り、3者の中で最も新しい。東半部が調査区外に広がるが、南北長が180cm、東西長が130cmほどの楕円形プランになろう。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは40~45cmでフラットな坑底は、北へ緩やかに傾斜する。覆土は、濃灰黒色土で坑底にはやや粘性的な灰黑色土層が薄く堆積していた。遺物は、瓦器壺や捏鉢・土

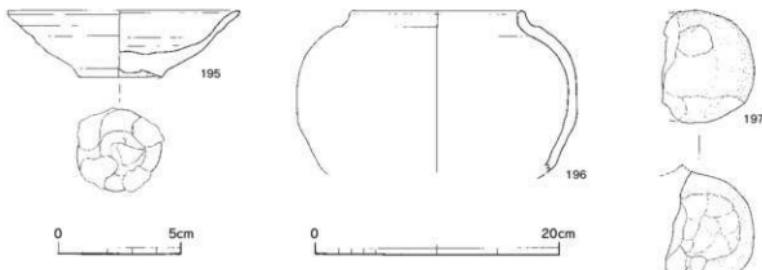


Fig.42 81号土坑出土遺物実測図 (1/2·1/4)

鍋・青磁碗片が出土した。

61号土坑 SK-61 (Fig. 40)

61号土坑は、II区の東壁の北寄りに並ぶ3基の土坑（SK-60・61・123）のうちで最も北寄りに位置する土坑で、南壁は60号土坑に切られている。その大半が調査区外に抜がっているため全容は明確ではないが、直径が160～200cmの円～楕円形プランを呈するものであろう。深さが60cmほどの壁面は緩やかに立ち上がり、中位の～30cm付近で緩やかな稜を作る。覆土は、暗灰黄褐色～濃灰黄色土で、遺物は、擂鉢や捏鉢・白磁片がわずかに出土した。

62号土坑 SK-62 (Fig. 40)

62号土坑は、II区南東部にある12号井戸のすぐ北にあり、北壁は13号井戸に、東壁は20号溝に削平されている。平面形は、短辺が78cmで長辺は180～200cm余の細長い楕円形プランをなそうか。西壁には緩やかなフラット面を作り、そこから15cm余り掘り込んで浅い凹レンズ状の底に至る。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は27cm。覆土は、暗灰黄褐色土の單一層で、土師器皿や捏鉢・陶磁器片がわずかに出土した。

81号土坑 SK-81

(Fig. 41・42 PL. 15)

81号土坑は、II区の南東部に位置し、調査区の東壁に沿って南北流する20号溝の溝底に掘り込まれており、17号住居よりも新しく、20号溝よりも古い。土坑は、20号溝の溝底検出後に確認したため本来の形状は明らかでないが、17号住居の東西壁の状況からすると、長辺が350cm、短辺が260cmほどの楕円形プランが想定される。壁高は95cmほどでN-5°～Wに主軸方

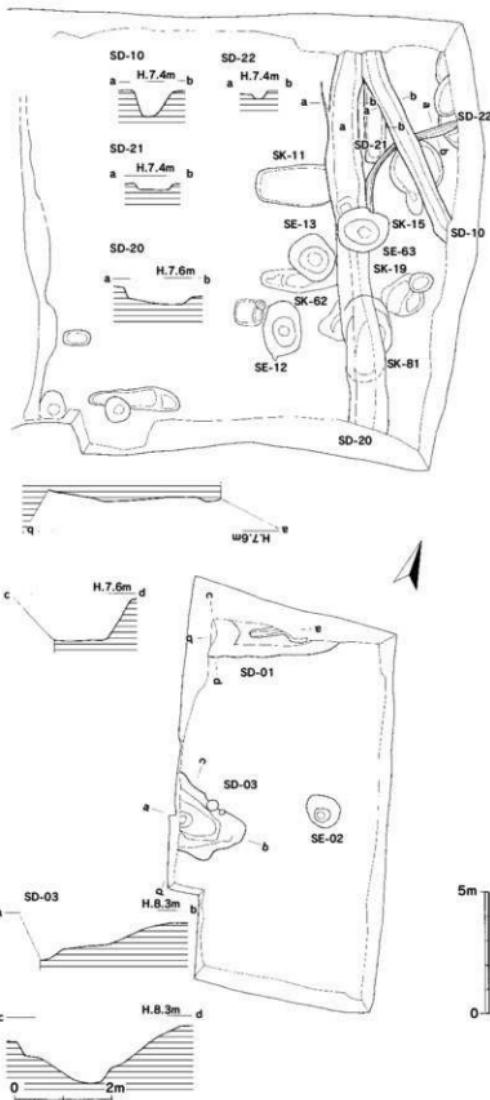


Fig.43 1・3・10・20・21・22号溝実測図 (1/100・1/200)

位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、北東隔壁際には、幅が40cm、奥行きが25cmの小さなステップ状のフラット面が坑底より35cmほど上面に付設されている。20号溝の底面から坑底までの深さは33cm、標高は6.12mで坑底は八女粘土層の上面にまで達している。覆土は、暗茶褐色～濃灰黑色土である。上層の遺物は、20号溝のものが混入しているが、遺物は、須恵器や土師器・土鍋・捏鉢・瓦のほかに白磁碗・染付碗片が出土した。

195は、口径が9.5cm、器高が2.7cmの青磁皿である。底面の4ヶ所に目跡が残る。196は、土師質の火鉢。外面には煤が付着している。197は、砂岩質の五輪塔宝珠である。

123号土坑 SK-123 (Fig. 40)

123号土坑は、II区東壁の北寄りに位置し、西には15号土坑と10号溝がある。また、北壁は60号土坑の南壁に削平され、坑央には122号溝が東西に延びている。平面形は、定かでないが、直径が250~300cmの円～楕円形プランをなそうか。深さが25~30cmの壁面はやや緩やかに立ち上がる。フラットな坑底は北に緩傾斜するが、南壁は10cmほどの比高差で階段状のフラット面を作る2段掘りの構造をなしている。覆土は濃灰黑色土の單一層である。

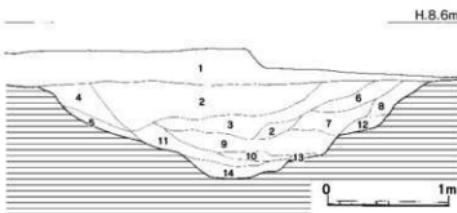
3) 溝 (SD)

1号溝 SD-01 (Fig. 43 PL. 16)

1号溝は、I区の北壁に沿って延びる溝で北壁が調査区外に広がっており溝幅は明らかではない。溝は、緩やかに傾斜しながら西にむかって低くなり、その形状や遺物・覆土の状況から北へ矩形に延びてII区の20号溝に繋がるものと考えられる。覆土は、黄褐色ローム粒を含む暗灰黃褐色土。遺物は、須恵器甕や瓦器・捏鉢・陶器片がわずかに出土した。

3号溝 SD-03 (Fig. 43 ~ 45 PL. 16)

3号溝は、I区西壁の中央部に位置し、4m北に4号土坑がある。溝幅は150~260cmで西は調査区外に延びている。壁面は、緩やかに立ち上がるが東壁は3段のフラット面を作つて溝底に至る。壁高は80cm。覆土は、暗茶～暗灰黑色土で弥生土器器台や土師器



凡例

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. 表土 | 8. 暗黄褐色土+粘土ブロック粒混入 |
| 2. 黄褐色粘土ブロック+黒色土 | 9. 暗黄褐色土：ローム小ブロック粒少量混入 |
| 3. 黑色土 | 10. 黄褐色粘土粒層 |
| 4. 黄褐色土：弱軟質 | 11. にぶい黄褐色土：ローム粒僅少混入 |
| 5. 暗黄褐色土：ローム粒僅少混入 | 12. 黑褐色土：やや軟質 |
| 6. 黄褐色粘土粒土 | 13. 黑褐色土 |
| 7. 黑褐色土 | 14. 黒色土 |

Fig.44 3号溝土層断面実測図 (1/40)

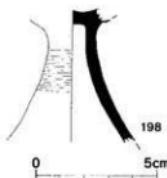
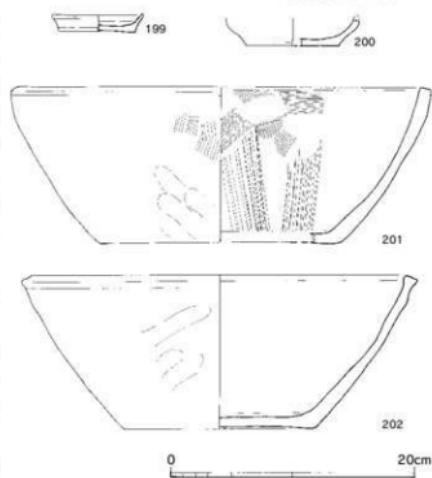
Fig.45 3号溝出土遺物
実測図 (1/2)

Fig.46 20号溝出土遺物実測図 (1/4)

壺・須恵器壺・坏・陶磁器片のほかに石鍋片が出土した。溝の西側が判然としないが、土坑の可能性も考えられる。

198は、須恵器高坏である。絞りを加えながらのナデ調整であるが、脚部上半はカキ目状のナデ仕上げ。胎土は精良で、微細砂を含み焼成は堅緻。灰色。

10号溝 SD-10 (Fig. 43 PL. 16)

10号溝は、II区の北東隅を南北流する幅が70～90cmの溝で、現長は8m。北西隅は21号溝を、南東端は15号土坑を切っている。壁高は40cmで、溝底は浅い凹レンズ状をなす。遺物は、青・白磁碗や捏鉢・摺鉢・染付碗のほかに土師器や須恵器片が出土した。

20号溝 SD-20 (Fig. 43・46 PL. 16)

20号溝は、II区の東寄りを南北流する直線的な溝で、南は西へ矩形に曲がってI区の1号溝に繋がると考えられる。溝幅は100～120cmで、溝底は浅い凹レンズ状をなす。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは30～60cm。覆土は、暗灰黒色土の単一層で青・白磁碗や瓦碗・土鍋・陶器壺・瓦片が出土した。

199は、口径が7.5cmの土師器小皿。200は、底径が7.6cmの土師器坏。201は、口径が34.4cm、器高が13.8cmの瓦質の摺鉢。202は、口径が32.6cm、底径が15.6cm、器高が12.6cmの捏鉢。

21号溝 SD-21 (Fig. 43 PL. 16)

21号溝は、II区北部の10号溝と20号溝に挟まれた短い溝で、溝幅は80cm、現長は4～5mで深さは15cmと浅い。遺物は、土師器片のほかに瓦器・捏鉢・陶磁器片が出土した。

22号溝 SD-22 (Fig. 43)

22号溝は、II区の北東部を63号井戸から123号土坑にむかって弧を描いて延びる細溝で10号溝よりも古い。溝幅は20～30cm、深さは15cm。覆土は暗灰茶褐色土で、土師器片がわずかに出土した。

5. そのほかの遺構と包含層の遺物 (Fig. 47)

各遺構のほかに柱穴や遺物包含層から各種の遺物が出土した。

203は、口径が10cm、器高が5.9cmのミニチュア鉢。204、長さが4.4cmの土錘。205は、直径が、厚さが0.6cmの滑石製白玉。206は、砂岩質の砥石で砥面は2面である。

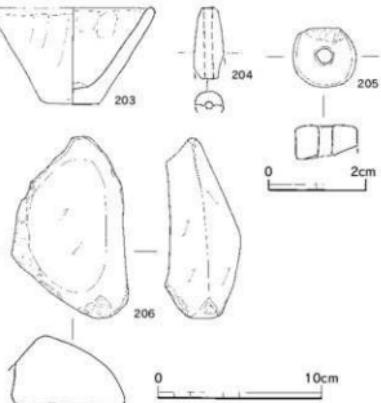


Fig.47 その他の遺構と包含層出土
遺物実測図 (1/1-1/3)

III. おわりに

本調査では、弥生時代から中世に至る各期の竪穴状居や井戸、土坑、溝などを検出したほかに柱痕跡を残しながらもひとつの建物として捉えられなかった柱穴が多数ある。また、基盤層上には、薄い遺物包含層が確認されている。ここで特筆されることは、南東に隣接している第23次調査区の折り重なるような遺構の検出状況とは大きく異なる。なかでも古墳時代の竪穴住居や中世の井戸・溝など

は、調査区の東に寄って広がる傾向が窺え、該期の集落域の西限域と云えよう。これは、那珂川の氾濫原に面することに起因するものと考えられる。次に大きな問題点は、丘陵西縁に迫る那珂川の氾濫原上に開削された大溝（82号溝）である。この溝中からは、弥生時代中期後葉から後期初頭の多様な土器や銅戈の鋳型片などが出土した。この溝は、現状では南北に長く延びるが、その南は東へ矩形に折れて23次調査区の40号溝へと続き、更には97・114次調査区の2030号溝を経て20次調査区の1号溝へと続く総延長が320mの長大な溝になると考えられる。このことからこの溝は、これ以北を取り囲む一種の環壕と考えることが出来ようか。また、この域内には97・114次調査区とその北方150mの100次調査区には甕棺墓域が広がり、それを取り巻くように集落域が広がっている。更に、本調査区を初め、23・97・114・20次調査区の溝や域内からは青銅器の鋳型片や中子が出土しており、その集落域内において青銅器の製造が行われていた可能性が十二分に考えられよう。諸制約の中で十分に検討できなかったが、調査資料の増加を待って詳細な検討を加えた上で論究したい。

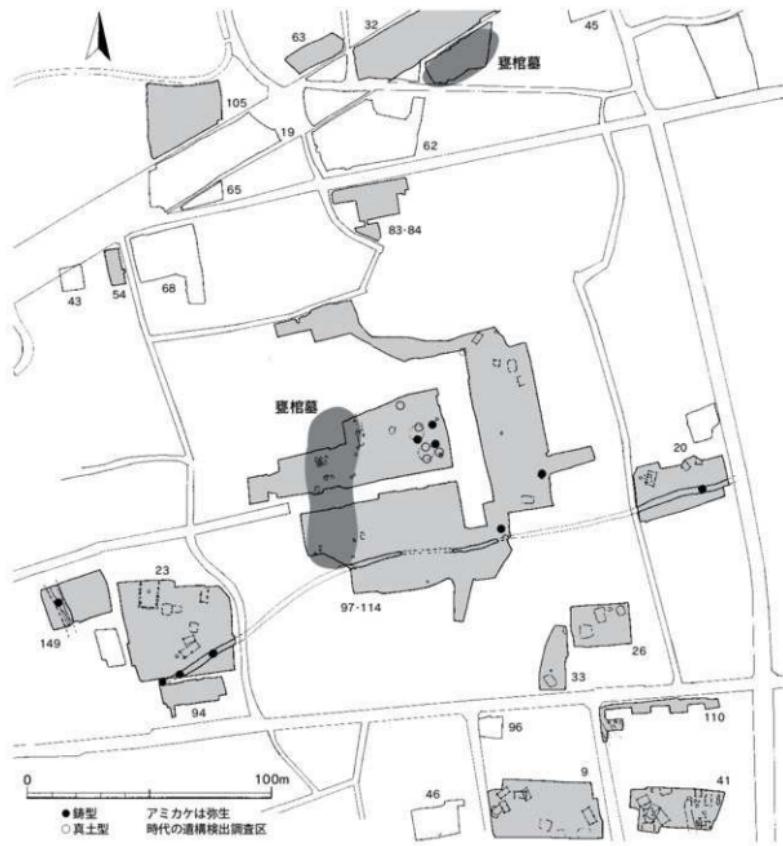


Fig.48 那珂149次調査区周辺の弥生時代遺構分布図 (1/2000)

出土土器観察表凡例

(1) 法量

- 現存または復原される数値を記載した。
- 上段が口径、中段が底径、下段は器高を示す。

(2) 調整手法の特徴

- 調整の用語はカタカナで略式的に記載した。
- 上段が内面、下段が外面の手法を表し、各々上から下への順に記載した。

(3) 胎土

- 砂粒の大小は、微細・細く・細く・小砂（1 mm 粒）< 中砂（1 ~ 2 mm 粒）< 粗砂（3 mm 粒以上）
- 混入物の量は、僅少< 少量 <（無冠）< 比較的多い< 多いの順を基本とする。

(4) 色調

- 濃淡→主調となる色→加わる要素としての色の順で示した。

(備考)

- 土器の摩耗や 2 次的変化について記載した。

* 土器 No は、本文・挿図中の No と一致している。

Tab.4 出出土器観察表 1

No	Fig	出土遺構	層位	時代	器種	法量(口径・底径・高さ/cm)	胎土	焼成	色調(上:内)(下:外)	調整(上:内)(下:外)	備考
1	Fig8	122号井戸		弥生	丹塗り 壺	22.2 8.9± a	精良であるが、小～中 砂粒を少量含む	良好	褐色 茶色	ヨコナダ～ナダ・指振押圧ナダ ヨコナダ	部と側部の側面に三角凸帯が 1条ある 側面内面の上半まで丹塗り
2	Fig8	122号井戸		弥生	丹塗り 壺	15.9± a	精良であるが、小～粗 砂粒を含む	良好	灰褐色 茶色(素地は褐色)	指振押圧ナダ ナダ	部と側面の側面に1条の三 角凸帯と側面上半に深いつ字凸帯 と三角凸帯が各々1条ある 調整は丁寧で丹塗り研削は摩滅が 著しい
3	Fig8	122号井戸		弥生	壺	15.3 10.8± a	やや粗く、小～粗砂粒 を含む	良好	に赤い褐色	ヨコナダ～ナダ後にケズリ ヨコナダ～ナダ後にハケ目	ハケ目幅は2~3mmと細い
4	Fig8	122号井戸		弥生	壺	6 11.4± a	やや粗く、小～中砂粒 を多く含む	良好	灰白色～褐色	ナダ後にハラケ目、内底面は指 振押圧ナダ ナダ後にハケ目～ケズリ	器内厚く、調整も粗い
5	Fig8	122号井戸		弥生	壺	31 8.1± a	やや粗く、小～粗砂粒 を含む	良好	褐色	ヨコナダ～押圧ナダ ヨコナダ～ナダ	外面は摩滅が著しい
6	Fig8	122号井戸		弥生	壺	31.5 14.1± a	良質で、小～中砂粒を 少量含む	良好	褐色	ヨコナダ～ナダ ヨコナダ～ハケ目	ハケ目幅は約2mmと細い 調整は細い
7	Fig8	122号井戸		弥生	丹塗り 鉢2	15.8 6.9± a	精良であるが、小砂粒 と雲母粒を多く含む	良好	褐色 茶色	ヨコナダ後に丹塗り研削 ヨコナダ後に丹塗り研削	口縁部下に2条の丁字凸帯が並ぶ 外面は摩滅が著しい
8	Fig8	122号井戸		弥生	高环	18.4 6.5± a	精良	良好	浅褐色	ヨコナダ～ナダ・ハケ目、外部は 粗い研削 ヨコナダ～ナダ	土器部高环 内底面には摩滅あり
9	Fig8	122号井戸		弥生	高环	16.6 13 12	精良で、少量の雲母微 量を含む	良好	褐色	口:ヨコナダ～ナダ・ハケ目 脚:ヨコナダ～ケズリ 环:ヨコナダ～ナダ 脚:ナダ～ヨコナダ	口環部高环 脚部に黄褐色の剥離状の絶縁がある 整形・調整は丁寧
10	Fig8	122号井戸		弥生	鉢	4.6 5.6± a	粗く、中～粗砂粒を含 む	良好	褐色 灰褐色	ナダ～指振押圧ナダ ナダ～ハケ目	ハケ目幅は1mmとやや細かい 小型类型的可能性もあり得る
11	Fig11	82号溝	上層	弥生	壺	20.4 12.6 32.7	粗く、多くの網～石英 粗砂粒と少量の赤鉄 鉻磁鐵を含む	良好	明赤褐色～くすんだ青褐色 青褐色～くすんだ水褐色	ヨコナダ～ハラケ目 ヨコナダ～押圧ナダ後にハケ目	ハケ目幅は1~1.5mm 側部下下～外底面2次被熱による 赤変と黒斑あり 摩滅顕著

Tab.5 出土器観察表2

No	Fig	出土構	層位	時代	器種	法身(口付・ 背付・蓋付)cm	胎 土	焼成	色調 (上:内) (下:外)	調整 (上:内) (下:外)	備 考
12	Fig11	R2号溝	上層	弥生	甕	14.2	質で、小砂粒を含む	良好	褐色	ヨコナデ～押圧ナデ後にやや粗いケズリ	口縁部は、直口した後に小さく外反する。 整型・調整は粗い。
						15.7+ a				ヨコナデ～指壓押圧ナデ	
13	Fig11	R2号溝	上層	古墳	甕	15.5	質であるが、微細～ 石英小～無砂粒を多 く含む	良好	褐色	ヨコナデ～押圧後に粗いハケ ズリ	ハケ口幅は~1.5mmでやや粗い。 上半は下から上へ、 内外面とも調整は粗い。
						22.8+ a				ヨコナデ～ハケ目	
14	Fig11	R2号溝	上層	弥生	高杯	17.4cm	質で、微細～ 石英小～無砂粒を少 なく含む	良好	赤褐色	ヨコナデ～胸/ケズリ状のナデ	環内面に1条のヨコ凹槽が巡る、内 面頭に化粧物様の 黒色物が付着 等離散者
						8.3+ a				ヨコナデ～ケズリ状にナデ 胸/絞り状のヨコナデ	
15	Fig11	R2号溝	上層	弥生	丹塗り 圓形器台	7.5+	質で、比較的多くの 微細～細砂粒と少量 の雲母微細を含む	良好	淡明褐色 淡灰褐色	环内ヨコナデ～ナデ 胸/ケズリ状のナデ	環端部に3条の浅い凹槽が巡る
						7.5+ a				丹塗り研磨	
16	Fig11	R2号溝	上層	弥生	甕	9.2	粗く、多くの細～石英 中砂粒と若干量の 雲母微細を含む	良好	淡黄白色～淡黃褐色 淡黃褐色	指壓押圧ナデ	受け部間に2次被熱による赤変→ 支撑に軽用? ハケ口幅は1mm弱で細かい
						13				指壓押圧ナデ～一部にハケ目	
17	Fig11	R2号溝	上層	弥生	蓋	11.2	やや粗く、多くの小～ 中砂粒と少量の雲母 を含む	良好	褐色	ヨコナデ～指壓押圧ナデ	無形の蓋
						3.7				ヨコナデ～粗い研磨	
18	Fig11	R2号溝	上層	弥生	瓦	17	粗	良好	灰色	ヨコナデ	底部はナデで、高台高は2~3mm
						5.6+ a				ヨコナデ～粗い研磨	
19	Fig11	R2号溝	上層	弥生	手捏 ミニチュア 鉢	4.2	質であるが、僅少の 小砂粒を含む	良好	褐色	指壓押圧ナデ	底部は底気球の柔柔をなす 整形・調整はやや粗い
						3.1				指壓押圧ナデ	
20	Fig11	R2号溝	上層	弥生	手捏 ミニチュア 鉢	4.6	質で、少量の小～中 砂粒を含む	良好	褐色	指壓押圧ナデ	底部は底気球の柔柔をなす 整形・調整はやや粗い
						3.5				指壓押圧ナデ	
21	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 蓋	11.7	質で、多くの小～ 中砂粒と少量の雲母 を含む	良好	褐色(赤の多い淡明赤 褐色)	ヨコナデ～指壓押圧ナデ～先 の押圧ナデ	長部の袋状口縁部 口縁内面まで 環内面に丹塗れ 丹塗り直擦は丁寧な仕上げ
						12.8+ a				ヨコナデ～ナデ～丹塗り研磨	
22	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 蓋	8.6	質で、多くの微細～ 小砂粒の外に僅少の 雲母微細と赤鉄磁 を含む	良好	淡明赤褐色	ヨコナデ～指壓押圧ナデ	脚部下部に2次被熱による赤変あり 袋状口縁部内面赤面部 赤色の痕がある →丹塗り直擦
						6				ヨコナデ～ナデ～丹塗り研磨	
23	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 蓋	18.1				ヨコナデ～ナデ～丹塗り研磨	
						11.7				ヨコナデ～指壓押圧ナデ～先 の押圧ナデ	
24	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 蓋	12.8+ a	質で、少量の微細～ 細砂粒を含む	良好	褐色(赤の多い淡明赤 褐色)	ヨコナデ～指壓押圧ナデ～先 の押圧ナデ	長部の袋状口縁部 口縁内面まで 環内面に丹塗れ 丹塗り直擦は丁寧な仕上げ
						8.6				ヨコナデ～指壓押圧ナデ	
25	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 蓋	6	質で、多くの微細～ 小砂粒の外に僅少の 雲母微細と赤鉄磁 を含む	良好	淡明赤褐色	ヨコナデ～指壓押圧ナデ	脚部下部に2次被熱による赤変あり 袋状口縁部内面赤面部 赤色の痕がある →丹塗り直擦
						18.1				ヨコナデ～ナデ～丹塗り研磨	
26	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 蓋	11.3	質で、微細～細砂粒 を比較的多く含む	良好	淡明赤褐色	ヨコナデ～指壓～先の押圧ナデ	短部の袋状口縁部 内面底近くに 丹塗りあり 胴部内面には化粧物様の赤色物付 着全條的に歪
						7.5				ヨコナデ～ナデ～や粗いケ ズリ 目後に丹塗り研磨	
27	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 直頭	16	質で、多くの微細～ 小砂粒と若干量の 雲母微細と赤鉄磁 を含む	良好	暗灰褐色	ヨコナデ～指壓押圧ナデ	袋状口縁部内面まで 環内面に丹塗れ 丹塗り直擦は丁寧な仕上げ
						27+ a				ヨコナデ～ナデ～丹塗り研磨	
28	Fig12	R2号溝	中層	弥生	蓋	21.6	質であるが、微細～ 小砂粒をや多く含む外 に月光面と赤鉄磁小 を含む	良好	淡赤褐色	ヨコナデ～指壓押圧ナデ、ハケ目 ヨコナデ	口縁部上部に2cm程の円形浮文貼 勧善の上に丹塗り土器の可能性も
						5.1+ a				ヨコナデ	
29	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 蓋	23.9	質で、多くの微細～ 小砂粒と若干量の 雲母微細と赤鉄磁を 含む	良好	明赤褐色 淡赤褐色	ヨコナデ～押圧ナデ ヨコナデ～丹塗り研磨	既先口縁部に2cm程の圓形浮文貼 勧善内面に丹塗れ有り
						5.4+ a				ヨコナデ	
30	Fig12	R2号溝	中層	弥生	直頭	30.3	質で、比較的多くの 微細～小砂粒と若干量の 石英小～無砂粒と若干量の 雲母微細～赤鉄磁を含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	既先口縁部に2cm程の圓形浮文貼 勧善内面に丹塗れ有り
						13.5+ a				ヨコナデ～指壓押圧ナデ	
31	Fig12	R2号溝	中層	弥生	圓形 蓋	23.3	やや粗く、多くの微細～ 石英小砂粒と少量の 雲母微細を含む	良好	淡黄褐色 明赤褐色	ヨコナデ～指壓押圧ナデ ヨコナデ～ナデ	既先口縁部に2cm程の圓形浮文貼 勧善内面に丹塗れ有り 既先の口縫部に3条のV字型凸筋、胴部に2 条のV字型凸筋がある
						23.3+ a				ヨコナデ～ナデ	
32	Fig12	R2号溝	中層	弥生	丹塗り 圓形蓋	23.3	質で、多くの微細～ 石英小砂粒と少量の 雲母微細を含む	良好	明赤褐色 朱色	強い指壓押圧ナデ	既先口縁部に2cm程の圓形浮文貼 勧善内面に丹塗れ有り 既先の口縫部に3条のV字型凸筋、胴部に2 条のV字型凸筋がある
						23.3+ a				ヨコナデ～丹塗り研磨	
33	Fig12	R2号溝	中層	弥生	直頭	17.6	粗く、多くの微細～ 石英小砂粒と雲母微細～ 小砂粒を含む	良好	淡黄灰褐色 淡明褐色	ヨコナデ～指頭～指頭直頭ナデ ヨコナデ～ナダ	既先口縁部に3条の横凹筋、部内面に 2条のV字型凸筋がある 既先の口縫部に2cm程の圓形浮文貼 勧善内面に丹塗れ有り
						15.3cm				ヨコナデ	

Tab.6 出土器観察表 3

No	Fig	出土構	層位	時代	器種	法規(口径・ 底径・高さ) cm	胎 土	焼成	色調 (上:内) (下:外)	調整 (上:内) (下:外)	備 考
34	Fig13	R2号溝	中層	先秦	?	11.3+ a	やや粗く、細～中砂粒 を多く含む	良好			ハケ口幅は4~5mmと無い
35	Fig13	R2号溝	中層	先秦	長頸壺	8 17.3+ a	やや粗く、比較的多くの 微細～中砂粒と僅 少の石英微細粒と中 砂粒を含む	良好	明赤橙色～淡灰黑色 くすんだ淡赤橙色	指顎・指先による押圧ナデ 細かいハケ目	幅2~4cmの縦扁状の黒斑あり
36	Fig13	R2号溝	中層	先秦	壺	13.4 7.2~7.6 21.3	質地であるが、細～石 英小砂粒と比較的多 く含む	良好	透明黄褐色	ヨコナデ～押圧ナデ、下～上への ハラズツリ ヨコナデ～ナデ	外底面はベラケズリ 透黒あり
37	Fig13	R2号溝	中層	先秦	壺	13.3 7.6 26.9	粗く、細～石英中砂粒 を多く含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ後にハケ目～頭頭・指先 による押圧ナデ ヨコナデ～ハケ目	口縁部内面のハケ口幅は15mm、外底 は上手に3mm程度は上手が2mmで下へ 下手が2mmで下へと外へ向には 黒斑を中心に淡黄褐色より→2次黒斑?
38	Fig13	R2号溝	中層	先秦	壺	16.4 22.3+ a	粗く、細～中砂粒の石 英粒を多く含む	良好	透明橙色	ヨコナデ～指頭・指先の押圧ナデ ヨコナデ～ハケ目	ハケ口幅は約2mmと無い 透黒あり
39	Fig13	R2号溝	中層	先秦	月溶り 壺	18.5 12.5+ a	質地であるが、比較的 多くの微細～石英と 若干量の石英小砂粒 を含む	良好	透明中砂粒	ヨコナデ～指頭押圧ナデ ヨコナデ～ナデ	腹部内面に丹青れ有り 摩滅調者 腹部に1条の三角凸筋が巡る
40	Fig13	R2号溝	中層	先秦	壺	21.5 25.9+ a	質地であるが、やや多 くの微細～石英小砂 粒と少量の石英微細 粒を含む	良好	透明赤橙色	ヨコナデ～指頭・指先押圧ナデ ヨコナデ～ナデ	腹部に1条の三角凸筋が巡る 口底部の一部にはベンダラ状の頸 料が僅かに付着しており、持続り の可能性がある
41	Fig13	R2号溝	中層	先秦	壺	14~15.2 19.6+ a	粗く、細～小砂粒を多 く含む	良好	淡白灰色～淡黃白色 淡赤橙色	ヨコナデ～押圧ナデ	腹部に1条の三角凸筋が巡る やや青 摩滅調者
42	Fig13	R2号溝	中層	先秦	壺	20.1 9 32~33	粗く、細～石英粗砂粒 を多く含む	良好	淡白灰色～淡黃白色 淡黃白色	ヨコナデ～指頭・指先押圧ナデ ヨコナデ～ナデ後のハケ目	上手どうしは接点がないが、調整 や腔上から同一回体で 脚部外側のハケ目は下手がやや粗 く、上半は黒が無い
43	Fig14	R2号溝	中層	先秦	小型壺	10.1 4.8 6.8	質地で、微細～石英小 砂粒と僅少の石英粒 を含む	良好	明赤橙色 透明中砂粒～淡黃褐色	ヨコナデ～指頭押圧ナデ ヨコナデ～押圧ナデ～ハケ目	全体に歪で、底部の外側には網 かいハケ目
44	Fig14	R2号溝	中層	先秦	小型壺	12.4 5.9 9	質地であるが、微細～ 小砂粒を比較的多く 含む	良好	透明中砂粒	ヨコナデ～ハケ目～ 指頭・指先 による押圧ナデ ヨコナデ～細いテテハケ目	ハケ口幅は1~1.5mm
45	Fig14	R2号溝	中層	先秦	壺	7.8 17.3+ a	質地で、少量の微細～ 細砂粒と僅少の石英 微細粒を含む	良好	くすんだ灰黄色 明赤橙色	指頭押圧～ハケ目 ナデ～ハケ目	腹部と脚部の屈曲部に通過する2条の 三角凸筋と胸部にM字凸筋が並ぶ。ハ ケ口幅は1mm、透點はないが同一側部。 脚部に1.1×1.2mmの円筒形穴を取 て対称形に配置される
46	Fig14	R2号溝	中層	先秦	壺		質地であるが、比較的多 くの微細～細砂粒と僅 少の石英粗砂粒と葉微 細を含む	良好	透明橙色 くすんだ淡褐色	指頭・指先による押圧ナデ ヨコナデ～タテハケ目	腹部やや開きを呈いて2条、脚部下平 に透達 2次黒斑の一部の三角凸筋が巡る 2次黒斑による面部の調節がある
47	Fig14	R2号溝	中層	先秦	壺	6.7 14.8+ a	質地で、多くの微細～ 細砂粒と少量の小砂 粒を含む	良好	明赤橙色 くすんだ赤橙色～淡黃 褐色	指頭押圧ナデ 指頭押圧後に細かいハケ目 手部引き継ぎ上げ	ハケ口幅は1mmで細かい 底部に黒斑
48	Fig14	R2号溝	中層	先秦	壺	15.4 7.7~8 22.3	質地であるが、微細～ 小砂粒を多く含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ～指頭押圧後に丁寧な 研削調のナデ ヨコナデ～やや粗いハケ目	腹部は円錐貼付 内部の丁寧な調整に対して外側は 無い
49	Fig14	R2号溝	中層	先秦	月溶り 壺	6.8 12+ a	質地で、微細～細砂粒 と葉微細粒を比較的 多く含む	良好	透明明白色 朱色(素地は淡黃褐色)	指頭押圧ナデ 丹青り研磨う	外面は一筆な調節 丹青り粗粒有 底面は上手に研磨 内外面ともに摩滅 調節が施されている
50	Fig14	R2号溝	中層	先秦	壺	5.6~6 11.3+ a	微細～中砂粒を比較的 多く含む。	良好	明赤橙色 明赤橙色～淡黃褐色	指頭押圧ナデ 押圧後に細いハケ目	口底部欠 外脚部中に1条の三角 凸筋が並ぶ 全体的に調整は粗く、歪みが著し い。
51	Fig14	R2号溝	中層	先秦	壺	10 23.3+ a	やや粗く、細～中砂粒を多 く含む	良好	明赤橙色 くすんだ淡赤橙色	指頭押圧ナデ 押圧ナデ後に細いハケ目	口底部欠 外脚部中に1条の三角 凸筋が並ぶ 全体的に調整は粗く、歪みが著し い。
52	Fig14	R2号溝	中層	先秦	壺	8.8 15+ a	粗く、多くの微細～石英 小砂粒と僅少の赤鉄 銹小塊を含む	良好	透明明白色 透明明白色～淡黃褐色	指頭押圧後にヘラ状工具によ るナデ上げ ハケ口後に粗いハケ目	底部上に未定の穿孔有り 内外面ともに摩滅調者

Tab.7 出土器観察表4

No	Fig	出土構	層位	時代	器種	法規(口径・ 底径・高さ/cm)	胎	焼成	色調(上:内)(下:外)	調整(上:内)(下:外)	備考
53	Fig14	R2号溝	中層	弥生	甌	8.2 9.4+ a	粗く、多くの微細～小 砂粒と少量の雲母微 細～小粒を含む	良好	淡灰黄色 淡褐色	指振押圧ナダ ハケ目	底部は2.2～3cmの楕円形の穿孔 がある ハケ目幅は4mmで下から上へ傾 き状に調整 2次焼成による変形がある
54	Fig14	R2号溝	中層	弥生	甌	8.2～8.4 20.3+ a	粗く、多くの微細～石英 小～中砂粒と少量の雲 母微細を含む	良好	明赤褐色	指振押圧ナダ 粗いハケ目	ハケ目幅は2～3mm、一単位は約 3cm 外面には2次焼成による変形あり
55	Fig14	R2号溝	中層	弥生	甌	10.4 16.3+ a	精良で、微細～繊砂粒 と少量の雲母微細を 含む	良好	明赤褐色 淡赤褐色～淡明黃褐色	内底面は押圧ナダ ナダ?	變形著 胎上的形狀に(81:異型窓)と同 一體か?
56	Fig15	R2号溝	中層	弥生	手捏ね 小型甌	8.8 5.4 8.7～8.9	質良で、比較的多くの 微細～石英小砂粒と 少量の雲母小砂粒を 含む	良好	黒茶色 墨黒茶～明赤褐色	ヨコナダ～指振押圧ナダ ヨコナダ～ハケ目	ハケ目幅は1.5～2mm 外面には明赤褐色部あり →2次焼成か?
57	Fig15	R2号溝	中層	弥生	甌	12.7 6.8 14.6	粗く、微細～石英中砂 粒を多く含む	良好	淡灰黑色 淡明褐色	指振押圧ナダ 粗いハケ目	ハケ目幅は4mmと粗い 底部に黒斑あり
58	Fig15	R2号溝	中層	弥生	甌	7.6～8.2 15.5+ a	やや粗く、微細～石英 中砂粒を比較的多く 含む	良好	淡黄褐色	指振・指先の押圧ナダ 押圧ナダ後に一部ハラナダ	底部に黒斑あり
59	Fig15	R2号溝	中層	弥生	椭型甌	20.6 8.2+ a	精良で、多量の繊～石 英小砂粒とやや多く の雲母粒・赤鉄鉱粉・ 小塊を含む	良好	淡明赤褐色 淡黄褐色	指振押圧ナダ	口縁下に1枚のコ字凸巻が通る 表面の変形が著しいが、胎上的に 丹塗りの可能性がある
60	Fig15	R2号溝	中層	弥生	甌	32.1～33.3 13.1+ a	粗く、微細～繊砂粒と 少～中砂粒を多く含 む	良好	淡黄褐色	ヨコナダ～指振押圧ナダ ヨコナダ～押圧ナダ後にハケ目	口縁下7～8cmに大き目のコ字 凸巻が1枚ある ハケ目幅は5mmと粗い
61	Fig15	R2号溝	中層	弥生	丹塗り甌	26.6 15.4+ a	精良で、少量の繊～石 英小砂粒を含む	良好	透明赤褐色 朱色(素地は淡明赤褐色)	ヨコナダ～ヨコハケ目～指振押圧 ナダ後に粗いハケ目 ヨコナダ～ハケ目後に丹塗り研磨	内部のハケ目幅は4～5mmと粗い が外縁は1mmと細かい 接点はないが下の上半部
61	Fig15	R2号溝	中層	弥生	丹塗り甌	8.6 13.3+ a	精良で、少量の繊～石 英小砂粒を含む	良好	透明赤褐色 朱色(素地は淡明赤褐色)	ヨコナダ～指振押圧ナダ後に粗い ハケ目 ヨコナダ～ハケ目後に丹塗り研磨	内部のハケ目幅は4～5mmと粗い が外縁は1mmと細かい 接点はないが下の下半部
62	Fig15	R2号溝	中層	弥生	小型甌	19 16+ a	質良で、多くの繊～石 英小砂粒と少量の雲 母微細を含む	良好	淡明褐色 くすんだ淡赤褐色	ヨコナダ～指振押圧ナダ ヨコナダ～ハナダ	外面には蝶様の黒色物付着
63	Fig15	R2号溝	中層	弥生	甌	21.1 9.3 18.5～18.9	質良で、微細～繊砂粒 を比較的多く含む	良好	明赤褐色 明赤褐色～ややくすんだ 黄褐色	ヨコナダ～指頭・胎先の押圧ナダ ヨコナダ～ハラ抹工具によるナ ダ上～粗いハケ目	ハケ目幅は4～5mmと粗い 全体的に変形が著しい
64	Fig15	R2号溝	中層	弥生	甌	24 16+ a	質良で、比較的多くの 繊～石英小砂粒と少 量の雲母微細を含む	良好	明赤褐色 くすんだ淡黄褐色	ヨコナダ～押圧後に粗いハケ 目 ヨコナダ～ハケ目	ハケ目幅は1.5mm～2mm 底部には2次焼成による変形があ る
65	Fig15	R2号溝	中層	弥生	甌	19.9 8.6 23.8	質良で、多くの繊～小 砂粒と微量の赤鉄鉱 塊を含む	良好	淡明赤褐色	ヨコナダ～押圧ナダ ヨコナダ～押圧ナダ	内部には煮沸による炭化物付着 外面には2次焼成による変形と保 が付着
66	Fig16	R2号溝	中層	弥生	甌	14.8 7.6 18.3	質良で、比較的多くの 微細～石英小砂粒の 外に少量の雲母微細 を含む	良好	淡明赤褐色	ヨコナダ～指振押圧後ナダ ヨコナダ～粗いハケ目	ハケ目幅は3mmで粗い 外底面は押圧後ナダにナダ
67	Fig16	R2号溝	中層	弥生	小型甌	36.2 23.9+ a	粗く、繊～石英粗砂 粒を多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナダ～指頭・胎先の押圧ナダ ヨコナダ～ハケ目	ハケ目幅は3～4mmで調整は全 体的に粗い 内外面ともに粗い
68	Fig16	R2号溝	中層	弥生	甌	7.7～8.2 7+ a	粗く、繊～中砂粒を多 く含む	良好	淡黄褐色～淡赤褐色 淡黄褐色	指振押圧ナダ	底部に約4～内への燒成前の穿孔有 り 外面に2次焼成による変形あり
69	Fig16	R2号溝	中層	弥生	甌	9 4.4+ a	粗く、繊～中砂粒を多 く含む	良好	淡明赤褐色 淡赤褐色	指振押圧ナダ ナダ後にハケ目	ハケ目幅は2mmで一単位は10～ 12本 2次焼成
70	Fig16	R2号溝	中層	弥生	甌	14.4 13.3+ a	精良で、微細～小砂 粒と雲母・赤鉄鉱を含 む	良好	淡明赤褐色	ヨコナダ～ハケ目 指振押圧ナダ ヨコナダ～粗いハケ目	ハケ目幅は2mmで一単位は10～ 12本 2次焼成

Tab.8 出土器物観察表 5

No	Fig	出土構	層位	時代	器種	法寸(口径・底径・高さ・厚さ)cm	胎 土	焼成	色調(上:内)(下:外)	調整(上:内)(下:外)	備 考
71	Fig16	R2号溝	中層	古墳	灰	16.4 粗く、網し石英・砂粒 多く含む		良好	淡黃褐色 淡黃褐色～くすんだ淡赤褐色	ヨコナダ～押圧ナダ～ヘラケズリ ヨコナダ～ナダ～ハケ日	脚部下に2次被熱による赤変と 表面の黒色付着
						28.5+a					ハケ日幅は1.5mm～2mm
72	Fig16	R2号溝	中層	共生	大型 灰	46 直筒で、多くの微細～ 小砂粒・墨少・少量の 石英中砂粒を含む 23+a		良好	淡明赤褐色	ヨコナダ～押圧後に無いハケ日 ヨコナダ～無いハケ日	字型のハケ日は1.5～2mmのテテ ハケ日は上に幅4mmの無いハケ 日 外面は2mm 壁面片
						36+a					
73	Fig16	R2号溝	中層	共生	大型 灰	50.4 良質であるが、比較的 多くの微細～細砂粒 と性少の小砂粒・赤鉄 を含む 36+a		良好	明茶褐色	ヨコナダ～押圧ナダ ヨコナダ～ナダ	口縁部下に1条の三角凸帯が巡る 内外面に墨斑の黒色物を薄く付着 使用粘土の类型
						16.6					
74	Fig17	R2号溝	中層	共生	丹塗り 高环	精良で、微細～小砂粒 を比較的多く含む 8.3+a		良好	淡桃褐色	押圧後に中心から口縁への放射状 の研磨 ナダ後の丹塗り研磨 脚は旋削研 磨	内外面ともに丹塗り研磨
						21.6 直筒で、微細砂粒を僅 かに含む 4.9+a		良好	淡赤褐色 朱色	ヨコナダ～押圧後に丹塗り研磨 ヨコナダ～丹塗り研磨	内面の研磨は环底から口縁にむ かって射出状で上げる 丹の剥落部は墨斑 环底の中間に1条のシャープな三角 内凹部がある
						26.6 直筒で、微細～細砂粒 と若干赤鉄を含む 7.5+a		良好	朱色(素地は淡明赤褐色)	ヨコナダ～ナダ後に丹塗り研磨 ナダ後に丹塗り研磨	口縁部は丹塗り研磨、内面は中心か ら口縁にむかって放射状の 研磨 外側の丹塗り研磨は剥落が著しい
75	Fig17	R2号溝	中層	共生	丹塗り 高环	24+a 精良で、微細～小砂粒 を含む 9.2+a		良好	朱色(素地は淡黄褐色)	ヨコナダ～押圧後に丹塗り研磨 ヨコナダ～ナダ後に丹塗り研磨	口縫端は全く 丹の剥落面に黒色物付着→2次被 熱
						30.8 直筒で、比較的多くの微 細～小砂粒の外に少量の 雲母微細・赤鉄・小砂粒 を含む 14.5+a		良好	朱色 (素地は淡明赤褐色)	ヨコナダ～押圧ナダ、その後に丹 塗り研磨 ヨコナダ～押圧ナダ、その後に丹 塗り研磨	全体的に並みあり 口部と外側 は丹の剥落が著しく 外側の一部に 黒色頸部が遺存→黒色顔料を布 後に丹塗り研磨か
76	Fig17	R2号溝	中層	共生	丹塗り 高环	40 直筒で、微細～細砂粒 と若干赤鉄を含む 12.4+a		良好	朱色(素地は明赤褐色)	ヨコナダ～押圧ナダ後に丹塗り 研磨 ヨコナダ～ナダ後に丹塗り研磨	环外縁には丁寧な丹塗り研磨後に 幅約2mmの剥離が2～4mm間隔で 輪方状に残る 手がいいが内外両面と脚は丹 塗りの可能性がある
						32.4 直筒で、比較的多くの 微細～小砂粒と併少の 雲母微細・赤鉄・小砂粒 を含む 11+a		良好	明赤褐色	ヨコナダ～指壓押圧後に丹塗り 研磨 ヨコナダ～ナダ後にハケ日、その 後丹塗り研磨	口縫部にやや歪みあり 壁間に1条の丹の剥落が墨斑 ハケ日幅は1.5～2mm
						28.3 直筒で、比較的多くの 微細～小砂粒と併少の 雲母微細・赤鉄・小砂粒 を含む 18.3 直筒で、微細～細砂粒 と少量の雲母微細を 含む 25		良好	朱色(素地は淡明赤褐色)	ヨコナダ～押圧ナダ後に丁寧な 丹塗り研磨 ヨコナダ	鏡先口部で脚部とく 外側の一部に丹の剥落があり→环～脚 全体の丹塗りの可能性有
78	Fig17	R2号溝	中層	共生	丹塗り 高环	精良で、微細～細砂粒 と少量の雲母微細を 含む 6.2+a		良好	朱色(素地は明赤褐色)	ヨコナダ～押圧ナダ、その後に丹 塗り研磨 ヨコナダ	鏡外縁には丁寧な丹塗り研磨後に 幅約2mmの剥離が2～4mm間隔で 輪方状に残る 手がいいが内外両面と脚は丹 塗りの可能性がある
						32.4 直筒で、比較的多くの 微細～小砂粒と併少の 雲母微細・赤鉄・小砂粒 を含む 11+a		良好	朱色 (素地は淡赤褐色)	ヨコナダ～指壓押圧後に丹塗り 研磨 ヨコナダ～ナダ後にハケ日、その 後丹塗り研磨	口縫部にやや歪みあり 壁間に1条の丹の剥落が墨斑 ハケ日幅は1.5～2mm
						28.3 直筒で、比較的多くの 微細～小砂粒と併少の 雲母微細・赤鉄・小砂粒 を含む 18.3 直筒で、微細～細砂粒 と少量の雲母微細を 含む 25		良好	朱色(素地は淡明赤褐色)	ヨコナダ～押圧ナダ後に丁寧な 丹塗り研磨 ヨコナダ	脚部は四端状に削む
80	Fig17	R2号溝	中層	共生	丹塗り 高环	精良で、微細～細砂粒 と少量の雲母微細を 含む 6.2+a		良好	朱色(素地は明赤褐色)	ヨコナダ～押圧ナダ後に丁寧な 丹塗り研磨 ヨコナダ	鏡先口部で脚部とく 外側の一部に丹の剥落があり→环～脚 全体の丹塗りの可能性有
						32.4 直筒で、比較的多くの 微細～小砂粒と併少の 雲母微細・赤鉄・小砂粒 を含む 11+a		良好	朱色 (素地は淡赤褐色)	ヨコナダ～指壓押圧後に丹塗り 研磨 ヨコナダ～ナダ後にハケ日、その 後丹塗り研磨	口縫部にやや歪みあり 壁間に1条の丹の剥落が墨斑 ハケ日幅は1.5～2mm
81	Fig17	R2号溝	中層	共生	丹塗り 高环	30.8 直筒で、網状～石英小 砂粒を多く含む 14.5+a		良好	明赤褐色	ヨコナダ～指壓押圧後に丹塗り 研磨 ヨコナダ～ナダ後にハケ日、その 後丹塗り研磨	口縫部にやや歪みあり 壁間に1条の丹の剥落が墨斑 ハケ日幅は1.5～2mm
						32.4 直筒で、比較的多くの 微細～小砂粒と併少の 雲母微細・赤鉄・小砂粒 を含む 11+a		良好	朱色 (素地は淡赤褐色)	ヨコナダ～指壓押圧後に丹塗り 研磨 ヨコナダ～ナダ後にハケ日、その 後丹塗り研磨	口縫部にやや歪みあり 壁間に1条の丹の剥落が墨斑 ハケ日幅は1.5～2mm
82	Fig17	R2号溝	中層	共生	丹塗り 高环	28.3 直筒で、比較的多くの 微細～小砂粒と併少の 雲母微細・赤鉄・小砂粒 を含む 18.3 直筒で、微細～細砂粒 と少量の雲母微細を 含む 25		良好	朱色(素地は淡明赤褐色)	ヨコナダ～押圧ナダ後に放射状 の研磨 脚：上半は拂り後に～ヨコナダ	脚部は四端状に削む
83	Fig17	R2号溝	中層	共生	高环	精良で、赤鉄紙塵を比 較的多く含む 8.6+a		良好	透明粉色	ヨコナダ～押圧ナダ後に上～右へ 下～左へ～右～下への絞り 脚：ヨコナダ 脚：左～上へ～右へ～下へ	鏡先口部で脚部とく 外側の一部に丹の剥落があり→环～脚 全体の丹塗りの可能性有
84	Fig17	R2号溝	中層	共生	丹塗り 高环	精良で若干量の微 細砂粒と少量の赤鉄紙 塵を含む 8.8+a		良好	明粉色	脚：指壓押圧ナダ～押圧ナダ	脚の開き方から台車付の可能性有 り 毫變が美しいが、内面に内折痕が あり、丹塗りの可能性あり得る
85	Fig17	R2号溝	中層	共生	高环	精良で、微細～細砂粒 と少量の雲母微細を少 量含む 8+a		良好	透明粉色 淡明粉色	ヨコナダ～押圧ナダ～指壓押 圧ナダ～ナダ～ハケ日	脚上半にハラ工具によるヨコ凹線 を9～10本継続(山筋系か?)
86	Fig18	R2号溝	中層	共生	丹塗り 筒形器台	精良で、少量の微細～ 細砂粒を含む 8.8+a		良好	透明粉色	ヨコナダ～指壓押圧ナダ～押圧ナ ダヨコナダ～研磨	脚下に日輪幅1mmの細かい筋文 を施す 筒端部は横幅拡張に削む
87	Fig18	R2号溝	中層	共生	丹塗り 筒形器台	精良で、微細～細砂粒 を含む 4.8+a		良好	淡黃褐色	指壓～指先による押圧ナダ 脚：指壓ナダ～ハケ日	受け部：脚部は欠損 脚下に2枚のM字凸帯が巡る 丹の剥落が著しい
88	Fig18	R2号溝	中層	共生	丹塗り 筒形器台	精良で、微細～細砂粒 の外に若干の雲母微 細を含む 30.6+a		良好	透明粉色 朱色	指壓～指先の押圧ナダ ヨコナダ～研磨	鏡頭は概ね4mm程のペラ先工具 で丁寧に削る 壁間に1条のヨコ凹線 ヨコ凹線は内側に、ヨコ凸線は外側 内側に丹塗れ有り
89	Fig18	R2号溝	中層	共生	高环	精良で、微細砂粒か に含む 11.3 22.8+a		良好	淡黃褐色～淡黃灰色	ナダ ナダ	鏡頭は既成の鏡頭が2枚ある→ 等間隔に5～6孔有り 内孔から部部に1.2mm先工具によ るビットで筒形器台を鏜く ビット上半部分

Tab.9 出土器観察表 6

No	Fig	出土構	層位	時代	器種	法規(口径-底径-高さ/cm)	胎	焼成	色調(上:内)(下:外)	調整(上:内)(下:外)	備考	
90	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	112 13~132 163	やや粗く、比較的多くの微細～石英小砂粒と少量の雲母微細を含む	明赤橙色 淡黄橙色	ヨコナダ～指先押圧ナデ ハケ目	内面にはヘラ状工具によるナデ痕やハケ目が残る		
									ヨコナダ～指面押圧後にハケ目		ハケ目幅は2.5~3mm程	
									ヨコナダ～ハケ目			
91	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	128 148 18	粗良であるが、比較的多くの微細～小砂粒と很少の雲母微細を含む	淡橙白色 淡黄橙色	ヨコナダ～指頭～指先による押圧ナデ ヨコナダ～ハケ目	掌裏著しいがハケ目幅は2mmと粗い 口縁部に変赤あり→2次被熱か?		
92	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	142 182+ a	粗く、多くの微細～石英小砂粒と少量の雲母微細を含む	明赤橙色 淡黄橙色	ヨコナダ～掉り後に指頭～指先による押圧ナデ ヨコナダ～ハケ目	ハケ目幅は1~1.5mmと細い 外面上に2次被熱による赤变と渋色がかかる 支脚に転用か?		
93	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	10.5 10.9~11.3 10.1~10.4	粗く、多量の細～中砂粒と很少の雲母微細を含む	明赤橙色	指頭～指先による押圧ナデ 脚部はナデ後にハケ目	ハケ目幅は1.5~2mmと粗い 赤变・渋色		
									指頭押圧後にやや細いハケ目			
94	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	7.5 8.3 10.1	やや粗く、比較的多くの細～小砂粒と若干量の雲母微細を含む	明赤橙色 淡黄橙色	ヨコナダ～ヘラ状工具によるナデ～指先押圧ナデ ヨコナダ～指面押圧ナデ	上縁は小さく内傾し、その内傾面に複数の凹凸がある 外面上に2次被熱による赤变あり→支脚に転用? 赤变・渋色はやや細い		
95	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	6.8 8.3 13.2~13.5	質良好であるが、微細～小砂粒を比較的多く含む	明赤橙色	ナデ～指頭押圧ナデ～絞り 指頭押圧ナデ	上縁部は小さく内傾する→支脚に転用? 器台中の耳辺は1.4~1.6cmのU字形状の棒工具を使用		
96	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	7.6 8.1 14	質良好であるが、微細～石英粗砂粒を多く含む	明赤橙色	指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ	整形・調整とともに粗い	
97	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	9.9 9.6 14.8~15.1	質良好で、多くの微細砂と少量の石英小砂粒・赤鉄磁鉄を含む	明赤橙色	ヨコナダ～指頭押圧ナデ～絞り ヨコナダ～指頭押圧ナデ	全体的に歪みが著しく仕上げは粗い 上縁は内縮が顕著して支脚に転用?		
98	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	10.2 11.1 16~16.5	粗く、多くの細～石英小砂粒と少量の雲母微細～赤鉄磁鉄を含む	明赤橙色	指頭押圧ナデ 受け部・底部端はヨコナダ	上縁は大きく内傾し、口縁内と内側面に2次被熱による赤变あり→支脚に転用?		
									指頭押圧による押圧ナデ 受け部・底・底部端はヨコナダ			
99	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	10.8 13.2 16.5	粗く、多くの細～石英小砂粒と很少の雲母微細を含む	明赤橙色	指頭押圧ナデ	上縁は小さく傾き、2次被熱による赤变あり→支脚に転用? 調整・整形は粗い		
100	Fig18	82号溝	中層	共生	器台	10.4 8.4+ a	質良好で、微細～小砂粒を比較的多く含む	未焼成	くすんだ灰黒色	指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ	上縁は小さく内傾し、口縁内と内側面に2次被熱による赤变あり→支脚に転用? 調整・整形は粗い	
101	Fig19	82号溝	中層	共生	器台 (支脚)	11.6 12.4~12.8 16.4~17.1	粗く、多くの微細～細石と石英小砂粒の外に很少の赤鉄磁鉄を含む	明赤橙色	指頭～指先の押圧ナデ 下部:くすんだ黄橙色	上半:明赤橙色 下半:くすんだ黄橙色	調整は粗く、基部の凹凸が顕著 上半部に2次被熱による赤变がある 全体に歪	
102	Fig19	82号溝	中層	共生	器台	10.4 12.5 17	質良好で、微細～小砂粒を含む	明赤橙色	指頭押圧ナデ	上・下両縁の片側に2次被熱による赤变あり→支脚に転用?		
103	Fig19	82号溝	中層	共生	器台	10.1 12.5~13.7 16.5	質良好で、多量の微細～細石と少量の石英小砂粒と雲母を含む	明赤橙色	指先による押圧ナデ～絞り	上縁は内傾し、その前に2次被熱による赤变があり→支脚に転用?		
104	Fig19	82号溝	中層	共生	器台	9.4 11.1~11.6 16.9~17.3	質良好で、多くの細～小砂粒と比較的多くの石英小砂粒と雲母を含む	明赤橙色	指頭～指先による押圧ナデ	上縁は小さく内傾し、2次被熱による赤变がある 支脚に転用?		
105	Fig19	82号溝	中層	共生	器台	9 10.6 17.2~17.7	粗く、多量の細～石英小砂粒と很少の雲母微細を含む	明赤橙色	指頭押圧ナデ～絞り 指頭～指先による押圧ナデ	上縁は小さく内傾し、口縁と底部の内側面に2次被熱による赤变あり→支脚に転用?		
106	Fig19	82号溝	中層	共生	器台	8.9 11.6 15.2~15.7	粗く、多量の細～石英小砂粒と很少の雲母微細を含む	明赤橙色	ヨコナダ～指頭～指先による押圧ナデ ヨコナダ～指頭～指先による押圧ナデ	上縁は内傾し、その前に2次被熱による赤变がある 支脚に転用?		
107	Fig19	82号溝	中層	共生	器台	9.8 12.5 16.2~16.8	粗く、多量の細～石英小砂粒と很少の雲母微細を含む	明赤橙色	指頭押圧ナデ 上部:ヨコナダ 下部:ヨコナダ	上縁は内傾し、その前に2次被熱による赤变がある 支脚に転用?		
108	Fig19	82号溝	中層	共生	器台	9.4 10.7~11 17	質良好であるが、微細～小砂粒を比較的多く含む	明赤橙色	ヨコナダ～指頭押圧ナデ ヨコナダ～指頭～指先による押圧ナデ	片側面に2次被熱による赤变がある 支脚に転用?		

Tab.10 出土器観察表7

No	Fig	出土構	層位	時代	器種	法規(口径・ 底径・ 高さ) mm	胎	焼成	色調(上:内)(下:外)	調整(上:内)(下:外)	備考
109	Fig19	R2号溝	中層	共生	漆器	7.9 9.4 13.4~14.7	真質で、細石英小砂粒を比較的多く含む外に少量の雲母微細を含む	良好	淡黃褐色	指振押圧ナダ 指振・指先による押圧ナダ	上縁は内側が剥落で、2次被熱による赤変有り →支脚に転用? 無いと空である
110	Fig19	R2号溝	中層	共生	漆器	10~10.6 16.2+e	真質で、微細～細粒～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黃褐色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	一部には次被熱による赤変がある →支脚に転用? 全体的に歪みが剥落で整形・調整とも無い
111	Fig19	R2号溝	中層	共生	漆器	9.2~9.6 13.6+e a	真質で、微細～中砂粒と雲母微細・石英粗塊を含む	良好	くすんだ淡黃褐色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	外面には2次被熱による深い黒斑あり →歪み著しい 調整は無い 支脚に転用?
112	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 ミニチュア 鉢	4.8~5 3.7~4 4.5	真質であるが、比較的多くの微細～石英中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	清明橙色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	口縁部は直口して立ち上がる 器内は厚く、整形・調整との間に無い
113	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 ミニチュア 鉢	5.8~6.2 3.6~4 5.1	粗く、多くの微細～石英小砂粒と雲母微細を含むに含む	良好	清明橙色 淡橙色～淡黃褐色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	器内は厚く、整形・調整との間に無い
114	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 ミニチュア 鉢	7.6~8.2 2.7 4.2	真質であるが、比較的多くの微細～小砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	董赤褐色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	口沿部はナダ 調整は無い 化粧土巻布
115	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 ミニチュア 鉢	4.6 2.5 2.5~29	良質であるが比較的多くの細～小砂粒を含む	良好	明赤褐色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	
116	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 ミニチュア 鉢	5.9 2.2 5	真質で、微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡黃褐色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	口縁部は内湾ぎみに立ち上がる 整形・調整は無い
117	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 ミニチュア 鉢	6.9 3 4.1	真質で、微細～細砂粒と雲母微細・石英粗塊を含むに含む	良好	淡橙色～明赤褐色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ後にハケ目	口縁部はく字状をなし、ヨコナデ 化粧土巻布 ハケ目幅は約15mmほど無い
118	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 ミニチュア 鉢	7.9 4.6 5.9	真質であるが、比較的多くの微細～細砂粒を含む	良好	くすんだ淡黃褐色 淡橙色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	口縁部はストレートの外反 整形・調整は無い
119	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏ね 小型鉢	7.5 2.5~29 5.9	真質であるが、比較的多くの微細～細砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	清明橙色 淡黒灰色～清明橙色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ後に行なハケ目	口縁部はストレートに外反 ハケ目幅は2mm程度
120	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏ね 小型鉢	11.5 5 7.5	真質であるが、比較的多くの細～石英小砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	清明赤褐色	ヨコナデ～指振押圧ナダ ヨコナデ～ナダ	調整は無い
121	Fig20	R2号溝	中層	共生	小型鉢	12 6 8.7	真質で、比較的多くの細～小砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	清明橙色	ヨコナデ～指振押圧ナダ後に行なハケ目 ヨコナデ～様上げ状のナダ上げ	内外面とともに調整は無い 黒斑あり
122	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 小型鉢	10.8 4.4 7.4	粗く、細～石英中砂粒を多く含む	良好	董赤褐色	指振押圧ナダ ヨコナデ～押圧ナダ後に行なハケ目	ハケ目幅は3mmで調整も粗く、内面の押圧痕も明らかに剥落する 整形・調整とともに粗く剥落著しい
123	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏ね 小型鉢	12.3 5.6+e	粗く、細～石英中砂粒を多く含む	良好	董赤褐色	ヨコナデ～指振押圧ナダ ヨコナデ～指振押圧ナダ	
124	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏 小型鉢	10.8 4.2~4.6 5	やや粗く、細～石英小砂粒を多く含む	良好	明赤褐色内面には淡黃褐色部あり	指振押圧ナダ 押圧後にナダ	全体に歪みが剥落
125	Fig20	R2号溝	中層	共生	鉢(陶?)	14.7 10.7	精良で、微細～石英小砂粒と雲母微細・粒を比較的多く含む	良好	清明赤褐色	ヨコナデ～指振押圧ナダ ハケ目	口縁部内面に黒色物付着→2次被熱
126	Fig20	R2号溝	中層	共生	手捏ね 浅鉢(陶?)	12.4 5.5~5.8	精緻	良好	淡黃褐色	ヨコナデ～押圧後に行なハケ目 ヨコナデ～ナダ後に行なハケ目	ハケ目幅は1.5~2mmとやや粗い 外縁部下に淡黒斑
127	Fig20	R2号溝	中層	共生	鉢	13 4.4	精良	良好	明體色	ヨコナデ～ナダ ヨコナデ～ナダ	内底面はハケ目状工具によるヨコナデ

Tab.11 出土土器観察表 8

No	Fig	出土構	層位	時代	器種	法規(口径・底径・高さ/厚さ)	胎	焼成	色調(上:内)(下:外)	調整(上:内)(下:外)	備考
128	Fig20	R2号溝	中層	先秦	浅鉢	11.8 10 5.1	質良好で、微細～小鉢粒と雲母小鉢を含む	良好	淡赤褐色	ヨコナダ～指痕押圧ナダ ヨコナダ～ナダ	外面のナダは粗くハケ目状をなし 底部は上げ底状
129	Fig20	R2号溝	中層	先秦	鉢	14.4 5.4 7.9	質良好で、微細～小鉢粒の外に少量の雲母小鉢を含む	良好	淡灰白色 淡褐色	ヨコナダ～指痕押圧ナダ ヨコナダ～押圧ナダ	口縁部は小さく内傾 内外面ともに摩滅跡有
130	Fig20	R2号溝	中層	先秦	鉢	16.5～17.4 4.8 11	質良好で、多くの微細～小鉢粒の外に少量の雲母小鉢を含む	良好	透明褐色	ヨコナダ～指痕押圧ナダ ヨコナダ～猛上状の押圧ナダ	口縁部は直で横円形をなし、外面には黒斑がある
131	Fig20	R2号溝	中層	先秦	鉢	13.6 5.2 12	質良好で、比較的多くの微細～石英小鉢粒と少量の雲母小鉢を含む	良好	ややくすんだ赤褐色	ヨコナダ～指痕押圧ナダにヘラ工具によるナダ上げ ヨコナダ～押圧後に搔き上げ状のナダ	調整は無い 外面には墨様の黒色物有
132	Fig20	R2号溝	中層	先秦	鉢	25.8 6.9 17	粗く、多くの網～石英小鉢粒と少量の雲母小鉢、本鉢底小鉢を含む	良好	明赤褐色	ヨコナダ～指痕～先秦による押圧ナダ ヨコナダ～ハケ目	ハケ目幅は3mm 内外面ともに摩滅跡有
133	Fig20	R2号溝	中層	先秦	中型鉢	36 20.4+ a	質良好で、比較的多くの微細～網～小～中鉢粒と少量の本鉢底小鉢を含む	良好	透明黄褐色	ヨコナダ～指痕～先秦による押圧ナダ ヨコナダ～押圧後にハケ目	二字口縁下に1枚の三角凸角が巡る ハケ目幅は1～1.5mmで調整は無い 内外面ともに摩滅跡有
134	Fig20	R2号溝	中層	先秦	鉢	12 7+a	やや粗く、網～石英小～中鉢粒を多く含む	良好		ヨコナダ～指痕押圧ナダ ヨコナダ～押圧後にナダ上げ	外面口縁部下と台部に丹鉻色あり →丹塗りか?
135	Fig20	R2号溝	中層	先秦	手捏 ^{ミニチュア} 台付鉢	5.4 3.5+ a	質良好で、多くの網～石英小鉢粒と若干量の雲母微細を含む	良好	淡黃褐色	指痕押圧ナダ 指痕押圧ナダ	台土の苔類は不詳
136	Fig20	R2号溝	中層	先秦	丹塗り(口)無	13.8 (無形)	質良好で、微細砂量を僅かに含む	良好	淡赤褐色 朱色	指痕押圧ナダ ナダ後に丹塗り研磨	内面に化粧土施有
137	Fig20	R2号溝	中層	先秦	丹塗り(蓋)	13.8 (無形)	質良好であるが、少量の微細～小鉢粒と赤鉻色塊を含む	良好	淡黃褐色 朱色	押圧ナダ ハケ目	G3表面よりやや上に4.5mm径の円孔が3cmの骨において発見成形に穿たれている →穿が一対で斜角柱に穿たれていたもののハケ目は丹塗りが残るから口縁へ開孔からは3万円弱
138	Fig20	R2号溝	中層	先秦	蓋(無形)	16.6 3+a	質良好であるが、比較的多くの網～石英小鉢粒と少量の雲母微細、本鉢底小鉢を含む	良好	淡褐色～淡黒灰色 淡褐色	押圧ナダ ハケ目	口縁部から1cm上に直径が4～5mmの2枚の骨において発見成形に穿たれていたもの →穿が一対で斜角柱に穿たれていたもののハケ目は丹塗りが残るから口縁へ開孔からは3万円弱
139	Fig20	R2号溝	中層	先秦	蓋	33.2 6.6(側縫)	やや粗く、微細～石英小～中鉢粒を多く含む	良好	透明褐色	ヨコナダ～押圧ナダ後にハケ目 ヨコナダ～ハケ目	横みは2才、内面のハケ目は幅が3～6mmで無い 外側のハケ目幅は1mm余で上～下へやや細かい
140	Fig21	R2号溝	下層	先秦	陶盤裏	29.6 28.2+ a	質良好で、微細～繊砂粒と少量の雲母、赤鉻色片を含む	良好	明赤褐色	ヨコナダ～丁寧な押圧ナダ ヨコナダ～ナダ?	口沿部に網目 器面の摩滅跡有→丹塗りか?
141	Fig21	R2号溝	下層	先秦	蓋	7.8 12.3+ a	質良好で、比較的多くの微細～小鉢粒と少量の雲母を含む	良好	淡黃褐色～くすんだ赤褐色 くすんだ赤褐色～くすんだ赤褐色	指痕押圧ナダ	ハケ目幅は1mm 調整は内外面とも無い 外側に1次焼熱による赤変(?)有
142	Fig21	R2号溝	下層	先秦	蓋	8.8 11.5+ a	質良好で、比較的多くの網～石英小～中鉢粒の外に少量の雲母微細と本鉢底小鉢を含む	良好	淡黃褐色 淡黃褐色～明赤褐色	指痕～先秦による押圧ナダ ナダ後にハケ目 口部はナダ	外側には明赤褐色の化粧土を施有 ハケ目幅は1mmでやや細かい
143	Fig21	R2号溝	下層	先秦	丹塗り無	12.8 8.2+ a	質良好であるが、網～繊砂粒と云母微細を比較的多く含む	良好	淡灰黑色 淡灰黑色～くすんだ淡褐色	ヨコナダ～押圧ナダ ヨコナダ～ナダ	口沿部に2孔一対の円孔を火舟位に穿つ 外側の口縁下に丹鉻色があり、丹塗り無影の可能性が大
144	Fig21	R2号溝	下層	先秦	蓋	19.4 9.7 22.6	質良好で、多くの微細～繊砂粒と少量の雲母微細と赤鉻色塊を含む	良好	明赤褐色 くすんだ赤褐色	ヨコナダ～強い指痕押圧ナダ ヨコナダ～押圧後に搔き上げ状の粗いナダ	2次焼熱による赤変と黒斑がある 調整は全体に粗い
145	Fig21	R2号溝	下層	先秦	器台	10～10.7 8.6+ a	質良好で、微細～繊砂粒と赤鉻色小塊をやや多く含む	良好	淡黃褐色	ナダ 指痕押圧	變形、調整ともに粗い
146	Fig21	R2号溝	下層	先秦	器台	9.4 8.2 9.3	質良好で、微細～繊砂粒と雲母、赤鉻色小片を含む	良好	ややくすんだ橙褐色	指痕～先秦による押圧ナダ 紋り 指痕押圧ナダ	全体的に赤変無 調整とともに粗い

Tab.12 出土土器観察表9

No	Fig	出土遺構	層位	時代	器種	法寸(口径・底径・高さ)cm	胎土	焼成	色調(上:内)(下:外)	調整(上:内)(下:外)	備考
151	Fig21	R2号溝	下層	弥生	円滑り無形壺蓋	133~144 3.3	質で、比較的多くの微細な石英小・中砂粒の外に青母微細を含む	良好	明赤橙色 濃赤色(朱色)	指振押圧ナダ	外縁に二孔一対の穿孔有り 孔は外から内へ 外縁は左右へ天井部は口縁部から中央への舟型り研削
171	Fig30	2号井口	中層	土器		244 9+e	質で、角石片を含む	良好	灰褐色~茶褐色	ハケ目 ナダ	ハケ目幅は細かいが、調整は無い 外面には煤が付着
172	Fig30	2号井口	中層	土器器小皿		7 12+e	質で、赤鉄鉻塊と黄片を含む	良好	褐色	ナダ ナダ	底部は系切り 厚減が著しい
173	Fig33	12号井口	中層	土器器小皿		6.5 4.1 1.8	質で、少量の青母微細を含む	良好	褐色	ナダ ヨコナダ	口唇部~内面に油漬が付着→灯明皿に転用 底部は系切り
174	Fig33	12号井口	中層	土器器小皿		5.7 4.3 1.5	質で、小砂粒を徑かに含む	良好	淡褐色	ヨコナダ~ナダ ヨコナダ	口唇部外縁に油漬が付着→灯明皿に転用 底部は系切り
175	Fig33	12号井口	中層	土器器小皿		5.2 1.1+e	質で、少量の小砂粒を含む	良好	灰褐色	ナダ ナダ	底部は系切り
176	Fig33	12号井口	中層	土器器小皿		8 5.7 1.7	質で、黄片を含む	良好	灰褐色	ナダ ナダ	口唇部外縁に油漬が付着→灯明皿に転用 底部は系切り
177	Fig33	12号井口	中層	手捏 ^{ミニチュア} 器		2.2 2.3	質	良好	淡褐色	ナダ ナダ	内唇は凹口し、調整は丁寧 底面部に圓錐状の細い凹窪が基る
186	Fig36	63号井口	中層	甕(土器器)		13.8 15.6+e	やや粗く、細~小砂粒を含む	良好	淡褐色~灰褐色	指振押圧ナダ~ケズリ状のナダ ナダ	ハケ目幅は、1.5~2mmと細い 調整は全体に無い
187	Fig36	63号井口	弥生	甕		10.6 16.8+e	質で、中砂粒を含む	良好	灰白色~灰色	押圧~ハケ目・ナダ ハケ目~ナダ	ハケ目幅は1.5~2mmとやや無い
188	Fig36	63号井口	中層	甕(施生)		8.6 13+e	やや粗く、細~小砂粒を比較的多く含む	良好	灰白色	押圧ナダ後にハケ目 ナダ~ハケ目	内外面ともにハケ目は粗く、調整も無い 外面に黒斑有り
195	Fig42	81号土坑	中層	青磁器		9.5 3.4 2.7	質	堅硬	茶褐色	ヨコナダ ヨコナダ	底部はケズリ 底面の内側に目盛が残る
196	Fig42	81号土坑	中層	土器質火鉢?		14.4 7.1+e	質で少量の小砂粒を含む	良好	淡褐色	ヨコナダ ヨコナダ	外面に焦付着
198	Fig45	3号溝	中層	高环(頭飾器)		5.5+e	質で、少量の測量粘土を含む	堅硬	灰色	环・脚:ナダ 环・ナダ 脚:ナダ~カキ目	底部上半はカキ目調整
199	Fig46	20号溝	中層	土器器小皿		7.5 6.2 1.5	質であるが、小~中砂粒と赤鉄鉻塊を含む	良好	淡褐色	ナダ ナダ	底部は系切り
200	Fig46	20号溝	中層	土器器环		7.6 2.2+e	質であるが、少量の小砂粒と青母微細を含む	良好	淡灰褐色	ヨコナダ ヨコナダ	底部は系切り
201	Fig46	20号溝	中層	瓦質 埴立		34.4 19.6 13.8	質であるが、少量の小~中砂粒を含む	良好	淡褐色	ハケ目~ナダ ナダ後に一部ハケ目	ハケ目幅は2~3mmと粗く調整も無い 表面の剥みは幅広で深い
202	Fig46	20号溝	中層	瓦質 埴立		32.6 15.6 12.6	粗く、小~中砂粒を含む	良好	褐色	ヨコナダ~押圧ナダ? 指振押圧ナダ	内面は厚減が顕著
203	Fig47	B区西側	弥生	手捏 ^{ミニチュア} 器		10 2.6 5.9	粗く、小砂粒を含む	良好	黄褐色~褐色	指振押圧ナダ 指振押圧ナダ	

那珂遺跡群第149次調査出土の中細形銅戈鋄型について

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

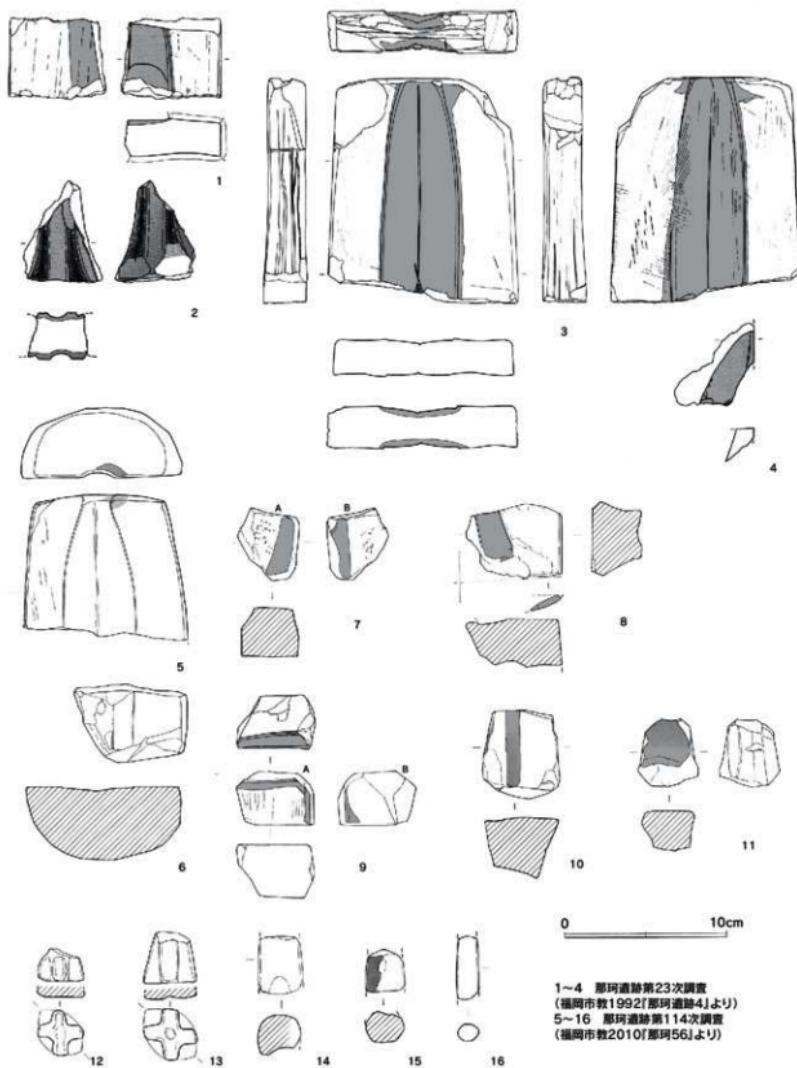
田尻 義了

本資料は那珂遺跡第149次調査のSD82溝上層から出土している。共伴土器の時期は弥生時代中期後半で、筒型器台や瓢形土器などが出土している。鋄型が出土したSD82溝は那珂遺跡第149次調査区に近接する第23次調査（下村・荒牧編1992）でSD44溝と報告されている溝と、位置関係や出土遺物の時期、堆積状況から一連の遺構と考えられる（Fig50）。この第23次調査SD44溝からも4点の鋄型が出土しており、第149次調査で出土した中細形銅戈鋄型を位置づけるためにも、それらの鋄型群との検討が必要である。また、付近には那珂遺跡群第114次調査区（吉武2010）が所在し、その調査でも鋄型をはじめとする鋄造関連遺物が出土している。本調査区を含めてこの周辺は那珂遺跡群の中でも鋄型が集中する地区であると捉えられ、付近に青銅器生産施設が存在したと考えられる。

第23次調査のSD44溝から出土した4点の鋄型の3点は、中細形銅戈が彫り込まれており本調査で出土した鋄型と同様である。Fig49-1は身の部分で両面に黒変が観察できる。Fig49-2は樋と脊の部分が鋄型両面に認められ、樋には綾杉文が施されており両面共に黒変している。Fig49-3は鋒部分が両面に彫り込まれた鋄型である。両面とも黒変が認められる。Fig49-4は黒変した鋄型破片であり、製作した製品は不明である。その他、黒変面は認められないが、鋄型を転用したと思われる石英斑岩製の砥石が4点出土している。

第114次調査では7点の鋄型と5点の真土型が出土し報告されている。Fig49-5と6は接合しないが、色調と質感から同一個体の鋄型として報告され、中細形銅戈b類が彫り込まれた鋄型である。鋒の一部に黒変が認められる。鋄型断面は蒲鉾形をしており、裏面の使用は想定できない。Fig49-7は両面に互い違いの方向で銅戈が彫り込まれた鋄型である。両面とも黒変しており、砥石に転用され彫り込みの凹凸が平滑にされている。Fig49-8は銅戈の援と胡が確認できる鋄型である。裏面は黒変しており、鋄型の断面形が台形状に広がっているが、裏面は破損しており両面范であるかどうか判断できない。Fig49-9は中細形銅戈b類と推定される製品が両面に彫り込まれた鋄型である。胡と内の一節が確認でき、第149次調査出土鋄型と残存部位は類似している。両面共に黒変している。Fig49-10は銅矛が彫り込まれていたのではないかと推察される鋄型転用砥石である。銅矛の脊と樋の一部と考えられ、図にあるようにその箇所が黒変している。砥石に転用されているため、彫り込みの凹凸はなだらかにされている。Fig49-11は黒変部が認められるが、製品を推定できない鋄型片である。なお2つの調査区で出土した11点の鋄型は、全て石英斑岩製である。Fig49-12~16までは銅矛の中子である。ハバキ部分に相当する12・13とその他は袋部の中子である。報告では中細形以前の型式に相当するとされている。その他、第114次調査では鉛が付着した取瓶片などが出土しており、近隣に青銅器生産施設の存在が推定できる。

第149次調査出土鋄型は、片面のみに中細形銅戈が彫り込まれた鋄型である。中細形銅戈は1つの鋄型の両面に彫り込む両面范がこれまでに10点、片面のみに彫り込みを行う單面范が第149次調査出土鋄型を含めて6点出土している。6点の内訳は上述した那珂遺跡第114次調査区出土のFig49-5・6（同一個体として1点）と福岡市東区伝八田遺跡出土品の3点、佐賀県櫟ノ木出土鋄型1点である。今後、3点と集中している伝八田遺跡出土品と今回の鋄型を含めた那珂遺跡出土の2点の関係を検討しなければならない。單面范と両面范の違いは、製作者達の石材の入手量と相関していると考えている（田尻ほか2012）。豊富に石材が入手できる際は片面のみの使用を行い、石材が少ない場



1~4 那珂遺跡第23次調査
(福岡市教1992[那珂遺跡4]より)
5~16 那珂遺跡第114次調査
(福岡市教2010[那珂56]より)

Fig.49 那珂遺跡群第149次調査区周辺出土鉄造関連遺物 (1/3)

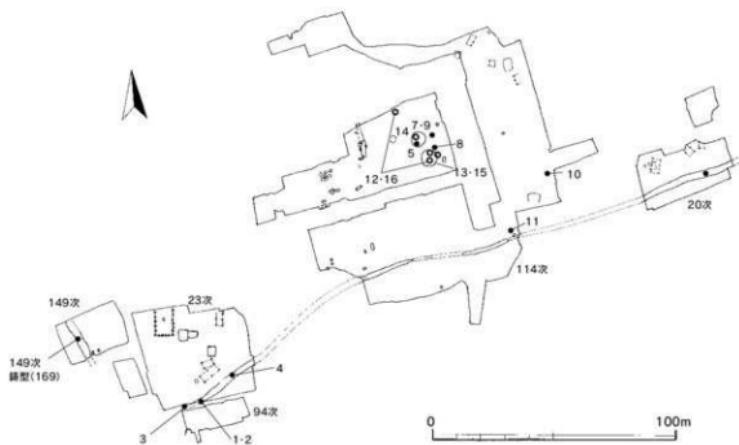


Fig.50 那珂遺跡群第149次調査区周辺出土鋳造関連遺物分布図

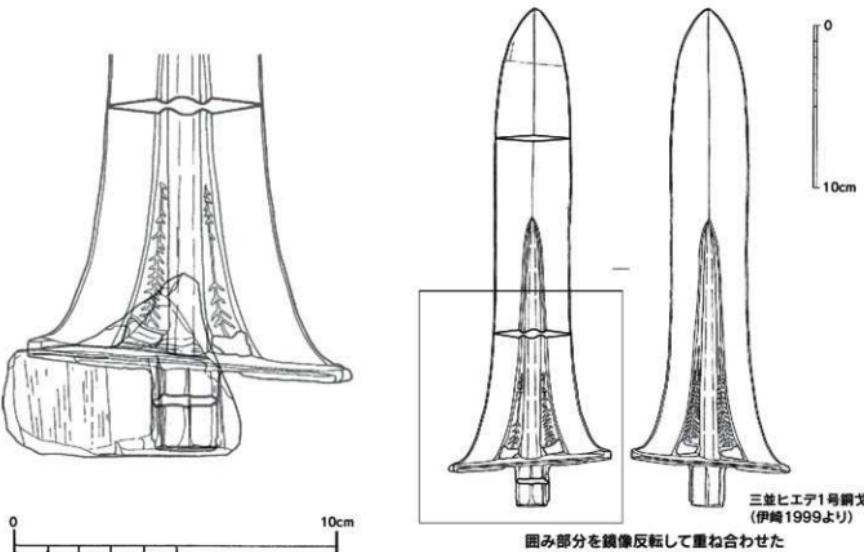


Fig.51 製品との重ね合せ図

合は両面を使用するのであろう。石英斑岩は那珂遺跡から直線距離で約40km以上離れた福岡県八女市を流れる矢部川河原で採取でき、運び込まれている（田尻ほか2012）。那珂遺跡出土の多くの鋳型が両面范であるのに対し、第114次と第149次の調査で出土した2点のみが中細形銅戈を製作する段階で単面のみを使用しており、興味深い資料である。

第149次調査出土鋳型で製作された中細形銅戈 b 類は、これまでのところ筑前町三並ヒエデで出土した1号銅戈（伊崎1999）に近い形態である（Fig51）。三並ヒエデ出土1号銅戈は全長30.6cmをはかる完形の中細形銅戈 b 類であり、内の幅や内と胡の角度、胡の残存している長さ、また内の表面に鋲出された1本の突線など、鋳型と製品は複数の箇所で類似している。最終的には鋳型と製品の実物同士の重ね合わせ、また製品と鋳型の三次元データを計測した後にデータ同士の重ね合わせを試みる必要があるが、図面同士の重ね合わせでは類似度が高い。三並ヒエデ遺跡では17本の銅戈が一部互い違いにされ、円筒形土器の中に埋納されていたとされている。また、報告では近接した調査区である那珂遺跡第23次調査SD44溝より、埋納に使用したとされる土器と類似した円筒形土器が出土していることも指摘されている。

したがって、第149次調査で出土した鋳型は、その鋳型で製作された製品、また青銅器生産関連で繋がり近接する第23次調査で出土した土器が、筑前町三並ヒエデ遺跡出土の銅戈や土器との関連を示している。今後、第149次調査周辺では筑後平野との関係を示唆する遺物等について注意深く精査すれば、さらなる展開が期待できよう。また、この調査区周辺では今後も鋳型をはじめとする鋳造関連資料の出土が想定できる。那珂遺跡における青銅器生産の実態把握のためにも、今後の調査が期待される。

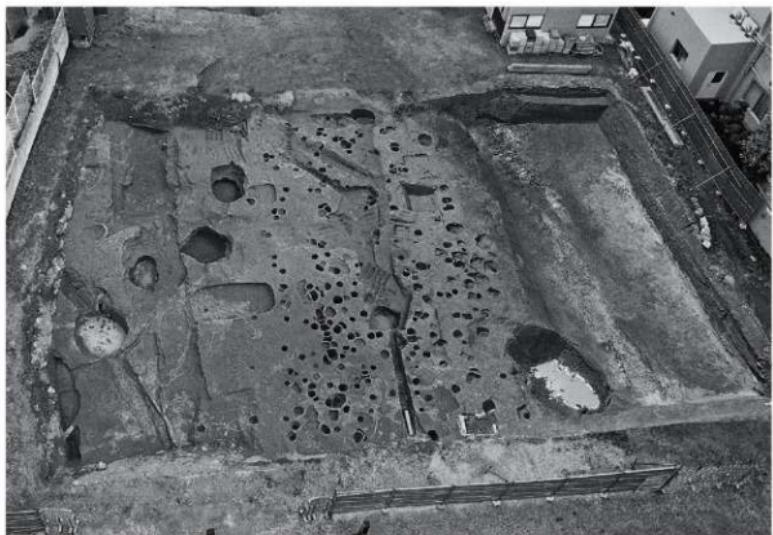
参考文献

- ・伊崎俊秋1999「福岡県夜須町出土の銅戈」『甘木歴史資料館報』1 pp.31-52
- ・田尻義了,足立達朗,中野伸彦,米村和絵,小山内康人,田中良之2012「弥生時代北部九州における鋳型石材の原産地同定と鋳型素材の加工と流通」『日本考古学』33 pp.95-112.
- ・下村智,荒牧宏行編1992「那珂遺跡4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集
- ・吉武学2010「那珂56」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1082集

P L A T E



1) I 区全景 (西から)



2) II 区全景 (北から)



1) 65・122号井戸断面(北から)



2) 65号井戸遺物出土状況 (北から)



3) 122号井戸遺物出土状況 (北から)



1) 82号溝全景（西から）



2) 82号溝土層断面（南から）



3) 82号溝北端部上層遺物出土状況（西から）



1) 82号溝北端部上層遺物出土状況（北から）



2) 82号溝北端部上層紡錘車出土状況（南から）



3) 82号溝中層遺物出土状況（南から）



1) 82号溝中層遺物出土状況（北から）



2) 82号溝中層遺物出土状況（南から）



3) 82号溝中層遺物出土状況（東から）



1) 82号溝中層遺物出土状況（東から）



2) 82号溝中層遺物出土状況（東から）



3) 82号溝中層石錐未製品出土状況（南から）



1) 8・17号住居（南から）



2) 9・14号住居、11号土坑（東から）



3) 19号土坑（東から）



1) 64号土坑（北から）



2) 64号土坑（東から）



3) 106号土坑（南から）



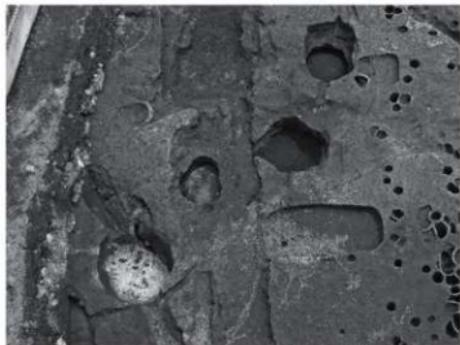
1) 2号井戸（東から）



2) 2号井戸（北から）



3) 2号井戸断面（西から）



1) 12・13・63号井戸、15号土坑（北から）



2) 12号井戸断面（南から）



3) 12号井戸底遺物出土状況（南から）



1) 12号井戸底遺物出土状況（南から）



2) 12号井戸ザル出土状況（南から）



3) 12号井戸鋤・曲げ物出土状況（東から）



1) 13・63号井戸（北から）



2) 13号井戸（北から）



3) 13号井戸断面（南から）



1) 63号井戸断面（南から）



2) 63号井戸底遺物出土状況（南から）



3) 15号土坑から63号井戸への流水路（南から）



1) 4号土坑（東から）



2) 11号土坑（西から）



3) 15号土坑（北から）



1) 16号土坑（北から）



2) 25号土坑（東から）



3) 81号土坑（西から）



1) 1号溝（北東から）



2) 3号溝（東から）



3) 10・20・21号溝（東から）



7



9



28



11



33



25



26



48



45



43



44



56



144



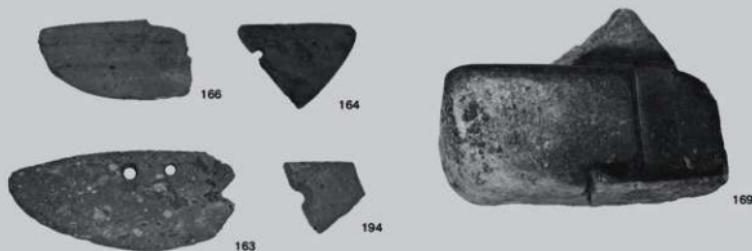
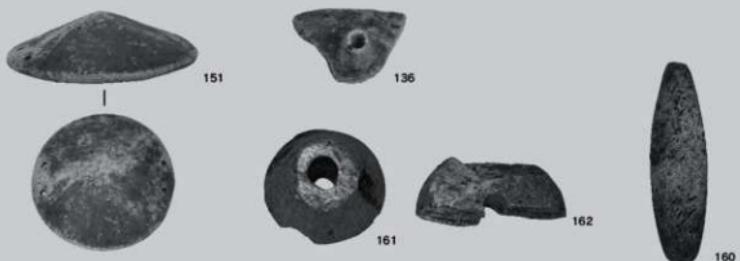
82



87



73



報告書抄録

ふりがな	なか						
書名	那珂 75						
副書名	那珂遺跡群第149次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1287集						
編著者名	小林義彦						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号						
発行年月日	2016年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
なかいせきぐん 那珂遺跡群 第149次調査	ふくわかし はかなく 福岡市博多区 竹下五丁目290番	40130	85	33° 34° 6°	130° 26° 4° ~ 20140407 20140808	599	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
那珂遺跡群 第149次調査	集落	弥生時代～中世	堅穴住居、井戸、 土坑、溝	弥生土器、石器、木 器、磁器、青銅器片、 銅戈鋌型			
要約	<p>那珂遺跡群は、福岡平野の西を北流する那珂川の中流域右岸の低丘陵上に立地し、すぐ東には御笠川が北流している。この丘陵は、春日市の奴国王墓とされる須玖岡本遺跡から井戸、五十削、那珂を経て比恵へと延びて博多湾へと続く。第149次調査区は、この那珂丘陵の中央部西縁に位置し、調査区の西縁には、那珂川の氾濫原が広がっている。すぐ東にある第23-114次調査区では、弥生時代中期後半の要棺墓や堅穴住居、土坑、溝などのはかに古墳時代前期の前方後方墳や方墳と中世の井戸などが検出されている。本調査区では、弥生時代～古墳時代と中世の遺構を検出した。弥生時代の遺構は、後期の井戸2基と溝1条のはかに古墳時代初めの堅穴住居3棟と土坑2基を検出した。また、中世の遺構は、井戸4基と土坑10基のはかに溝6条を検出した。このうち中世の井戸は、井戸底までの深さが4mにも及ぶ。遺物は、弥生時代の溝から鏡や甕、窓枠、器台のほかに銅戈鋌型片や青銅製品片とガラス玉・滑石製白玉・土鍤・石鍤・筋鉢車などがコンテナ130箱以上と中世の井戸からは竹製ザル・桶・篭や建築部材などの木製品が出土した。第149次調査では、弥生時代中期末～古墳時代初めの堅穴住居や井戸、溝と中世の井戸など集落に伴う遺構を検出した。このうち弥生時代中期末から後期の溝は、那珂丘陵の西縁に広がる氾濫原の理工大学に掘り込まれた幅が6～7m、深さが2mに及ぶ溝で、東隣の第23次調査区の南縁を東西流する溝に繋がっているものと考えられる。この溝は、更に東の第114-20次調査区へと延び、総延長は320m余に及び、この溝の終焉とその機能の検討は、那珂丘陵における弥生時代の集落域の展開と消長を考える上で貴重な資料となる。</p>						

那珂

- 那珂遺跡群第149次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告第1287集

2016年(平成28年)3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 高松印刷有限会社

